
神喰らいと魔法少女と ~魔法少女リリカルなのは×GOD EATER BURST~

蛟那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神喰らいと魔法少女と　　魔法少女リリカルなのは×GOD E
A T E R　　B U R S T

【Nコード】

N 8 7 1 5 R

【作者名】

蛟那

【あらすじ】

アラガミに喰い荒された世界に生きる者たちその名はゴッドイータ。

この物語はその中の一人が突然異世界に飛ばされたお話。そこにいたのは魔法少女とそれに絡む運命そして『神』・・・彼の答えは11/20As編突入！

注）此処の作者は素人です。ですが最後まで書けるよう努力します

プロローグ〈始まりの光〉（前書き）

初めまして蛟那といたします。誤字脱字その他諸々あるかと思ひます
がよろしくお願ひします。

プロローグ〈始まりの光〉

西暦2071年。地球は、あらゆるものを捕喰する細胞「オラクル細胞」から形成される異形の怪物「荒神」^{アラガミ}によって荒廃し、彼らの“食べ残し”である人類は滅亡の危機に瀕していた。

人類の対抗手段は、生化学企業「フェンリル」によって開発された生体武器「神機」とそれを操る「ゴッドイーター」だけだった。

そこに一人の新人が入隊した。彼は支部初の『新型』の使い手であるその後さまざまなミッションを得て力をつけ仲間との信頼を得たが第一部隊隊長がM I A（戦闘中行方不明）になり、フェンリル第一部隊隊長となった。

その後、前リーダーを救出するため「ハンニバル侵喰種」の討伐を一人で成功させた。

アナグラはつかの間の平穏が訪れかけた。

1 始まりの光

此処は、ゴッドイーターの拠点「フェンリル極東支部」のアナグラ内部

「あゝ……………」

「めんどくせー」

今溜息を吐いたのが、今の第一部隊隊長である。

先の戦いで魅せた輝きは、今見ると黒ずんだガラス玉のようだがこれが彼本来のスタイルである。

普段やる気のない彼の戦友は口をそろえて言うだろう「あいつ…普段と戦闘で全然違うだろ……………」

要は、口は変わらないが、動きに覇気があるという事だ。

それが彼のやる気の問題かアラガミ因子のせいかは、研究部でもわからない。

それはともかく、朝方極東支部のゴッドイーター全員にある任務が言い渡された。

早朝 アナグラ内ロビー

「今日は、旧暦でいう『年末』だ。そして数日後には新しい年を迎えるよってアナグラ内の大掃除を行う」

「ツバキさん掃除って言っても具体的にどうするんですか？自分の部屋ですか？」

命令したのが、極東支部第一部隊指揮・統括担当の雨宮ツバキ

それに質問したのが同期で入ったアサルトライフル使いの狙撃兵藤木コウタだ。

「うむ・・・実はターミナルのサーバーが長期メンテナンスする羽目になってしまっただ。各個人の倉庫整理が必要になった」

ターミナルとは、神器使いたちが使用する端末の事である。

主に神器使いたちはそれを使ってアラガミから取れる素材や服や消費アイテムも管理する。

更に新型となれば神器を強化するために使ったりもしている。

そのターミナルが本日メンテナンスのため使用不能になった。

つまり各個人の荷物が出し入れできないということである。

ちなみにメンテナンスは、”現”極東支部長のペイラー博士が行っている。

「・・・では各自！塵一つないよう、徹底的に片づけるように」

「で・・・どうよリーダー？なんか詰め込むものでもある？」

「コウタリーダーはあなたと違って倉庫には素材と服しかないんじゃない・・・」

話しかけてきたのはコウタとアリサだ。

アリサは、同じ「新型」神器使いで、最初はきつい性格だったが今は、完全に打ち解けている（一部コウタを除いて）

そして遠からずアリサの言うことは事実である。

「でも最近平和だね〜大型のアラガミ最後に見たのいつだったけ？」

「・・・確かひと月前のアマテラスが最後だと思います。」

この1カ月、大型のアラガミ達は見なくなり更に小型のアラガミも減少傾向にある。

「最後の出撃はリーダーが倒したたった1体のオウガテイル・・・なんだかアラガミが絶滅したんじゃないのかなって思えるよ」

「ところで、リーダーそれどうしたんですか？」

その手には彼の神器があつた本来は、格納庫にしまわれるのだが・・・

「ああ・・・この後少し外に行きたいからリツカに頼んで持ってきてもらった」

と、少しだるそうに答えた。

「まっその前に倉庫整理だけだな」

「何処行くんだよミッションもないのに・・・」

「少しぶらつくだけさ、外の空気を吸いたいからな」

「お前って本当っわかんねえ奴だな」

「ほっとけ」

と軽くあしらい自身の倉庫に向かった。

.....

倉庫内

「大体こんなもんか」

何だかんだ言っただけで早々整理が終わった。

「こうして見ると・・・何もないな」

素材に衣類その他アイテム・・・彼の倉庫はそんなものしかなかった

コウタは『バカラリー』の記憶ディスク持ってたな……

アリサやさくやさんは化粧道具とか……

ソーマは小さなアクセサリーがあったな『あいつ』のдар……

リンドウさんは昔の写真とか言ってたな……

「はぁ……めんどくせえ」

仲間の品を思い出し、『自分には何もないなあ』と思うがすぐに考
えるのをやめる。

「馬鹿ばかしいぜ……ん？」

ふと神器を見ると剣の柄……捕食の際に何かひっかかったんだろ
うか？

「なんだ？これ……」

取ってみると手のひらサイズの青い石だった

「……なんか書いてる」

変な記号だ 確か以前の講義でこの事を言われたような……

「博士に持っていくか」

そう思った時いきなり石が光った。

「ぐうあつ!!?!?!」

ドガアアーーーーン

アナグラ内に爆発が起きた。

プロローグ 始まりの光 (後書き)

なのは「もーいくつ寝ーるとーお正月ー」

???「お正月には寝むって喰って又眠って」

なのは「え？ 凧とかは？？」

???「いや腹減ったし眠いし」

なのは「それで・・・あなたのお名前は？」

???「いいんだよ めんどくせえ・・・」

なのは「えっ！ 全然よくないよ！！」

蛟那「次回は、リーダーの名前が出てきます」

第1話〜それは不思議な味〜（前書き）

2011 6 / 4 後付け設定に最後らへんに1文追加

第1話　それは不思議な味

第一話

それは不思議な味

ゴーンゴーン

海鳴市の夜の街に除夜の鐘が鳴り響く

今日は12月31日大晦日皆家族とともに新年を迎えようとしている。

私、高町なのは。

私立聖祥大付属小学校に通う、小学2年生。

ここ高町家においては3人兄弟の末っ子さんです。

「はいあ〜ん」

「はははっあ〜ん」

高町家の両親はまだ新婚気分バリバリです。

「父さん母さん少しは場を分け前たらどうだ？」

「どの口が言うのよ・・・自分だって忍さんとああよ」

「なんだと？いったいどこが？？」

「はあ」

お兄ちゃんとお姉ちゃんもとっても仲良しです。

愛されてる自覚はありますがなのは、もしかして非常に浮いてる
かもしれません。

それはともかく今日は、大晦日来年は、もっといい年にしたいな。

ゴーンゴーン

そんな風になのはが思ってるうちに、現在23時58分新年まであ
と少しである。

「おっともうこんな時間か少し残ってしまったな」

「仕方ないですよ作りすぎちゃいましたから。後は朝にでも食べれ
ばいいんじゃないのかしら？」

「そうだなそれじゃあカウントダウンでもするか？」

士郎が提案しそれにはずかしながらも皆その提案に乗る。

「しかしカウントダウンなんて子供みたいだなあ」

「お兄ちゃん私まだ子供だよだよ」

「ああごめんなのは・・・頼む拗ねないでくれー」

「ふふっ 恭也も子供ね」

恭也のぼやきになのはは頬を膨らませ困らせ、それを見て微笑む美由紀と両親

とても温かい家族の光景だった。

そうしてカウントは5秒を切った

「4」

「3」

「2」

「1」

ドガーーーーー

ガラガラガラ

本来『0・あけましておめでとう』のはずが突然の爆発音で全員驚いた。

「なっ！ なんなんだいったい!?!」

「皆大丈夫か？」

恭也が驚き、士郎が注意を促す

「ええ……なんとか」

「うん平気」

「大丈夫よ」

「しかし何なんだ一体？」

「……よし少し回ってくる、皆は此处にいなさい」

「あっ父さん俺も行くよ」

「ええ気をつけてね2人とも」

「お父さんお兄ちゃん気をつけてね」

こうして士郎と恭也が探索に出かけた。

.....
なのは

「お父さんお兄ちゃん気をつけてね」

そうは言ったけどなんだか不安だよ・・・せつかくの大晦日だったのに

「大丈夫お母さん？」

「ええありがとう美由紀でもどこからなんでしょう？」

家で思い当たるのは、お父さんたちが修行してる『道場』の方かな？

「あら？なのはどこいくの？」

「ああうんトイレ」

「そう、気をつけるのよ」

「・・・いいの？一人で行かせて？」

「そうね士郎さんや恭也は『付いていく』とかいいそうだけど・・・今はいいしね」

お姉ちゃんの問題をお母さんはそう流した。

とはいっても確かにお父さんたちならそう言いそうで少し怖いなあ
.....

「ここかな？」

私は道場に入ってきた

中は暗いし真冬だからかなり寒い。

「これ何だろう？」

道場では見られない服やズボンがばら撒かれていた。

だけど、私の勘は当たったみたい。

すぐにお父さんたちを呼べばよかったと思ったけど何故だか踏み込もうと思ったの。

「誰のだろう？」

お兄ちゃんのじゃないよねこれ？ 明らかに小さい私と同じくらい
の.....

ガタッ

「きゃあ!?!」

ドサッ

何かに足が引つ掛かった・

だけど胸辺りに何かあつて衝撃が和らいだ。

「ふみゆ〜」

「もがつ・・むぐう」

「きゃあ!?!」

「くつ???. . . 誰だお前?」

いきなり胸元に声が出たと思ったら、そこに顔を持ってこられ聞い
てきた。

その声は、やる気がないというか・めんどくさそうに聞こえた。
だけど目はしっかり私を見て、観察してるように見えた。

私と同じ年ぐらいの男の子、目と声はだるそうだけどなんだか・

「えと・・私は・

誰か来た！此処の住人か？

息を殺した瞬間に戸が開く音がした。

「ここかな？」

声が聞こえる、声からして女性・・・いや女の子だろう

なんか面倒になるからこのまま奥に引っ込んでおくかな？

「誰のだろう？」

女の子が部屋の衣服を見て疑問に思ってる。

何だあの服？やけに小さいがどっかで見た事あるのは気のせいだろうか？

「きゃあ!?!」

えっウソ嫌な予感

ドサッ

「ふみゅ〜」

「もがつ・・むぐう」

なんだ?いきなり柔らかい板が降ってきた。
息出来ねえ苦しい。

「きゃあ!?!」

「くっ???.誰だお前?」

やっとの思いで引き剥がしたらなんか女の子だった。

「えと・・私は.....」

?なんで顔が赤くなってるんだ??こいつ熱でもあるのかだったら
早く寝なきゃダメだろ子供なんだから。

それに何だか外もつるさk.....

「どうしたなのは!?!」

誰か来た。

「.....何だ貴様は-----!?!?!?!?!」

リンドウさんくらいの男がオウガテイルのような形相で叫んできた。
なんだか面倒なことになってきたな……

その後あのオウガテイルのような男と後から来たこの子の父親が俺に殺す勢いで掴みかかってきた。

幸い母親らしき人が仲介に来たのでなんとかその場は収まったが俺の平穩はまだまだ来ない。

先ずは説明しないとな。

「それじゃあどこから来たかもわからないのか？」

「はい……ここ『極東支部』じゃないんですよね？」

「よくわからないが此処は日本の海鳴市だ」

日本・・・前に博士の講義であった極東支部の昔の名前だ・・・
でもこれはどういうことだ？

「アラガミって知ってますか？」

「？アラガミ何かの神様の名前か？」

知らないみたいだどういう事だ・・・あっそう言えば前に博士が・・・

『この世界はアラガミによって成り立っているが・・・もしアラガミがいないとどうなるかな？』

『・・・さあ思いつきません』

『もしそうなら人間や動物や自然と共に素晴らしい調和で生きていけるんじゃないのかな？』

『・・・無論人間が悪い事をしなければ・・・ね』

そう考えれば説明がつかない、此処はアラガミのいない世界だな。

だがどう説明しようか・・・いきなり『異世界から来ましたなんて』
信じてもらえねえからな。

「所で君は誰だ？見たところなのはと同じくらいに見えるが・・・」

うん・・・何故か俺の体が縮んでいた。

大体アナグラでいうエリックの妹やうろついでる子供くらいに・・・

ついでにここでいうとなのはぐらいい。

でも今いくつだっけ？確かそろそろ酒が飲めるって聞いたから17
〜19だとは思っけど・・・

「たぶん・・・8歳くらいだと思います。親がいないんで自分の誕生
日ってやつも曖昧何で」

「むっそ・・・そうか」

そう言ったらなんだか周りの空気が沈んだ。

やはり暗い話になってしまったか。

「あっそういえば なまえ・・・名前はなんていうの？」

とりついたようになのはが質問する。
確かに名乗った方がいいたろう。

「キヨウ・・・」

「えっ？」

「暁 鏡それが俺の名前」

「キヨウ・・・か恭也と似た名前だな」

「父さんそれ本気？」

士郎さんは笑い恭也さんは少し不満げである。

しかし温かい家族だなここは・・・なんだか気が抜けて・・・

ぐううゝ

おっと腹の音がなくなってしまった・・・朝何食ったっけ？トウモロコシ一本と米もどきだったかな？

「あらお腹がすいてるの？」

「ええまあ・・・全然食べてなくて」

アナグラ内でも食料は先のトウモロコシぐらいなので嘘じゃない。

「じゃあこれでも食べる余りものだけど？」

「おい母さん！」

「良いじゃない恭也・・・それに子供なんだから」

「そつだぞ恭也大人げないぞ」

「そつだなのはこれもいいでしょ出して？」

「あつうんいいよ」

「何？まさかなのはの手作りじゃあ？」

「麵こねただけよ はいどうぞ」

「・・・」

「？鏡くん どうしたの食べないの？」

「・・・ああいやそのこれどうやって食うの？」

出されたのは湯気がほかほかいいにおいがする汁物と中には、なんか灰色の細長いものが大量に入ってる。

更に出されたのはスプーンやフォークじゃなくて木の棒2本これでどうすんだ？っていうか・・・食べるのこれ？

「もしかして箸も蕎麦も知らないの？」

「橋？傍？」

「あーちがうちがう教えてやるからよーく聞けよ」

士郎さんに言われるがままに食べ方を教わった。

箸の使い方はコツが要るらしく悪戦苦闘した。

何とか持って動かせるようになった（形だけは）

そしていよいよ『蕎麦』初めて麺を食べるのは手作りらしいがとにかく食ってみるか。

ズルズルズルっ

モグモグ

「どう？おいしい？」

モグモグ

「どうかしら？」

モグモグ

「はいたら殺すころs）rZ「」

もg

・
・
・
・
・

「あっ
」

「……………うめえ
」

「うまいぞこれ世の中うまいと思うもんってあるんだな」

「あ……ありがと……」

「なのはありがとう 桃子さんもありがとございます、なだくつ
ていいですか？」

「ええ……でもその前に」

桃子さんはいきなり俺の顔にタオルで拭いてきた。

最初は訳が分からなかったけど、見ると少し濡れていた。慌てて近
くの鏡を見ると。

泣いていた 無意識だが俺は泣いていた

「俺まだ泣けたんだ」

「えっ？」

「あゝいや何でもない」

なのはに書かれそうになったので慌てて蕎麦を流し込む。

しかし流し込むように食ってもうまかったがさすがに詰め込みすぎた。

士郎さんと桃子さんに「もう少しゆっくり食べるように」と教わったごもつともだ。

そして蕎麦を食い終わった俺は、今後の身の振りについて相談した。

「それで・・・俺どうしたらいいですか？」

「君はどうしたい？」

「・・・一応家があるんですけど行く算段がないんです」

正直手詰まりだ金ではなく運が必要なんだから。

「じゃあしばらく家にいるか？」

「！でも何で？」

「うゝん桃子さんとなのはの料理をおいしそうに食べてくれたからかな？」

「あらあら士郎さんったら／＼／」

当然の疑問を、適当(?)な理由で片づける土郎さん。やれやれこの人はなんかリンドウさんに似てるな。

「じゃあお言葉に甘えて……お願いします」

こうしてしばらくこの高町家に居候することになった。

仕事ができるかどうかは分からない、だが何もしないというのも俺の意に反する。

仕事に関しては色々教わるとしよう。

気になる事と言えば、恭也が何やら殺気だち、なのは俺を熱く見ている。

ふむ……やっぱり道場でこそそそしてたのが駄目だったかなあ。

すぐに荷物は片づけた。

何故か小さくなってる服に、カンストしている換金アイテム、アラガミ素材はない……これはいったいどういう事だ？

ギユ

そして埋もれた荷物の中から見つけた大切な物を握る。

「まあいずれわかるだろう、それまでにこの生活に慣れておかないとな」

明日から面倒になるな。

なのは

「ふう〜どおつしよつ」

さっきのあれでまだ胸がドキドキする。

鏡君はあれは何ともないらしいし聞いたらすぐに謝ってくれた。

それで気になるわけじゃないんだけど・・・

「気になると言えば」

あれの時に見た目と声意外に感じた鏡君の本質。

それに何で蕎麦がおいしいだけで泣いたりしたんだろう？何も知らなさそうだったし。

「まだわからないけど一緒に暮らせばわかるk・・・／／」

また顔が赤くなった。

「シテシテシテ」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

?あれ??なんか忘れてるよつな・・・

「あつ神器がねえや」

第1話〜それは不思議な味〜（後書き）

鏡「初詣か・・・初めてだな」

なのは「私がいっしょに案内するね鏡君」

鏡「ああ、たのむぜなのは」

蛟那「その前にちょっと質問タイム」

鏡「？なんだ作者 俺の名前のことか？」

蛟那「その通り」

蛟那「この話のように『鏡』か 『キヨウ』 どちらが見やすいですか？」

なのは「わざわざ聞く事なの？」

蛟那「主にやる気と方針について何で皆さま御意見お待ちしています」

主人公設定ㄥ暁鏡ㄥ完成（前書き）

今回は、主人公設定です。

話数進めていくことに更新されるので是非チェックしてください。

ストーリーとしては、本編終了+ストーリー100%でひたすら素材集め

et cetera状態です。

現在目算100%

主人公設定〜暁鏡〜完成

名前

アカツキキョウ

暁鏡

容姿：ツンツンヘア 髪の色：群青

目つきは鋭い<眠い>

身長≡無印≡136cm

年齢≡無印約9〜10

目の色 碧

<ゴッドイーターキャラクターエディット番号 上から>

ヘアスタイル 5

ヘアカラー 15

フェイス18

スキン1

ボイス15

<好き>

おいしい料理<麺類> 仲間 昼寝

<嫌い>

仲間を傷つける奴 初恋ジュース 騒音

水泳かなづち

服 家 トップス パーカー(ジョー)黒 ボトムス パンク (

パンサー) 赤黒

外 スニーカー(ノワール黒 ルージュ赤)

店 ボーイ(ジェラテリア)

バリアジャケット F制式スニーカー (白と桜色を基本に背中に
金色の狼が目立つ)

声 三浦祥朗

<性格> やる気が皆無で覇気もないような印象を受ける、目が鋭
いのは普段から眠いたため起きるとギラつく(なのは談)

何処となくクールな印象を受ける場合も・・・

だが確かな信念を持ち、自分の意に反すること、仲間が傷つけられ
たら手がつけられない

口癖『めんどくせえ』

武器 <神器> 歌劇

デバイスの変身参考||仮面ライダーアギト<バーニング>

刀身

バスター

<幻影大剣> 160 160 0 火300 神275 火被

ダメージ減少 スタミナ 大 チャージ攻撃力 ㄣ

銃身

スナイパー

<トスカ 滅> 10.60 3.70 1.00 1.00

1.00 5.90 オラクル 中 空中ジャンプ 消音 ㄣ

装甲

シールド

<オルケストラ> 790 760 670 630 630

630 740 切断攻撃力 剣の達人 生存本能 神医

~

発動スキル

火被ダメージ減少

スタミナ 大

チャージ攻撃力

消音

切断攻撃力

剣の達人

生存本能

神医

オラクル 中

空中ジャンプ

チャージ速度

デバイス >スヴェルグ<

主たる鏡に忠義を尽くす感じで仕事もプライベートともに、抜ける主にフォローは欠かさない。

形状は腕輪。左腕にしている。だが右手についてあるゴッドイーターの奴より小さい。

イメージは、リボーンのボンゴレギア雲のブレスレット。

戦闘では神器主体で闘うためバリアジャケットとセンサーとサポーターとして神器がない場合は……

デバイス効果

(属性強化) 剣の属性<火・神>と銃の弾の属性<火・氷・雷・神>を倍に強化する

(OP常時回復) バースト状態以上に何もしなくともOPを回復する
(フルドライブ) フルドライブ+バースト||バーストドライブ||リミットブレイク

(エリアルウイング) どんな状態でも足場を作り歩ける。上下左右可能。

原理としては風・空間に魔力を込めた感じ。

(チャージクラッシュ威力+範囲増大)

(無印以降)

光狼牙

シャイニングブレードの簡易版でも威力大!

シャイニングブレード

アリシアとユニゾンした状態。攻撃力のう防御力機動力が上がり金色に輝き柄が変化する。

羽のように軽くなり、バスターであり得ない振り回しが出来る。但し制限時間つきの回数制限等もあるので対人戦くらいしか使わない。

左腕の腕輪スヴェルグから強い金色の光を放つ。出力は魔力で最大1回戦闘8回まで。

スタングレネードの魔法版。

(武器型)

スヴェルグを武器型に出来る
詳細は不明

<スキル>

神斬牙

デバイスなしでのCC。

アリシア等の作用で通常のCCよりは威力が大きい

ブレイクザンパー
神破一閃

デバイスあり渾身のCC

無印以降(追加)

スターライトレーザー

スターライトブレিকা の簡易版

プラズマキャノン

フェイトのザンパーの砲撃版

>トラウマ<

アマテラス

主人公設定↘暁鏡↘完成（後書き）

全部埋められてよかった。

第2話〜想い〜（前書き）

蛟那「やったー累計1000pv……」発狂

鏡「まじかよ……まだ前置きと1話ぐらいしかやってないぞ」

なのは「後設定くらい」

蛟那「自分でもにやけてますよなんか嬉しくて」

鏡「だけどまだ感想なんてもらってないだろ」
グサツ

なのは「駄目だよ鏡君感想どころか評価もまともに1ヶタなのに……それに感想だつて「ユーザー以外でもできた方がいいかな」って思っただくらいだよ」
グサグサグサツ

鏡「やめるなのは作者はもう虫の息だ……」

なのは「あつ ほ……本編どうぞ……!」

第2話　想い

1月1日午前7時前後

「・・・・・・・・かー」

高町家のの空き部屋。

本来ここは、人ではなく主に物置だった。

「かー（orz）」

だが急ぎよ人が住むことによりわずか1時間で蒲団が敷けるスペースと掃除が施された。

「k・・・・・・・・ぐむっ」

「・・・・・・・・何処だここ？」

そしてこの部屋の住人は目を覚ました。

「えーと俺どうしたんだっけ・・・・・・・・」

思考回路がまだ働かない鏡は、10秒ほど考え。

「とりあえず飯だ、着替えて階段降りるか」

何故かきているパジャマを脱いで黒のパーカー、下はパンクを着た。

「今日も朝からトウモロコシかな？」

鏡はまだ寝ぼけていた。

鏡

「あれ？アナグラってこんなだったっけ？」

部屋を出るといつもゴツゴツした感じの廊下ではなく落ち着いた感じの廊下だ。

「ああ、おはよう鏡君」

「おはようよく眠れたかい？」

「あつえとっ・・・おはようございます」

下のリビングには、2人のいた。

1人は新聞を見て椅子に座ってる男性、もう1人は台所から料理を運ぶ女性。

まだボケてて分からなかったがようやく思い出した。

俺異世界に来たんだ。

「それで、この料理は？」

「ああごめんなさいどうせならもっと作りこみたかったけど出店とあるから」

「えっいやでも、おいしそうですよ」

「それはおいしそうじゃなくて おいしいに決まってるだろ？」

「あつおはようございます・・・恭・・・也・・・さん」

「何か含みのある言い方だな？」

「すみませんまだ寝ぼけてて・・・」

事実だからしょうがない。

「もう突っかかっちゃ駄目よお兄ちゃん、あっおはよう鏡君」

「おはようございます美由希さん2人は今起きて?」

「いや、俺と美由希は道場でひと汗流してたんだ。さっきまで父さんもいたけどな」

へえ、この人たちはみんな早起きだ。

あれ?なんか足りない気が??

「ああ気がついた?なのはだけなのよ朝に弱い」

「そうだなそろそろ朝ごはんだし起こしに行くか」

「いやここは俺が・・・」

士郎さんと恭也さんがござってなのはを起こしに行こうとする。

ふむあれが俗言つ『親馬鹿・シスコン』というものか・・・コウ
夕を思い出すな。

そこら辺は面倒だから勝手にしてくれれば・・・?なんだ美由希さんと桃子さんがアイコンタクトしてるぞ。

「士郎さんちょっと手伝ってもらえますか？」

「お兄ちゃんちょっと道場に落とし物しちゃったから一緒に探してくれる？」

「ん？ああいよいよ」

「なんだとしようがない奴だな」

「そつだ・・・鏡君なのは起こしてもらえないかしら？」

計ったように、2人を追い出し俺に指令を出すとは・・・策士だな桃子さん。

乗せられるのはしゃくだが まあ起こすことは問題じゃない。

そして2階にあがりなのはの部屋の中に、感想は普通に女の子の部屋というものだった。

「おい、起きろ」

「ふみゆ〜」

何度かゆすり起こそうとするが

起きそうにない どちらら本当に朝が弱いらしい。

ただどこかで引きさがるわけには・・・今度は顔を中心に攻めて。

「起きろ〜」

「むぬゆ〜」

「ぬおっ???」

いきなり手を掴まれた。

何だよいきなり・・・くそっ何か温かい。

「〜」

「へ?」

ガブツ

「いでっ!?!」

噛まれた? 噛まれたぞ?? 寝ぼけて噛みやがった。

「あむあむ」

いやいやあまがみされてもおいしいわけじゃないんだが・・・

辛い痛みも引いてきて改めてなのはを見る。

「しかし寝てるとかわいいなこいつ」

それになんだかあまがみされてると眠気が……

「寝るか」

即決で寝ることにした。

さすがに布団に入るわけにもいかないのととりあえずあえず、枕元に座って寝ることにした。

なのは

「あむうゝん？」

朝だ・・起きないと、元旦だから今日の最初の出会いはどうなるかな？（去年は恭也）

あれ？なんか息が苦しいしかも何握ってるんだろ私？

「ん……」

「くかー」

その後、何とか皆が来る前に鏡君を起こして皆で朝ごはんを食べた。お父さんとお兄ちゃんはその音に疑問を持ったけど何とかはぐらかした。

お母さんとお姉ちゃんは少し残念そうにしていた。

鏡くんは、『ああ寝てた、ごめん』といって終わりにしてくれた。

鏡

朝飯を食べた後、皆で『初詣』に行くことになった。

当然どんな行事か知らない俺は土郎さん達に助けを求めた。

「初詣は一年の感謝を捧げたり、新年の無事と平安を祈願したり、神様に挨拶する事だよ」

「神様ねえ」

アラガミのいないこの世界では、それも当り前なのだが、今まで『神様』と闘っていた俺には、少々複雑な気持ちはあった。

「おまたせー」

振り返ると女性陣は着物に身を包んできた。

桃子さんは淡い桃色

美由希さんは淡い赤そして白い花があった（梅）

どちらも大人の女性という感じだった。

「き・・鏡君これ・・どうかな？」

そうして見せてくれたなのは着物姿。見れば白をベースに桃色の花がところどころ入れられている。

この柄は確か桜という花だったな。前に資料で見たのと似ている。

「似合ってるなそれ」

「／／えへへありがとう」

「鏡君。ちゃんとなのはエスコートしてね」

「何?!それは俺の・・・」

「お兄ちゃんは忍さんがいるでしょ会う約束してたじゃない」

「ぐっ・・そ・・それは・・・」

何やらもめているが、初詣とやらに行くか。

「海鳴神社」

「長い階段だったな」

「まさかこれぐらいではてるんじゃないだろうな？」

「そういつわけじゃないですけど・・・結構人いますね」

「そうだなほらこれ」

「？なんですか・・・これ？」

「お金だよそれで賽銭に入れてお祈りするんだよ」

「？この紙を??？」

「ふふ ちがうわよ入れるのはその5円玉後は周りの出店で何か買えばいいわ」

これがこの世界の金か覚えておこう。

そして土郎さん達に『一拝 一祈念 二拝 四拍手 一拝』を教わった。

手を合わせ神に願う。

……何願おう???

『とりあえずゆっくり寝られますように、後恩返しができますように』

「何お願いした？」

「とりあえず眠れるように」

「そんなのでいいの？」

「どうせ当てにしてないよ、それに祈るだけじゃだめだからなこつ
いっの」

「ふーん ねえ」

「何だなの？」

「これから回らない？」

それは願ってもない事だ何せこついっのはわからないからな。
こつは素直に甘えるか。

「ああ頼むぞなのは」

「任せて鏡君」

「綿飴」

「何これ？」

「綿飴だよ」

「うおっ甘！べたつく！！」

「焼きそば」

「うまいなこれしかし味が少し濃いな」

「仕方ないよソースの元市販品だもん」

「ん？この赤いのは・・・」

「あつ鏡君駄目！！」

「ゴホッゴホッ！！？？なんだこれ？」

「あゝあ」

「射的」

パソコンッパソコン パソコンッ

「すごい鏡君全弾命中だよ」

「だけど威力がないなこれ・・・改造した方がいいんじゃない・・・」

店の親父はじつとこっちを見ている。

「やゝめた」

「なんで？まだ一つも・・・」

「いくらやっても無駄だよこれは・・・それより飯食った方がいい」

「うゝでも・・・」

「・・・やるよ」

「え？」

「ああいうのがほしいなら今度作ったり拾ってやるよ」

「うん／＼」

なのはがうれしそうに笑った。

さて何を渡せばいい事か？

――

一通り見まわると、恭也さんと女性が一緒に歩いていった。

その光景は、リンドウさんとサクヤさんみたいに仲のいいものだった。

「なのはあれは？」

「忍さんだよお兄ちゃんの彼女」

「へえ彼女なんていたんだあの人」

「そうだよおどろいた？」

「昨日今日会ったばかりだけど素直に驚いたな」

「あつなのはちゃん、あけましておめでとう」

「すすかちゃんおめでとう」

「なのはちゃん隣にいるのは？」

「昨日から居候することになった暁 鏡君
鏡君この子は私の友達の月村すすかちゃん」

すずかは、長い青髪に合わせるように白と黒の着物だった。

「俺は暁 鏡・・・まあよろしくすずか」

「初めまして月村すずかですよろしくね鏡君」

その後3人で色々と話した。

海鳴市のことだったり、もう一人の友人だったり

それに驚いたのは、恭也さんの彼女とすずかが姉妹である事だった。
・・・世の中分らないものだ。

「ふーんあれは？」

ふと境内の中を見た俺は質問した。

中には大人並の大剣と黒い鏡と碧色の石があった。

「あれはですでも聞いた話だと贗物なんですって」

「それでも剣の方は本当に重いんだって聞いたよ」

俺の疑問にすずかとなのはが答える。そんな話をしていると・・・

「うーどきやがねー」

「けっけっけ酒だ酒持ってこい」

「酔っ払いか」

いい年の中年男3人ほどが酔っ払っていたこういう輩もいるのか・

「関わりたくないから向こう行くぞ・」

俺は小声で注意を促しこの場を後にしようとしたが

「おいこらガキどもー何見てんだあこら」

ろれつが回らない癖に絡んできやがった・・・うざい。

「きゃあ」

「なのはちゃん」

いきなりなのはを掴んで持ち上げた・・・なんだこれ？

そう思ってるとさすがに反抗した。

「なのはちゃんを話してください」

「おめえもつるせえなあ」

「きゃあ
」

今度は、すずかに手を出そうとした、この野郎1発殴ってなのはたち連れて逃げるか……
本当にそう思った時

「お父さん……お兄ちゃん……鏡君……」

ガシッ

「？鏡君……」

「なんだこの小僧……」

なのはの声が聞こえ 無意識に男の腕をつかんでいた。

言いたい所とは多々ある更に言えば『お前らとかかわりたくなかった』……とりえず

「……てめえらむかつく……」

なのは

油断してた振りほどこうとしても相手は大人力で勝てない。

何よりお酒臭くて気持ち悪かった。

「お父さん・・・お兄ちゃん・・・・・・鏡君・・・・」

そう思った時。

「ぎゃあああああああああーあーあーあー」

すずかちゃんを襲おうとした人が悲鳴を上げた。

「おいどうs・・・」

ガスツドゴツバゴン!!!

「がはっ」

何が起こったかわからなかったいきなり男の人が吹き飛ばされたと思っいたら

鏡君がこっちに向かって走ってきた。

「邪魔だ」

ドガッ

鏡君はアッパーを決めて私が落ちるのと同時に抱えてくれた。

「ちょっと飛ぶぞ」

「え？きゃあ」

「くそこのがきがー」

おもむろに鏡君は境内の中の大剣を持ち上げた。

「鏡君だ・・・大丈夫？」

「・・・やっぱ重いな」

そう言うといきなり鏡君が飛んだ。

「おらよつと」

飛んだ勢いで兜割をした。相手は頭からまともにあたって痙攣した。

「・・・めんどくせえ・・・」

その後ほとんど一撃で勝負はついた。

いくら切れないとはいえあんな大剣振り回して当たったらものすごく痛い。

それでも鏡君は怯むことなく右に左に振り回して倒していく

そして3人が重なった時鏡君は身をねじり構え始めた。

「せえの・・・」

？気の所為か刀身に黒いオーラが見えた。

「がはっ」

「ま・・・待て小僧・・・お・・・俺たちが悪かったd・・・だからもう・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「か・・・金ならやるよほらまだ出店g・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・くたばれ」

ドガーーーーーン

・・・・・・・・

その後はあんまり覚えてないとりあえず警察は私達が被害者だったから特に追及はされなかった。

大剣の事は、『子供だから持てるわけない』って鏡君が一点張りを通した。

周りに見られてたけど、誰も言わなかった。

お父さんたちもすごく心配してくれて守ってくれた鏡君に何度もお礼を言ってた。(お兄ちゃんも1回だけだけ)

でもこの日からなんだか鏡君見るとすごくドキドキするんだよね。だけどいつかきつとこの気持ちわかるかな？

鏡

とりあえずは警察(?)からも何とかごまかした。

周りに見られた気はするが、皆『助けられなくて済まん』と謝っていた。・俺としてはどうでもいい事だ。

あの3人の容体?知りたくもないな・

だが気になる事が2つ。

まず1つ大剣を握った時アラガミ因子が活性化した感じがした。

あれをうまく扱えたのはそれが影響だろう・

2つめは・なのはだ。

何かあいつらに襲われてたの見たら腹が立った。

なんか変な感じがする。

「やっぱり神様なんて当てにならないか・・・
とりあえず寝るか」

こうして2日目^が過ぎた・・・

第2話〜想い〜（後書き）

鏡「とりあえず1カ月飛ぶか」

なのは「その間、翠屋のバイトと道場で修行だね」

鏡「暇じゃなくなるのは残念だがな・・・」

蛟那「よしっ復活」

鏡「？何してる作者??？」

蛟那「とにかく1000pvは皆様のおかげだから何かお礼を申し上げたい」

鏡「ふつうは質問だがまだ序盤も序盤神喰いで例えるとメディカルチェックのムービーも言っただけなく戦闘すらしてない状態だぞ」

蛟那「確かにそんな感じですねけど少し設定について語りたと思います」

第3話　始まりへの道（前書き）

鏡「今回は早いな」

蛟那「前回悩んだ分パツと出てきて半日で描いた結果がこれ」

鏡「その心は？」

蛟那「今後亀更新になっても勘忍し……」

鏡「くたばれ」

グチャ

第3話〜始まりへの道〜

2月上旬翠屋

「ありがとうございます」

あれから一ヶ月俺を保護してくれた高町家の人たちに色々と教えられた。

まずはこの翠屋である。ここは母親の桃子さんが経営する喫茶店で近所の評判もいい。

ある時、桃子さんは俺に働かないか？と勧めてくれた。

俺の外見の年だと学校へ行くことになるが住所どころか戸籍もない俺がいけるはずもなく……

付け加えるが一応金は『ある』持ってきた換金アイテム売ればいいんだから 恐らく一生遊んで暮らせるだろう。

そんな訳で、今は翠屋でバイトをしている。

「高町さんこの子いい子ね、ところであの服は此処の制服じゃないみたいけど？」

「はい何でも元から持ってたものらしく、翠屋（翠）はそんなに厳しい店ではないので」

ちなみにこの服は元の世界の時に作った、某有名カフェの制服で翠

屋に意外とマッチした。

カランカラン

「ただいまー」

「おじゃまします」

「おじゃましまーす」

「おかえり〜そしていらっしやいませ」

なのはが帰ってきた。

後ろには友達のすずかとアリサがいた。

アリサに関しては、名前だけ気になった。

以前の家で同じ名前の娘がいると言っただけならなのは達が予想以上に食
い付いた。

彼女の説明を終えると。なのはとアリサは不機嫌な顔をずっとして
いた・・・確かに容姿は天と地だけどここのアリサにも望みg・・・

何かないと思っただら2人にぶんなぐられた。痛い思い出だ。

そんなこんなで今は4人で遊ぶこともある。

「鏡君最近どう?」

「うーんぼちぼちな?」

「鏡君最近お父さんとお兄ちゃんにすごくしごかれてるんだよ」

そう初詣の時ふいに剣術を見せてしまった俺は、土郎さんと恭也さんに目を付けられ反場強引にもとい修行させられていた。

木刀で訓練する時は大剣ほど大きくないのでロング時々ショートブレード風に降っている。

ーここで回想ー

鏡vs恭也

木刀による模擬戦

「くっ」

「だるいなまったく」

ここまでギリギリの攻防が繰り返されてきた。

ある時は、俺が打ち込むが難なくガード。

攻められたら紙一重でステップ回避・・・正直手詰まりだ。

このままドロークかと思ったその時・・・

「神速」

「は？」

ロックオンが解除された？

気がつくまで恭也は後ろにいた。

やべシー・・・木刀これじゃ駄目だorz

「面……!!」

「ぐあっ」

勝者 高町恭也 神速

ー回想終了ー

思い出しただけで頭が痛い。

「・・・・・・・・」

？なんだなのはやつじつと見て

「なのはほらあげちゃいなよ」

「大丈夫なのはちゃんならできるとて」

「うう〜」

何だ小声でよく聞こえないな

気にしなくてもいいだろう・・・さて仕事仕・・・

「鏡君！！！！！」

どわっびっくりした大声出すなよ。

「あああああのこれ」

差し出されたのは小さな籠にラップがされているピンクのリボンで縛ってある。

肝心の籠にはチョコレートが乗せられていた。

「これは？」

「今日はバレンタインデーって云って好きな子にチョコを送る日な

のよ」

自慢げに説明するアリサをしり目になのはは更に紅くなった。

「……それを俺に？」

「うっ……うん」

「そうか……ありがとう」

早速食おうと思ったが勤務中、チラッと桃子さんを見て

「（ニコッ）」

微笑んで前に出てくれた。これ食べてもいってことよなんじゃ遠慮なく。

パクッ

「どっよっ」

（わくわく）

（どきどき）

「うん、甘くておいしいぞなのは」

うん本当にうまい甘くて少し苦いがそこなんかいい。

「よかった／＼／＼」

「そんじゃ私はい義理ー」

「私も義理ですよ」

「ええっ?!? ちょっと2人ともー???!」

まあそんなこんなで毎日が慌ただしいのだ

ただ自分でも気付かないうちに「この世界にいたい」「好きだ」という事に気づいたけど・・・俺は・・・

「好い天気だな」

今日もいい天気である。

楽しい日々はすぐすぎると云うがまさにその通りである。

なんだかんだで1カ月近く平和な日々を過ごした鏡は、すっかり馴染んでいた。

体の方もチート級の士郎と恭也でなまる事もない。

そんなある日

「鏡君少しいいかしら?」

「はい今行きます」

閉店後、突然呼び出された何だろうと思いいりビングに向かった。

「こんばんわ鏡君」

「こんばんわ忍さん」

そこにいたのは恭也の彼女すずかの姉の月村忍と高町家全員だった。

「……俺なんかしました?」

「心当たりでもあるか?」

「全然」

「それじゃあ本題に行くか」

いまいちのみこめない鏡に土郎は言った。

「鏡君4月からなのは達と同じ学校に通わないか？」

「は??？」

いまいち状況把握してない鏡にとってその一言で完全に許容範囲を超えて逝った。

状況を整理すると・・・

子供である鏡をどうにかして学校へ行かせたいと考えたなのは達。

しかし鏡には戸籍がない。

そこですずかが姉に頼んで作れないかと相談した。

それは恭也を通じて高町夫妻にも届き討論した結果・・・

「許可したという事だ」

「はあ」

ここまで聞いても鏡の頭は又もや爆発寸前だった。

「だが可能なのは戸籍による編入許可ぐらいだ。試験の方は自力で何とかしてくれ」

説明が終わったただけどやっぱり鏡は疑問を感じた

「あの一っついいですか？」

「？何かな？？」

「どうしてここままでしてくれるんですか？」

そこはいくら俺でも理解できる。いきなり押し込んだきた子供にわざわざ戸籍まで作ってくれたのだ。

正直法律というものに触れてるんじゃないかと思う。

「必要か？」

「は？」

「子供が勉強するのにそれを惜しまない大人はいないぞ」

「っ……」

不意を突かれた。何でこの人たちはこんなにもやってくれるんだろ
うか？

へタしたら明日には帰ってしまう自分に……

「……」
「……」
「……」

「その時はその時だ……胸を張って帰ればいい」

正直応じるしかなかった学校に通う事が、この人たちの恩返しになるんじゃないかと感じたから・・・

少し頑張ろうと思った。

・・・だがすぐに後悔した。

何故なら・・・

試験対策は、高町家と月村家一丸（+アリサ）によってしごきにしごかれた。

― 1 例 ―

「この計算違つぞ」

「文法がでたらめすぎです」

「この人は17代目じゃなくて7代目の総理大臣です」

「太陽がこの位置だと時間はもっと遅いよ」

「だーもう問題集喰ってやるー」

「それいつの時代の勉強法？」

それから1カ月

『結果通知表 暁 鏡様』

「結果は合格だったさ」

「やったー」

自分のように喜ぶのは
そして当の本人は

「ふうう〜」

完全に気が抜けていた。

とはいえ4月から暁鏡はなのはたちと一緒に小学3年生である。

第3話〜始まりへの道〜（後書き）

鏡「学校は入ってからがきついつてこれ・・・」

なのは「そんなことないよすぐ慣れるって・・・」

鏡「いやそうじゃなくて・・・」

なのは「？」

鏡「今後の展開の事」

蛟那「次回はようやく物語が始動します 正直今までは鏡を馴染ませてなのはどのフラグ立てたぐらいなんですよんこれ」

第4話〜覚醒〜魔法と神器（前書き）

蛟那「亀と言いながら速更新」

鏡「何故前回あんなこと言った？」

蛟那「保険！！（キツパリ）」

注）最初のはテンプレですのでお願いします。
そしてジュエルシードですがリアルナンバーなんてわからないので
最初もしくは途中から適当ですご了承ください。

第4話 覚醒 魔法と神器

――

この広い空の下には

幾千、幾万の人がいて

いろんな人が願いや思い抱いて暮らしていて

その思いは時に触れ合って

ぶつかり合って

だけど、その中の幾つかは

きつと繋がっていていける

伝えあっていていける。

私、高町なのは。

私立聖祥大付属小学校に通う、小学3年生。

ここ高町家においては3人兄弟の末っ子さんです。

「おはようございます」

学校に行くためにバスに乗ります。

「なのはちゃん」

「なのは、こっち、こっち」

「すずかちゃん。アリサちゃん」

「おはよう」

「おはよう、なのはちゃん」

「おはよう」

アリサ・バニングスちゃんと月村すずかちゃんとは一年生の時から同じクラス。

今年からは同じ塾に通ってるの。

「ふあああ・・・眠っ」

「あんたは会って早々それじゃあ駄目でしょうが」

「うふふ、お早う鏡君」

「ああ、おはよう」

この子は暁鏡くん3か月前から家に居候うちしてる不思議な子。

「なんだ？なのは」

「ううん何でもないよ」

何か聞こうと思ってもすぐに言い出せません。いつ言えばいいのかな？

鏡

学校に入って一週間ぐらいたった。

それは新しい発見の連続だった。

授業はたまにだるい時が・・・多々あるがたぶん身にはなっている。しかし何故か男子にはすかれていないみたいだ。昼休みやその他一人で見ると

殺気まがいのものを感じる・・・本当に小学生か？

授業は周りの評価から中の上そこそこである。

昼食は、桃子さんが作ってくれたりしているが、料理に興味を持った俺は自分でも作るようにしている。

「鏡君またトウモロコシ？」

「うん何故かそれがベースなの」

「昨日もトウモロコシだったわよねどんだけ好きなのよ・・・」

「俺にも色々あるんだよ」

今日の料理は、コーンフリッターにナポリタン
最初に食べた影響が麺類が好きになった。

トウモロコシは単に、戻った時にトウモロコシしかないので今のうちにバリエーションを広げたいからである。

さすがに毎日トウモロコシ焼きでは飽きる。

そして昼休みある話題が始まった。

「将来か。アリサちゃんとすずかちゃんもう結構決まってるんだよね」

「私はお父さんもお母さんも会社経営だし、いっぱい勉強して、ちゃんと跡を継がなきゃくらいだけど」

「私は機械系が好きだから。工学系で専門職がいいと思ってるけど」

2人は何かしら夢や目標があるんだな。

「2人ともすごいよね、そういえば鏡君は？」

「俺は・・・ここだと何するかな？」

元は無職だったしな。

「それじゃあ駄目じゃない前の家じゃ何目指してたのよ!」

ゴッドイーター フェンリル極東支部第一部隊隊長です。

「でも、なのはは、喫茶翠屋の2代目じゃないの？」

桃子さんのやつを継ぐか・・・

「うん。それも将来のビジョンの1つではあるんだけど、やりたいことは何かあるような気がするんだけど、今はそれがはっきりしないんだ」

「私特技も取り柄も特にないし」

「バカちゃん」

アリサがスライスレモンをなのはに投げつける。もったいねえ。

「自分からそう言うこと言うんじゃないの!」

「そつだよ。なのはちゃんにしか出来ないこときつとあるよ」

「まっ子供なんだから今はゆっくり考えるんだな・・・それとアリサ」

「何よ?」

「食い物粗末にするな」

そんなこんなで今日の学校は終わった。

3人は塾へ行くみたいだから先に帰ろうと思ったが。「いつも先に帰るな!」とアリサに引きとめられてしまい今日は一緒にいることにした。

「この先が塾への近道なのよ」

そう言ってアリサは竹藪の近道を提案特に反論もないので付いていくことにした。

じぼらぐきつてくるよ。

「・・・？」

「どづしたなのは？」

「今何か聞こえなかった？」

「いや何も？」

「なのは！？」

「なのはちゃん！？」

「・・・はあ」

「何溜息ついてんのよ！ほら追いかけるわよ！！」

「うん」

「あいよう」

そうして追いかけると、なのはは、小さな小動物を抱えていた。

「どづしたのよなのは急に走り出して」

「見て、動物？怪我してるみたい」

「う、うん。どうしよう」

「病院？」

「違うよ獣医さんだよ 待って家に電話してみる」

〈獣医院〉

「怪我はそこまで酷くないけど、衰弱してたみたいね。きつと、ずっと一人ぼっちだったんじゃないかな」

「院長先生ありがとうございます」

「ありがとうございます」

「いいえ、どういたしまして」

「先生これってフェレットですよね？どこかのペットなんでしょうか」

「フェレット？何それおいしいの？」

「鏡君一応言っとくけど食べられないよ」

「へえ」

「！食べようとしたの?!」

「いやどんな動物だと思ってな？」

「ああ、知らないの・・・」

皆呆れてしまった後で聞いてみるか。

「安静にしておいたほうがいいわね。一晩預かるわ」

「」「」「よろしくお願いします」「」「」

「良かったらまた明日も様子を見に来て」

「」「分かりました」「」

ひと段落してふと思う・・・

「なんか忘れてるような・・・」

「あつ塾の時間」

「それじゃあ早く行けよ後はこっちで何とかするから」

「いいの?」

「バイト代で何とかなる、なんなら後でなんか奢れ」

「わかったありがとう鏡君」

「それじゃあよろしくね」

「鏡のくせに生意気よ覚えてなさい！」

約一名不吉な事を言ったが聞かなかった事にしよう。

「そんじゃ治療費っていくらですか？」

「ではこちらに……」

その後、なのはが土郎さん達にフェレットが飼えるか頼みこんだ、一応許可は下りたのでうれしそうだった。

その夜

「……なんか眠れないなあ」

ここ最近何か疼く、そしてとんでもない空腹感が襲う。

「毎日ちゃんと食ってるんだが……やはり毎日トウモロコシじゃ駄目だったか？」

しかたない今日も出歩くか……なんか最近日課になってしまったほかの人たちにはれたら怒られるだろうが今は気にしない。

さっそくスイーパー・ノワール一式を着こんで外に出るか・・・

「?なのは??」

廊下に出ると何故かなのはの部屋が蛻けの殻になっていた。

「・・・嫌な予感がする・・・」

この感じ・・・以前にもあったそうあれは俺が無茶して謹慎を受けて・・・レンに出会った・・・

「つくそ!!」

面倒な事になりやがって。

「どこだよまったく・・・」

当てもなく探していたその時

ドカーン

突然何かが壊れる音がした。

「あっちは確か・・・獣病院か？」

とにかく行ってみるか

こっちはずだが・・・

『ウオオオオオーン』

えっ何あの化け物？何か黒くてもっさりしてるんだけど？？

「・・・アラガミじゃ・・・ないか」

そう思った時声が聞こえた。

『プロテクション』

ガキーン

薄いバリアみたいなので化け物をはじいた。 ってあれ？

「なのは??？」

「えっあ鏡君!?!」

「なにやってるのこんな所で?」

「何って・・・散歩」

無論事実。

「なのはゆだんしないで」

なんか肩のフェレットが喋ってる・・・でも今は（r z

「・・・であれ何？」

「あれはジュエルシードでできた怪物です」

「ジュエルシード？」

フェレットが説明してくれてもいまいちピンとこない

『オオオオーオーン』

化け物が咆哮した瞬間、口の中から何か出てきた。

なのはとフェレットは知らない・・・でも俺は知っているあの『神』を。

「なに・・・あれ？」

「なんだこいつら？魔力が・・・ない??」

「・・・アラガミ ポウガテイル」

白い鬼の顔のような巨大な尾を持つ、二足歩行の小型アラガミ。

「何でこいつらが・・・怪物あれがだしたのか？」

オウガテイルは出た瞬間周りを喰い始める。壊れた塀の石、木や草道路まで喰い始めた。

「・・・これがアラガミの捕食」

今まで仲間やら何やらで見た捕食とは訳がちがかった。人工物自然それらをすべて喰い荒す。

それは資料でしか見なかった過去の事。それが今・・・

「！鏡君危ない！！」

「っ！」

考え事をしていたら襲ってきたどうする？神器がない！どうやってなのはを守る？

「くそっ」

腕一本覚悟しようかと思った時。

『プロテクション』

ガキーン

さっきのバリアーでなのはが助けてくれたが・・・

「駄目だなのはそれじゃあこいつらは倒せない」

「でも・・・いやだ！！鏡君を置いて行くなんて・・・」

神器神器神器神器神器

頭の中がそれでいっぱいになった、力はあった喰らう力が今必要なんだ。

「きゃあ」

バリアーが壊れた。瞬間なのはに襲うオウガテイル。

ザクッ

俺はなのはをかばい左腕を喰わせた。

「鏡くーん」

なのはが絶叫したが・・・

・クン

「ふざけるな」

「このまま喰わせてたまるか・・・お前らは俺が喰らう」

ドグン

「あああああああああああああ」

『ギヤオ』

腕が金色に光るそして現れたのは・・・

「黒い大剣……」

「なんだあれは？物質兵器か？」

なのはとフェレットは分からないが俺には分かる神器だ。

「なんだよ……ずっとここにいたのか？」

随分長く待たせたが……

「……行くか」

狩りの時間だ

第4話 覚醒 魔法と神器（後書き）

鏡「やっと神器が来たか……たらふく喰うか」

なのは「私も手伝うよ」

鏡「まっ 適当にたのむわ」

フレット「……僕の存在は？」

蛟那「今回は切りがいいのでここで切りました」

鏡「切るか切らないかで随分掛ったからな」

蛟那「ヘタしたら執筆以上に……」

鏡「マジ？」

なのは「次回は戦闘しますお楽しみに」

第5話〜悪魔の尾〜鏡の世界（前書き）

蛟那「あれ？もうすぐ4000pv??？」

鏡「・・・意見がないのもさびしいな」

ハグツア

蛟那「か・・・感想質問その他もお待ちしています」

なのは「では本編です」

第5話 悪魔の尾 鏡の世界

鏡

「…………行くか」

向かう獲物はオウガテイル3体普通は楽勝だが後ろにはなのはがいる。(注：ユーノくんは入ってません)

前線に出て、適当に牽制してつぶすか・

「おらあ」

そんな事を勘会えてる間に一体撃破した……案外もろいな。

さて後……1体？

「なのは後ろっ!!」

「きゃあ!!」

「っちい」

フレットが注意してなかったらやられてたな、この野郎が。

ガチャン

「へ・・・変形した?!」

「銃?」

神器を変形させ美しい蒼い銃に変えた。

「スナイパー トス力滅」

「グルル」

デルタクロス 焰

炎の弾丸が発射されオウガテイルに当たった瞬間上下左右にレーザーが飛び散り再びオウガテイルに当たった。

「ガアアッアア」

怯んだところで剣モードに戻して・・・

グチャグチャ

「キヤ?!?!?!」

なのはが驚いてるな、まあ確かに捕食は見た目グロイしな。

「喰つとけ」

2体目撃破最後だ。

今度は突っ込んできたな。だが……

「……本気出すか」

さっきの捕食でバーストモードを発動させた。力が上がる。

「せえの……」

チャージクラッシュ
CCに合わせて……

「くたばれ」

ドガーーン

ーオウガテイル撃破ー

よし終わ……

「まだだ！」

『グウォオオオオオオオオオオ』

あつあの化け物忘れてた。

「鏡君後は任せて」

「グムムオオオー」

化け物が向かってくる一応隙は作っておくか。

ガチャン

「ほらくらえ」「貫通ニードル

「ブオオーン」

よし怯んだ。

「封印するは、忌まわしき器！ジュエルシード！」

フェレットが言った言葉になのが繰り返す。

「封印するは忌まわしき器！ジュエルシード封印！！」

「リリカル、マジカル！ジュエルシードシリアルXXI封印！！」

化け物は崩れた。

「終わりか？」

「そつみただね」

「聞きたい事が・・・」

ウーウー

パトカーが最近の警察は熱心だな。

「ど・・・どうしよう?」

「そんじゃ公園でも行くか」

「うん」

ー海鳴公園ー

公園に着いた俺となのは、とりあえず自動販売機でお茶を2つ買いなのはに1つ渡す。

「ありがとう」

そして俺となのは公園のベンチに座った。

「それで聞きたい事って?」

「ああそれは・・・何でこいつ喋ってんの?」

ガクッ

なのは脱力した。

それから聞いた話。まずこのフレットは、別世界の魔導師である。彼の任務は、偶然発見したロストロギア『ジュエルシード』を本局に輸送する事だった。

だが事故で偶然この街にジュエルシードがばら撒かれてしまった。しかも事故の傷で回収困難のためなのはに協力してもらおう。

とだいぶ省いてそんなところである。(もっと詳しく? ggrもしくはwiki参照)

「それでは次にあなたの事を聞かせてもらえますか？」

「俺？」

「ええあの魔力を持たない生命体を・・・」

「一言で言うなら・・・」

「言うなら？」

「神様」

「」「は？」

「どっどっという事？鏡君？？」

「その前になのはに言いたい事がある」

「え？」

改めて言うのは緊張するなあ。

「俺異世界から来たんだ」

そして話したアラガミの事俺の世界の事神器の事俺の過去を・・・突然現れたアラガミによって人類が壊滅的被害を受けたしかもそのアラガミは通常兵器では傷一つつかない存在。

それらは知識を得るため捕食し始め爆発的に増え世界がボロボロになった。

そんなアラガミを倒すために作られた組織フェンリル、アラガミを倒す兵器神器そしてそれを使う者ゴッドイーター。

「・・・俺はそのリーダーをやっていたんだよ」

「え？え？じゃあ鏡君いつたいいくつ？」

「確かこの年齢より10年は行ってるんじゃないのかな？」

「ふええええ」

「じゃあ君は次元漂流者なんだね」

「次元ひょうりゆう？」

知らない単語はさっきの魔導師で腹いっぱい何だが・・・

「簡単にいえば君みたいに事故や偶発的に異世界から来たものだよ」

「なるほど」

「ねえ鏡君、さっきのアラガミこの子で倒せないかな？」

そういつてなのはは赤い球を見せた。恐らくさっき言ったデバイスというものだろう。

「結論から言つて無理だな、博士の講義だとアラガミはオラクル細胞という単細胞生物の集まりなのは話したな？そのオラクル細胞のコアを攻撃できるのは同じオラクル細胞である神器しかないんだってさ、ようはそれがどんな攻撃力持っても無駄って事だ」

「そんな」

「目には目を齒には齒を・・・か」

なのはが落ち込みユーノが諭す。

「そう落ち込むなジュエルシードは無理だがアラガミが出てきたらちゃんと守つてやるよ」

それだけは断言できる。

「あ ありがとう／＼」

「それじゃ帰るか」

「そうだね」

なのは

帰り道、鏡君とユーノ君と一緒に帰る。

この日最初に学校に行って皆と話して。

放課後竹藪でユーノ君に会って。

ユーノ君に頼まれて魔法少女になって。

怪物が出てきて鏡君と一緒に倒して。

ずっと聞きたかった鏡君の過去を知った。

たった1日で世界が変わった。

これからも大丈夫だよ。

「ねえ鏡さんって呼ぶ？一応年上だから」

「……いや年も年だしいつも通り鏡君でいいよ」

そう言った鏡君は少し照れ臭そうだった。

「わかったよ鏡君」

そう、これからも……

鏡

それにしても。

「あのジュエルシードどっかで見事あるんだよなあ」

「鏡は封印の際しっかりジュエルシードを見ていなかった」

第5話〜悪魔の尾〜鏡の世界（後書き）

鏡「随分と説明省いたみたいだないのか？」

なのは「途中投げやりなの」

蛟那「すみません知ってる体ていで書いたらいつ間にやらこんなふうに」

鏡「しかしこれ次回予告になるのか？」

????「心配ないよ 次は私が出るって事を言えば」

なのは「えっ誰？」

????「あなたとはまだ先・・・先に彼に会うことになる」

なのは「ど・・・どづいづこと?!?!?!?鏡くーん」

蛟那「次回はいよいよあの子が登場」

5000pv突破記念緊急アンケート（前書き）

蛟那「本当は次辺りで出そうと思ったが早い方がいいかと思って出しました」

???「・・・私の番・・・」

蛟那「スンません本当に次ぎだします」

5000pv突破記念緊急アンケート

蛟那「さあ始まりました超突発企画」

なのは「今回のゲストは私高町なのはと暁鏡君作者の蛟那さんです」

ワーワーパチパチパチ

蛟那「えーまず最初にこの妄想小説が1週間足らずに5000pvまでいったのは皆様のおかげです何とかガラスの心が灰にならないで本編まで続けられました。ありがとうそしてこれからがんばってみます。」

鏡「そしてアンケートってというのは？」

蛟那「とうとう神器が出てきて更にアラガミまで・・・このまま続くとなんかネタ切れになること間違いなし」

鏡「AsならまだしもStrikerSまで続ける気ならなおさらだなStrikerSの途中でカリギュラが出てきちまつかもしれないな」

蛟那「さすがにそこはアウトだと思うので皆様には2つの意見を求めたいと思います」

1 新種アラガミ 既存のアラガミくっ付けても可 見た目がどういのか弱点属性何処が壊れるか？

アラガミバレット

2 バレットエディット どんなふうに見えるか実用ネタどちらも可バレット名

鏡「見てて本当に他力本願だな」

蛟那「うるせーこれでも1つや2つ考えたんだぞ」

なのは「それはいつでてくるの？」

蛟那「無印で終盤辺りに一体」

鏡「まあ作者の頭だから期待しないが……………」

蛟那「orz」

鏡「これで終わりか？」

蛟那「あと少し主人公設定その他で語りたと思います」

鏡「…………飽きたらブラウザでも……………」

蛟那「はい！！ 鏡の髪型ですがゴツドイーターのキャラエディットで作れる使用になっています。」

そんな訳でもしかしたら丸被りのゴッドイーターさんもいるかもしれません」

鏡「実際に妹のキャラ知らないで進めたら声が被ってて討論になった実話がる」

蛟那「神器の装備ですががつり作者の使用装備ですが装甲に関して言えばシールドではなくタワーシールド臥竜大甲 衛を主に使ってます」

鏡「？じゃあなんでオルケストラにしたんだ？」

蛟那「そこはこの小説の都合上仕方なく、でもオルケストラも好きで使ってます」

蛟那「細かく言うならバスターズナイパーも少し違う」

なのは「じゃあなんでその子たちにしたの？」

蛟那「そこは神器の名前に由来しています。名前決定は前回の予定が次回になってしまいました
が神器の名前由来を調べたら直感であの名前が出てきました」

鏡「あの名前は一応設定書いてあります」

蛟那「では今回は此処までアンケート感想でもいいのでバンバン送ってくださいお願いします」

第6話〜雷雨〜迷子と目的（前書き）

蛟那「早速ご意見もらいました」（歓喜）

鏡「へえいつ出てくんの」

蛟那「予定変更させて温泉辺りに・・・では本編どうぞ」

第6話　雷雨　迷子と目的

鏡

俺が神器を取り戻し、なのはが魔法少女になった次の日の朝フェレット事ユーノが高町家にやってきた。

一応訳は、昨日の夜に病院近くで車の事故がありその時に逃げ出したフェレットが高町家に来たということになった。という事で皆納得してくれたらしい。

朝にはアリサとすずかが心配してくれた。

「ねえなのは昨日大丈夫？」

「何が？」

「車の事故で病院の壁が壊れちゃったんだって」

「あ・・・えっそそれは・・・」

「あのフェレットが無事か・・・私心配で・・・」

アリサとすずかが心配したのはが回答に困っている・・・助け舟でも出すか。

「なんかあのフェレット夜中に家に来たんだよ。それでそのまま高町家で飼うことになったみたいだ」

「よかった無事だったんだ……って何であんた知ってんのよ？」

「いや俺も高町家にいるし」

「あつそうかあんたも飼われてたわね」

「そう言う事」

しかしなんで、アリサは俺に突っかかってくるんだ？

放課後はまっすぐ帰り現在なのはの部屋。

「ところでなのは今日どうしたんだよボーっとしてよ」

今日の授業中なのははずっとぼーっとして先生の話を聞いていなかった。何となく予想はしたが。

「おいユーノお前の所為じゃないのか？授業中変なノイズっぽく聞こえてくるんだよ」

「えっ鏡にも念話が聞こえたの？おかしいな魔力がないとそんなに聞こえないの？」

「でも聞こえたよ。おかげで全然眠れなかった……」

「鏡君はそれが本音でしょもう、私もレイジングハート通してやっ

と聞こえるのに・・・」

「レイジングハート？」

そうやってなのは赤い球を見た。

「この子だよ私のお友達」

そのレイジングハートというのはいわば魔法のステッキのようだ。しかし名前か・・・

「こいつにも何かつけるかな？」

「それいいね何てつけるの？」

そうだな、と考える図書館での「オペラ100選」を思い出した。

「そうだな・・・歌劇ってどうだ」

「歌劇・・・いい名前じゃないかな」

「確かに君の装備はオペラの歌をもじったものが多いからね」

・・・こいつ異世界魔導師のくせにオペラを知ってるとは。

夜

そして俺はまた疼きを感じて外に出ることにした。

「私も一緒じゃ駄目？」

「正直俺の勘だぞ」

「いいよそれでも」

しかしなんか嬉しそうだな。

「じゃあ少し手分けするか・・・ジュエルシードがあったら連絡するよ」

「うん」

そして俺達は外へ出た。

「じゃあ俺あっち探すから・・・」

「うんそれじゃあ」

「・・・ところでなのは」

「なーにユーノ君？」

「鏡はどっちゃって連絡するつもりなんだい？」

「あっ！！」

そして適当に索敵する事10分後

「……………」

完全に迷った。思い出せ確か数分前までは普通に町を歩いてたのにどこをどうしたら森の中うつろっているんだ??

「…………駄目だ思い出せねえ……………」

しかたないなのはに連絡…………はどしたらいいんだ?

やばっさっきの念話の話聞いてたら自分でもできるって思った。考えてみれば俺受信できるが送信できねえ。

「…………歩くか……………」

―そして歩いて行く事数分後―

「なんだこれ?」

なんとというか匂うこれ昨日の夜に経験した…………たぶん近くにアラガミがいる。

「なのはか?」

更に奥に行くと森の中に広場が出来ていた。そこに・・・

ガキン

誰かが闘っていた影は3つ大きな影は1つはジュエルシードの化け物
そして2人の人影1人は犬耳(?)のオレンジ色の髪の少女もう一
人は金髪で雷の剣を持った綺麗な少女それは夜の月によく似合う

・・・・・・むっ初めて人を綺麗だと思っちゃった・・・不覚。

と見とれていた瞬間金髪の少女の頭上に影ができた。小型のアラガ
ミザイゴートだ。

「あぶねえ!!」

自分でも驚くほど大声で助けに行った

「えつきゃあ」

間一髪ザイゴードの毒から少女を守った。

「・・・おい大丈夫か?ぐっ」

「はいだ・・・大丈夫ですか?」

「なんとか・・・だが油断したな」

久々にヴェノム喰らっちゃった・・・デトックス錠何てここにな
いよな自然治癒か。

「ジュエルシードの方はお前に任せる・・・あのアラガミ達は俺がやる」

そして俺は再び歌劇を手取る。

「!?なんでジュエルシードの存在を?あなた一体?」

「詮索はあとだ・・・くるぞ!」

とりあえず切って捕食するバースト時間は短いがまあいいしかし今度は高く逃げて行った

「どうすんだよあいつ逃げちゃうよ!」

もう一人の少女がわめく。

女体と卵殻が融合したような、奇怪な形状のアラガミあいつ空飛べるんだよな・・・あれ空飛べないの俺だけ?

「なんかむかつくな・・・撃ち抜く!『ブリザードノスパイラル』」

ドガン

「何あれ・・・魔力は感じないけど・・・」

青いの砲弾を頭上に撃ち上げるたそこに出来たのは青いい球しかしそれは敵アラガミに向かれていた。

「バーン」

瞬間氷のホーミングレーザーを五本纏めて撃たれザイゴードに全弾命中！

「オオーン」

ザイゴードは狩った。

「・・・めんどくせえ」

ジュエルシードの方も昨日と同じ対処しておくか

「ほじょっ」エアショット『「

ドロン

「ウオオオオオンー」

「フェイト今だー!!」

「うん、ジュエルシード！封印!!」

こうしてジュエルシードは封印されたと気を抜いた時。

「!?!?フェイト危ない」

ボコン

いきなり地面から鉄人形が生えてきたコクーンメイデンだ。

シュ

いきなりのレーザー金髪の少女に向かって放たれた。

ガキン

「……」

「あ……ありがとう……」
ドサッ

俺は少女の方に倒れた。

「えっ?ちょ?!?!ちよつと!?!?」

ギリギリでオルケストラでガードしたが先のヴェノムですでに瀕死状態だった。やべえ眼……がかさ……

?????

いつも通りのジュエルシード集めのはずだったなのに今回はイレギ

ユラーが起きた。

先ずあの化け物あれには魔力を感じない。

そしてこの人・・・見た目同年くらいだけど・・・

そしてあの地面から生えた不気味な敵・・・一体どうすれば...

「フェイトここは私に任せな!!」

そう言つてアルフがあれに飛びかかる。確かにあのレーザーは単純でアルフにはかわしやすい。

「気をつk・・・」

ーめだー

「!?!?!」

声が聞こえたこの人の？

ー止めるー

「止まつてアルフ!!」

反射的に叫んだ。根拠もないまま。

「ふえ???」

ガチャ・・・シャキーン

「ミギヤーーーーー!!!??」

アルフは止まった瞬間あの化け物の腹部が開き大量の針が飛び出した。幸運にも針先ギリギリ後1歩でも進んでいたら無事じゃ済まなかっただろう。

「フエイトーーーー」

アルフは泣きながら戻ってきた

「何あれ?! わけわかんない」

「わたしも・・・わからない」

「でもさっき・・・」

「声が・・・この人の声が聞こえたの・・・」

そうして彼に目を向ける。苦しそうな顔を浮かべた。

「どうすれば?」

たぶんあの化け物はこの人にしか倒せないそう思って彼の手を握る。

その時、腕輪に手が触れた。

キイン

碧色の光が私から彼に移される少し力が抜ける感じがしたけどまだ大丈夫だ。

「悪いな、サボっちまって」

「えっ大丈夫？」

私が心配すると

「大丈夫だ・・・すぐに終わる」

それから10秒もかからなかった近づいたと思ったら踏み込んで後ろに回りひたすら切りつけた。そして最後に剣が変形して喰べた。

「・・・おわつたな」

「あんた一体？」

そして彼は名乗った。

「フェンリ・・・ああこれいいか、ゴツドイーター 暁鏡」

「フェイト・テストロッサ この子は使い魔のアルフ」

そうして鏡が話してくれたのは、自分が次元漂流者だという事あの化け物アラガミの事そして・・・

「そのジュエルシードなんだけど俺の知り合いが回収してるんだ渡してくれないか？」

「それは無理」

「どうしてだ？一応聞いた話だけど危険なものだろ??」

「ふざけんな私たちはそんなチンケな回収作業じゃないんだぞ!!」
アルフが吠える鏡は少しわけがわからないようだった。たぶんロス
トロギアの簡単な説明を受けたただけだろうそれならこんな反応はむ
しろ普通だ。

私はアルフに静止して話した。

「・・・私は・・・私の目的のために集めている。もちろん自分のためじゃないある人の願い。私はその人の役に立ちたいから！」

私の心話をしたしばらく考えて鏡が口を開く。

「・・・わかった俺も昨日協力すると云ったが・・・あくまでアラガミが出てきたときに限ってた。あいつがやりたいと言ったから俺も手伝ってたから・・・フェイトとぶつかるのは俺の役目じゃない」

「そう・・・わかった」

ジュエルシードの件はわかった・・・でも『あいつ』？直感的に同じ

魔法少女なのがわかった。守りたいのかな・・・わからない変にもやもやする。

「それで話変わるけど」

「えっああsisな・・・何？」

「・・・どこどこ？」

「ここは遠野市の森だけど・・・」

「海鳴じゃなくて??？」

「そこは確かとなりじゃあ・・・」

確かに海鳴市と隣接して繋がってるけど・・・まさか歩いてここまで???

しばらく沈黙が支配する。

「・・・質問に答たかわりに少し頼めないか？」

「なんだい？ジュエルシードでもほしってか？」

アルフが威嚇するしかし。

「いや『そんな物』俺には興味ないただ……」

「ただ？」

「海鳴ってどつち？朝までに帰りたいんだけど……」

少しだるそうにに答える。確かにここまで歩いてそして先の戦闘・限界なんだろう（注）フェイトはあれが素の鏡だとわかりません

「それじゃあ送っていくよ飛んだ方が早いと思うし」

「いや俺は……」

そつだ！鏡は魔法が使えなかった。どうしよう……／／／

「捕まって」

「は？」

「……飛べないんでしょ？」

「ああ……」

言ったそばから体が熱くなってくる。どうしてこんな提案したんだろつ私？

こうして私は鏡をかついで海鳴市へ向かった。道中家の事を話した。

「そうか……じゃあ今度遊びに行くよ飯作りにな」

「えっ本当？」

「当たり前だこの世界にインスタントだけっていうのはもったいないぜ」

「えっ？でもどうして？？」

「さっきのリンクエイド あれ当人の体力使うの知ってるなそれと同時に相手の状態も何となく把握できる・・・栄養が偏りすぎてるもつといろんなもの食え」

「うんじゃあ・・・約束だね／＼／」

そんな約束をした。後ろでアルフは嬉しそうな威嚇のような顔をしていた。

鏡

何とか帰ってきた。

正直フェイトとぶつかるのはごめんだなんてヘタしたら殺しかねない・・・こっちは勝負じゃなくて殺し合いの部類に入るのだから。

だがフェイトにも言ったが『ぶつかるのはなのはの役目』あの真意に嘘偽りはない。

「お帰り鏡君」

「ああただいま悪いなのは」

帰るとなのはは、やっぱり不機嫌だった。一応勘違いと今日の戦果について報告する。

「じゃあその子にジュエルシード渡しちゃったの？」

「そんな・・・ジュエルシードの危険性は話したじゃないですか？」

なのはとユーノが問い詰める。まあ当たり前か。

「ああだけど何か信が通ってて・・・たぶんあの子は悪い事には使わないだろう」

「どうして」

「なんとなくそんな感じがするんだもしくは勘・・・もしかしたらなのは近いうちに会うかもしれないな」

「ふうん」

なんか更に不機嫌になった・・・やばい事言ったか俺？

「それで・・・どんな子なの？」

しつこく聞いてきた。そうだなどんな子だと聞かれると・・・

「綺麗だった」

「へ？」

「なんか綺麗な子だったな・・・」

プチ

ん？なんか切れる音g・・・

「鏡君のバカーーーーー」
「」

ドガスッ

なのはは夜中にも関わらず大声で叫び俺の腹を殴った。待てそこさつき重傷したとこ・・・傷が開くぞ。

そのままなのはは家に入って行った。

ガチャン

また嫌な音がした、案の定鍵が閉められた。

「……………」

その後桃子さん達に助けられたのは夜明けの6時ぐらいになった。

第6話〜雷雨〜迷子と目的（後書き）

なのは「ツーン」

鏡「おいなのはそろそろ機嫌直してくれよ・・・」

なのは「じゃあ今度私のお父さんのサッカーの試合どうするの？」

鏡「試合出るのは・『キツ』・・・出ます応援お願いします」

なのは「うん」

蛟那「ちなみに今回の出てきたブリザードノスパイラルですが元ネタは、

魔法少女リリカルなのはstrickers〜終わりなき戦いへ〜
のデフォルトさんの考案です。デフォルトさんバレット案ありがとうございます」

蛟那「今回の話より魔王の輪郭が出ていたら嬉しいd・・・」(ド
ゴーン」

第7話 〽戦神の目覚め〽近くと遠く(前書き)

蛟那「案外早く更新できた人間やればできるものだ」

鏡「このペースで大丈夫かよ」

蛟那「駄目だ」

第7話 く戦神の目覚めく近くと遠く

鏡

ー朝海鳴神社ー

「ワオオオーーン」

俺となのはとユーノは、ジュエルシードの化け物と戦闘を繰り広げていた。

幸い今のところアラガミが出てきてないので後方からの援護という形で闘っている。

「リリカルまじかるジュエルシード封印」

こうして今回の戦闘は終わったあの夜から1週間ぐらいたった。あの後しばらくなのはの不機嫌は続き

それに問い詰められ土郎さんと恭也さんが物凄い殺気で半日近く話をさせられたり桃子さんと美由紀さんに至っては何もきかずだが「泣かしちゃ駄目よ」と何度も念を押された。

更に噂を聞きつけたクラスの間中からバツシングの嵐。アリサには蹴られずかには睨みつけられ散々な日々だった。

さすがに参った俺を見てようやくなのはも許してくれた。

そして本日よりなのはと行動してジュエルシードを集めることになった。

「しかし犬か」

俺はジュエルシードに取り込まれた犬をなでる。

「どうしたの鏡君？」

なのはが駆け寄り聞いてきた。

「いやちよつとな・・・犬なんて初めてだからさ」

俺の世界では、犬なんて絶滅したに等しい実際生まれて初めて触った犬がこいつだ。

「うんでも猫も可愛いよ　すずかちゃんの家猫でいっぱいなんだ」

昔話で聞いた猫屋敷ってやつかそれは面白そうだ。

「今度すずかに頼めるかな？」

「うんきつと大丈夫だよ」

そんな猫の話をしている後ろをさっきの犬が走って行った主人の元に帰るのだろう。

……そう言えばアルフもあんな耳していたな。先週見た2人を思い出す。

その日の放課後

「そういえばなのはのお父さんのチーム今週試合だよね」

「うんお父さん張り切ってるよ」

なのはのお父さんは、地元のサッカー監督をしている。顔が広いというわけだ。

「鏡君はどうするの？」

すずかが聞いてくる。といのも俺の運動神経は土郎さんにも買われているので元々スカウトはきている。

「そうだなたまにはいいか……補欠として」

「何よ！あんたの能力ちからだったらレギュラーじゃん」

「それは結果論だ初めは、やりたい奴にやらせるぞ」

志のない俺は後で入るとするか

しかしその杞憂も当日は本気にならざるおえなかった……

――

「おじやましま〜す」

「あついらっしやい鏡」

「おっ鏡だ」

入るとエプロン姿のフェイトと部屋着のアルフが出迎えてくれた。

俺はフェイトの住むマンションにいた。先週からフェイトの家に向いている。第一に自分の食事のためである。

というのもあの喧嘩で高町家に居づらくなり更におかずが見るからに減少して『やばい』と思いフェイトに助けを求めた（海鳴市はすべて敵に等しいので）

フェイトの冷蔵庫は冷凍物インスタントしかなかったため買い物に行ったりした。そこで改めて話をしたり作った料理を食べたりした。

何より衝撃的だったのはアルフが犬・もとい狼であるという事実だ。初めての大型動物に少しドキドキした自分がいた。

そして今日は、フェイトに挨拶基食事会である。

「・・・そっかさあもう先週みたいに頻繁に来ないんだ・・・」

耳が垂れてしょんぼりするアルフここ一週間で仲良くなった。

「ああ家主と仲直りできたからな」

俺の住んでる所は、なのはを掻い摘んで説明している。だが・・・

「ねえその家主ってジュエルシード集めてる子？」

うおっフェイトの奴ど直球で聞いてきた・・・

「・・・まあな・・・何でそう思うんだよ？」

一応理由は聞く

「勘」

マジかよ・・・そして目が・・・先週のなのと同じ眼してる・・・

それにつられてアルフが叫ぶだがフェイトが制止してこの場は収ま

り俺は帰る。

そしてその帰路・・・

「女って怖え」

なのはとフェイトを思い出し寒気を覚えた。

なのは

試合当日私は鏡君のためにお弁当を作ってお父さんのチームの応援に行った。

そのミーティングで。

「すまん鏡レギュラーの一人が風邪こじらせてな・・・代わりに出してもらいたいんだよ」

「・・・それなら元の人で代わればいいんじゃない？」

「ポジションが司令塔だよほかの奴らは皆FWとDFに回っててうまく指揮が取れないんだ」

「ここの唯一の司令塔が休みなんだ頼む 以前お前を練習に誘った時覚えてるだろ」

この三カ月確かにお父さんは、鏡君を連れて練習に参加させた。

「その時みんな思った事なんだよ動きやすいつて」

チームのみんなもうなづく。そんなにすごいんだ鏡君・

「だったら経験で・・・」

「ちなみにその司令塔の奴もお前に感化されて練習しすぎたのも原因の一つだ」

ウツと鏡君が怯むさすがお父さんここで切り札だし来た抜け目ないなあ。

「はぁ・・・分かりました相手情報は一応目通しましたからほかのやつの話聞いていいですか？」

「ああいいとも」

そうして少しの間鏡君とチームの皆で話し合い試合が開始された。

「がんばれー」

「ほらいけっ何ボケツとしてんのよ鏡!」

アリスちゃんの言うとおりに鏡君は軽く走って何かを見ていた。

「それが彼の役目だからね」

「お父さん？」

「司令塔は攻撃時にボールを回す中心となる役割の選手、または決定機に繋がるパスを多く出すタイプの選手を指す。そして周りを造る選手だ」

「でもこうやってなのはのお父さんいるじゃない？」

「それはあくまでコーチや大まかな指示とかだ試合中にいちいちタイムして指示何て出してたら負けちゃうからな」

そういつて見てると確かに鏡君は周りの子に手で指示を出している。それに合わせてみんな動いている。

「それに彼のいいところは自軍の欠点・穴を見極め自然に補佐させるところだ」

右曲のDFの動きが遅いと感じたので少しずつ埋めている。

そこが穴で相手が抜けたと思ったら、鏡君が真正面からブロックした。そしてそのまま相手陣地に駆け抜けパスを回しゴールした。

そんな感じに試合は進みいつ間にか5対0の圧勝だった。

試合後翠屋で祝勝会が行われた。

鏡君はご飯食べたらずちやった。

その時

ちらつと見えた一人の子が青い石を持つてる事に……見間違いでもユーノ君は何も言わないし……

「どうしたのなの？」

「……うつん何でもない」

それから1時間後ユーノ君が叫んだ

「なのはジュエルシード反応あつちだよ」

「えっ？」

突然のことだった早く行かなきゃ。

「言いわけどうしようっ？」

「ああ〜デートしてましたでいいんじゃないねえ??」

鏡君は冗談めかしに言った　うう〜私には全然冗談に聞こえないよ。

そして駆け付けた先は、街の真ん中そこには大きな樹がたくさんあった。

「・・・何これ？文献で見たユグドラシル??」

「ひどい・・・」

「多分・・・人間が発動したんだジュエルシードは人間の願いに一番強く力を発揮するからね」

あのと看見た子が持ってたんだ・・・私気付いてたのに・・・

「?どうしたなのは」

「・・・私気付いてたあのと看あの子が持ってたんじゃないかって気付いてた」

あのと看言っておけば。

「こんなことには・・・フギユ」

頭に痛みが走ったその時鏡君が後ろから抱きつくように持たれて話した。

「・・・いいかあのと看こうしたら良かった・・・そんな思いはこの先たくさんある」

最初は優しい感じだったのに話すに連れて悲しい気持ち伝わる。

「だけどあのおとき助けられたら・あの時もっと注意していたらかな」

「・・・うん」

「だけどそんな過去こつともあるんだ。だから今この先・・・生き延びるために今できる事を・・・」

「・・・ありがとう鏡君・・・ユーノ君!!」

「は!えつと何?!?」

「こんなときどうすればいいの?」

「えと・・・このタイプのジュエルシードは根源があるからまずそれを探さないと・・・」

「わかった」

私はレイジングハートに願う。

「お願い根源を探して」

私の願いを聞いてレイジングハートが無数の光をばら撒き探す。どこ？

「……………見つけた!!」

樹の中に人が2人いるその手の中にジュエルシードを持っている。

「よしなのは近づいて……………」

「うっん……………このまま行く!!」

「無茶だなのはもう少し近づいて」

「……………いいんじゃないねえ……………ぶっぱなせなのは」

鏡君の言葉、心が私に力をくれた今なら何だってできる。

「お願いレイジングハート」

『シユート』

レイジングハートから放たれた光は根源に当たるこのまま……………

「リリカルまじかる ジュエルシードシリアス？封印」

これで終わった……………樹が消えてなくなろうとした時

キラッ

小さな赤い目が見えたそして

ビュオオオオオオ

ものすごい速さで飛んできた。

「あぶねえ」

ガキン

鏡

ガキン

「大丈夫かなのは？」

「うんなんとか・・・」

何とか防いだがまさかこいつが来るとわな・・・

「鏡・・・あいつは？」

「珍しい人型のアラガミ・・・シュウだ！」

硬い翼手を持つ人型のアラガミ。

人型らしく翼手を用いた武人のような肉弾戦を繰り広げるわけでもなく・・・

「気をつける、掌にエネルギーを集中させて放出するしたりするぞ」

「うんっ」

「おいなのは？」

なのはがよろめいたあの遠距離射撃そんなにきついのか？

「じゃあねえなのはさっさと逃げる　後ユーノ念のため屋上に結界はっといてくれ」

「そんなことしたら君も出れなく・・・」

「安心しろ俺は元からこいつを喰うまで出る気はない!..!」

「でもっ」

ふわっビュオオオオン

また飛んできた。

「うおっ」

「きゃあ」

やばい逃げられる。

バチチン

何か見えない壁でシュウの行く手を防いだ。

「いいぜ、ユーノ」

早速捕食する・・・そしてこのバースト中・・・決着^{けり}を付ける！

だが伊達に硬い翼をもっているわけで簡単に怯んでくれないその証拠に、さっきから一発ずつのヒットアンドウェイで攻撃している。

派手に動くとなのはに標的が行っちまう・・・

「決定打がない・・・か」

「・・・お願いレイジングハート・・・力を貸して・・・」

『スタバイレディ!!』

ピカッ

いきなりレイジングハートが光ったそしていきなり俺の神器も銃形

態になった・・・??

「どういうことだ・・・っ!!」

すぐに次の行動がわかるが・・・もうヤケだ!!!

「受け取れっ!!」爆炎玉

俺はアラガミバレットをなのはに向けて撃った。だが攻撃用じゃない

「ふえな・・・なにこれ??力が・・・すごい・・・」

なのはが光る・・・賭けは成功だ。

「『リンクバースト』濃縮アラガミバレットだ撃ち抜け!なのは」

「うん」

「いくよ今の私の全力全開!!!」

足元に魔法陣が描かれ、レイジングハートにもリング状の魔法陣が4つ・赤と桜色のリングが浮かぶ。

「バーニングディバインバスター!!!」

炎の魔砲弾レーザーがシューウをえぐるおいおい頭と右羽みぎうなくなってるぞ・・・
しかも。

ガチャーーーン

ユーノの張った結界ぶち破りやがった・・・あれ？こんなに威力高かったけ？

「グオオ」

怯んだ今だ！！

「せえの・・・くたばれ」

3連続チャージクラッシュをお見舞いしたそしてシューウは動かなくなつた。

俺が捕食しているとなのはが駆け寄ってきた。

「大丈夫だった？でもあの子頭ないのに動いてて」

「前にも言ったがあくまでオラクル細胞の集合体脳も骨もないから神器でコアをやらなきゃだめなんだよ」

へえと感心する 俺もユーノに聞いた。

「おいユーノお前のところの魔法『非殺傷』なんだろ」

「あああそつだね怪我はするけど殺さないよ」

「……あれで？」

目を向けた先はバーニングデイバインバスターの射線上明らかに屋上がえぐれ焦げている。鳥に当たったら焼き鳥でもできそつだ……

「……たぶん」

ユーノも自信がないらしい。

フェイト

ジュエルシード反応があった幸いこの近くだ屋上から見えるだろうか？

そして見えた辺りに大きな樹が広がっている。

「フェイト行こう」

「うんアル……フ？」

そう思っただけに見えたのは、鏡そして知らない白い魔法少女……たぶんこの前言った家主の子……

「っ……」

抱きついたそれに何か話してる……何の話をしてるの？

そうしてる間にあの子がジュエルシードを封印普段ならあの距離での封印は驚くけど今はそんなに頭が回らない……

「どうして？」

でもその後樹から何か飛び出した恐らくアラガミ 結界を張って挑む鏡とあの子……鏡が何か光るものを撃ったそうしたら白い子は魔力が上がった。

そしてそのまま倒した。

「……」

「イトフェイト……！」

「?!?!?!」

気がつくともアルフが呼んで私は泣いてたどうして泣くの今まで母さんに叩かれても泣かなかったのにどうして???

身体じゃなくて心が痛い。

第7話 く戦神の目覚めく近くと遠く(後書き)

蛟那「というわけでいきなりSLB並の攻撃出ちゃいました」

鏡「これでSLB出したらどうなるんだよ・・・」

蛟那「さあ？」

鏡「しかし今回は最後の最後で少しシリアスだったな」

蛟那「最初の予定だとシユウ倒して終わりなんですけどサブタイトルあれにしたら

？フェイトに見せた方がいいんじゃないかね？と思いました」

鏡「フェイトファンに殺されるぞ」

蛟那「まあそこはあれですでここまでがなのはのターンです」

なのは「ふえ？」

蛟那「力としては無印だところが第一のピークそしてここからフェイトのターン」

なのは「えっ私と鏡君が　するんじゃないの？」

蛟那「いやそこまで考えてないな」

フェイト「次回をお楽しみに」

なのは「そんなー」

第8話〜ワールウィンド〜猫の対抗心（前書き）

蛟那「・・・なんかグダった」

鏡「じゃあなんで飛ばさなかった？」

蛟那「このアラガミだけ出したかった・・・ただそれだけ」

鏡「ついでにデバイスの単語が安定してない・・・」

蛟那「もう次回からカタカナじゃあああ」

第8話〜ワールウィンド〜猫の対抗心

鏡

ニャーニャー

「……かわいいなあ」

「うふふすっかりメロメロね」

「しょうがないよ、鏡君動物って皆初めてなんだし」

「まったくあの笑顔の少しはなのはにあげなさいよ」

「ちょ……ちょっとアリサちゃん?!?」

「あれ〜半分だったかしら？」

「もういい加減に……」

「んあ？おい何か言ったか？」

「あつ……えと別に……」

「そうか」

そして俺はまた猫を撫でる・・・至福だ。

俺たちは今すずかの屋敷でお茶会をやっている。始め屋敷を見た時はなのはにゆすられるまで呆けていた、更に中にはメイドさんが出た。

昔コウタが話してたものだ・・・

そして俺に衝撃を与えたのがこの猫たち・・・たくさんいてかわいい俺どんな顔してんだろう？ニャー・・・まいつか。

「あんだ猫派だったのね」

「いや犬にはそんなに会ってないからな」（アルフは3日間の説得により狼だと認識）

「でもこうして見ると・・・動物っていいな・・・」

キューキュー

「あつユーノ君!？」

ユーノが小猫にじゃれられなのはが助ける。

「でもユーノ君は興味持たないね?」

「いや〜なんか細胞レベルで拒否してるんだよな・・・俺フェレッツ駄目なのかな？」

「さすがの問いに少しなよ・・・ニヤ・・・撫でる。」

「今日はもうこんな一日でいいやと思った時」

『なのは鏡！ジュエルシードだ』

「・・・俺の幸福は音を立てて崩れた。」

「じゃあ私ユーノ君探しに行くから」

「ああ〜なのは・・・はあ・・・俺も行く」

俺は溜息交じりに付いて行った。

「残ってもいいのに」

「いや何かでかいの来たら駄目だろ・・・念のためだ」

「うんありがとうノ」

そんな訳で進む森の中・・・そして念のため結界を張る。
又あの草か樹かと思って見つけた化け物は・・・

「あああああれは??」

「おお」

ニヤー

サイズがでかくなつたただの猫だった。

「たぶんあの猫の『大きくなりたい』って思いが・・・正しくかなえられたんじゃないかな?」

「そ・・・そっか」

ユーノが啞然としなのはが頭を抱えるそして俺は・・・

「撫でてえ」

「駄目だよさすがに危険だから」

「そっだね・・・この大きさだとすずかちゃん困っちゃうし」

俺としては問題なしだがな・・・

「少し撫でたいな・・・」

「はいはい後でね、ジャアレイジンハートいK・・・」

ドゴーン

「なっ?!?!?!?!」

「へ?」

猫が魔砲弾に撃たれた。

なのは

「っ!」

私は後ろを向いた。

電柱の上に一人の女の子が立っていた。何処までも綺麗な金色の髪
綺麗な目、その手には黒い杖。

「レイジングハート！」

私は、変身と同時に猫を守った。

「あの魔導師……バルディッシュ」

[Photon Lancer FullAutoFire]

「う……きゃあ」

猫の足に放たれた魔砲弾は当たって猫が倒れた。

そしてあの子は近くの樹に飛び移った。

近くで見ると本当にきれいな子だった。だけどその眼には感情がないように思えた。

「あ……。あの……」

「ロストロギアジュエルシード」

「Scythe Form set up」

杖が鎌のように変わって私に向ける。

「申し訳ないけどいただいています」

次の瞬間消えるような速さで切りかかってきた。

「Evasion」

レイジングハートの機転で上に逃げる。

「あうっ！」

防いだ瞬間もう目の前にあの子が飛んできた。

ガキン

レイジングハートで受け止めても押されてる……この子……強い。

「どうしてこんな？」

「……ど……て？」

何か聞こえたさつきまで、感情がないような眼をしていたのに、段々怒ってるように感じた。

「えっ……なに？」

「どうしてあなたが……」

ガキーン

「きゃああ」

そのまま地面にたたきつけられた。体中痛い……でも。

ガチャン

上を向くと女の子は私に杖を向けていた今度は初めに見た射撃型で。

「……」

「Device Mode」

杖に魔力がたまる。もう駄目

ゴツンッ

「あっ?!?!」

「何やってんだ?フェイト」

鏡君が助けしてくれた・・・と思ったけど何か様子が・・・

「き・・・鏡・・・いたん・・・だ?」

「いたよ!まったくどうすんだあの猫?怪我させたら怒るぞ!」

「い・・・一応威力は最低だから怪我どころか・・・その」

「びっくりしてるだろ!・・・はぁ・・・まったく普通に近づいて封印すればいいだろ」

そんな話を続けていた鏡君は怒って呆れてて・・・女の子は、びっくりしてしょんぼりしてる。

『嫌だ!!』

「鏡君……」

「ん？あなのは大丈夫か？」

「あ……うん」

普通に返してくる鏡君にユーノ君が聞いた。

「鏡もしかして彼女が以前言ってたジュエルシードを上げた子かい？」

「ああそうだ」

その返事に思い出したむかむかした夜の事を……

「……あなたは……」

ニヤーーー

突然猫さんが光り出した。何か苦しそう。

そして影から何か出てきた

それ大きく、猿の大仏さんのような・・・

鏡

おいおい今度はこいつかよ。めんどくせえなあ

「鏡「君！」

なのはとフェイトが同時に叫ぶ。

「・・・コンゴウ逞しい猿神の姿を持つアラガミだ。くそっ」

どうする考える。

「・・・あれは俺がやるからお前らはジュエルシート回収しろ!」

「あ・・・でも!」

「でもも何でもいいから早くしろ・・・こいつは暴れるぞ」

そう、先のオウガテイルやシュウと違いこのコンゴウは活性化すると無作為に暴れる。

ソロや仲間の部隊なら安心して指示もだえるが。

片や素人魔導師片や実戦経験（？）はある程度あるが不安定な魔導師……逃がすしか選択肢はなかった。

『ゴガツガガアアアアー』

コンゴウが吠えるそして攻撃を繰り返す。

先ず腕を大きく振りかぶりそのまま周りを回転しながらパンチを繰り返した。

「うわわっ」

「速い？」

回り終えたら背中のパイプで空気の塊を噴出した。

空気の塊はなのはをかつた。

「キヤア」

「エアブロウだ旋回しながら行け」

エアブロウした瞬間に立ち上がる……チャンスだ。

「はなれとけっ」

ドゴーン

いきなり地面にボディプレスして周りの地面に揺れがおそった。そこを狙う！

ジュルルル

「・・・今なら喰えるか？」

そして喰らった瞬間次の行動は顔と背中を壊しにかかる。

幻影剣は破碎属性だ簡単に壊れる！！

バキンバキン

よし同時に壊れた後は…

ニニヤーン

「は？」

猫が起きたおいおいまだ回収してなかったのかよ。

グオオオオオオオーオオン

と同時に活性化・・・帰らせてえ。

そしてコンゴウは腕を大きく振りかぶる。恐らく前に殴るんだろっ。

「落ち着いて対処すればオルケストラで防ぐか避ければ……」

俺は

グオン

ガキン

避けれなかった。

ザクッ

フェイト

どうして避けなかったか……

今考えればわかる。後ろの猫だ……

前のアラガミと後ろの猫が同時に攻撃したんだ。

もしよければ力の弱い猫が押され怪我をしてしまう……

「あたしの……せいだ……」

初めの時威嚇射撃などせず高速移動で近づいて封印すればこんなことにはならなかっただろう……

だって前の時あの子の射撃がすごくて……それで……

「鏡君!!」

白い魔導師の子が鏡に近づく……私も急いで駆け寄る。

グオオーン

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロ

いきなりアラガミが転がってきた。

何とかギリギリでかわす安心した瞬間。

アラガミが立ち止り近くに真空波を出してきた。

「きゃっ……!!」

私たちは上に吹き飛ばされた

私は鏡に手を伸ばした無意識にあの子にも……でも……意識が……

ガシッ

「……え？」

掴まれた手に引き寄せられ生温かい背中に乗せられ……落ちた。

鏡

ビュオン

・
・
・

・

スタン

「あーあぶねっ」

なのはとフェイトを引き寄せて落ちた先はユーノが防護ネットのよ
うな魔法陣で受け止めてくれた。

「ありがとよユーノ」

ユーノに礼を言いなのはとフェイトを下す。なのはは完全に気を
失っていた。

「……フェイト俺が注意をひくだから猫からジュエルシード回収
して帰れ」

「えっ!?!」

なんかすんげーショックな顔してるな・・・言葉がひどかったかな？

「あゝあれだなのはに説明するの今だるいから・・・大丈夫だジュエルシードはお前が持っていていいしまた家に行くから。」

「・・・本当？」

なんかもつと心配そうな目をした・・・ジュエルシードでそんなに心配かな？

（そこはまた家に来てくれるかって処心配してんだよ馬鹿！！（アルフ談）

さていこうか・・・と思ったその時。

「Device Link Mode」

突然バルディッシュが銃形態になり先が光り出した。聞いた言葉が間違いないなら・・・

「フェイト俺に向かって撃てっ！」

「えっ???わかった」

放たれた弾丸は金色の光に輝いて俺に当たった。

「……これは？」

今までのリンクバーストとは少しちがかったなんだか体中の細胞が捕食のオラクル細胞接種より活発していた。

「グオオーー」

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロ

また転がってきた俺はそれをかわして叩き斬る。

しかし……感じたのは違和感だ……もちろんいい意味での。

「……なんか威力上がってるなあ」

先ず攻撃力というわけではなく普通ははじかれる部位が確実にダメージが入っていた。更にそこそこのところも大きなダメージになった。

「いつまで続くんだ？」

普通は一定時間たつと切れるバースト状態がいつまでたつても切れない……まあ後で考えよう今は……

「もうすぐだ……」

こいつを喰らう！

「せえの……」

いつも通りのチャージしかし

バリッバリッ

「……金色の……光？……私の？」

黒と金の合わさったオーラが歌劇の幻影剣にまとう。

「……くたばれ！」

ズバッ

絶大な威力、まだ倒れないので一応駄目押しで……

「くらえ」サンダーランス

濃縮アラガミバレットの勢いで出したが成功した。

槍状の雷がコンゴウに突き刺さる。

「オオオーン」

そしてコンゴウを討伐した。

「鏡!!大丈夫?」

「ああ平気だ・・・さっきの何だかわからないがまあいい意味でよかったぜ

ありがとうよフエイト」

「あ・・・うん／＼」

顔が赤くなったこいつも風邪かな?

「あのねき・・・「ナヤオーン」

「・・・」

「・・・」

「……おいフェイト?」

「…….…….…….はい」

「速くあいつ戻せ」

しばらくして猫からジュエルシードを取り出しフェイトは帰った。

そして今俺はユーノに服を簡易修復してもらってる傍らには、なのはがいる。

「……何で彼女にジュエルシードを?」

「さっきの勝負はなのはの負けだからな」

「そんな理由で!?!?」

ユーノは驚いたと同時に怒りのような感情もこもってる。

「確かにジュエルシードは危険だと聞いて手伝うといったなのはを手伝うと言った……けどなのはに何か足りない……」

「なにか?」

「子供だからまだまだ考えればいいさ……とにかく無理せず考え

させれば」

「何で彼女の事を言わなかったあの子は一体？」

「あの夜言ったる綺麗な子だったってそれに名前は本人同士で聞くもんじゃねえのか？」

俺の言葉にユーノが呆れ、なのはをおんぶして帰った。

なのは

私が目覚めたのはもう空が夕暮れに染まる頃でした。

鏡君が私とユーノくんを探してる内に転んで気絶たと、少しだけ嘘をついてくれて。

みんなにすごく迷惑を掛けてしまって。

それでも鏡君は。

「あれは俺のミスだ……しっかり守ってやれなくてごめん……
なのは」

そう言って謝ってくれたその背中にはあの時の傷があった。少し騒いでたけど私と同じ絶対安静

ごめんなさいの気持ちでいっぱい。

でも不思議なほどに怖くはなくて、でも何だか悲しいような、そんな複雑気持ちでした。

第8話〜ワールウィンド〜猫の対抗心（後書き）

なのは「よしあの子に取られる前に鏡君拉致だー」

鏡「なのはが壊れた・・・めんどくさい」

なのは「じゃあ温泉行こう!」

フェイト「そうはさせない!鏡は私が貰うわ!」

なのは「なんですってー!!??」

鏡「・・・本当にくだったな・・・」

蛟那「次回はいよいよオリジナルアラガミ出ます」

鏡「えっそこ?」

第9話 大地の呼び声 悲通の叫び (前書き)

蛟那「フェイトのターンといいながらなのはが目立つ」

鏡「いいのかそれで？」

蛟那「難しいなごういづの」

第9話　大地の呼び声　悲通の叫び

鏡

本日は快晴なり。

4月の連休、高町家と月村家とバニシング家＋俺で温泉に出向いた。元々連休に慰安旅行に行く予定だった高町家。それに合わせてすずかとアリサもついて行った。

そしてそのまま温泉に入る男性陣。ユーノ？なんか騒いでたけどそのままにした。

「温泉つて要はでっかい風呂だと思ったが・・・結構いいものだな」

風呂が大きいからかそれとも水質がいいのか？とにかくのんびりしてる。

「さてとっ露天にでも・・・わっ鏡何やってるんだ?!」

「がぼがぼがぼがぼ」

気持ち良すぎてそのまま寝てしまったらしい道理で息が苦しいはずだ。

そして恭也さんに助けてもらいまだつかるが何度か同じことを繰り返してしまった。

「ああ、死ぬかと思った……」

さすがに溺死は苦しいな。

そんな事を考えてたらなのはがいた。しかも目の前には見た事あるオレンジ色の狼娘……ナニコレ？

『……ガブツといくわよ』

近づくと何か念話っぽいの聞こえてきた……どうしよう？

「……あつ鏡君」

「なに?! 何でお前が??」

なのはが俺に気づきアルフも俺に気づくやれやれ2人とも同じ顔になってるぞ。

「温泉なんだから入って出来たに決まってる」

「ぬう〜だけどフェ」お前らには来る前に言ったはずだが?」・・・
・ほへ?」

そ〜いやなんかアルフは食った後俺の横で寝ちまったっけ? それで隣にフェイトいるからそのまま話したから・・・アルフ聞いてないか?

「んん〜くそーー!!」

アルフは逃げ出した。

「.....」

「.....」

俺となのはおいてけぼりをくらった。

夕方俺はもう一回温泉に入ることにした。

何故かって? わかんないがもう入れそうにない気がするんでな。

しかしだ・・・何故かとなりには・・・

「き・・・鏡君・・・いいよこつち向いて・・・／＼」

「ああ」

なののがいた。

単純に時間があったし聞きたい事もあった。だから冗談のつもりで
混浴に誘ったら
即OK。

さすがの俺も焦ったので、念のために皆（土郎さんと恭也さん）に
注意してはいった。

カポーン

なんか獅子落としてのなの聞こえるけど気のせいだろうこくないし。

「あのね鏡君・・・何で私に教えてくれなかったの？」

突然なののが聞いてきた。恐らくフェイトの事だろう？

「名前は自分で聞け！そうでない不公平だ・・・」

「・・・うん・・・」

なののがしょんぼりする。やっぱり俺の思った通り”あるもの”が

なのには足りない

「・・・前にユーノにも言ったが・・・あいつとぶつかるのはなのは
の役目だけど・・・」

「だけど？」

「お前は足りないものがある・・・それは大人でも難しい事だから
存分に考えろお前は見つけられるって思ってるから」

「うん」

「だがこれだけは言うておく・・・一人で抱え込むな・・・そし
て・・・なのはが答えが気付くのを俺は信じてる」

「ありがとう鏡君」

うおっいきなり抱きつてきたやばいなんか熱い暑いあつ・・・

その後俺はまた沈んだしかも今回はなんか違う理由で・・・

その夜なのはが抜けだした。

俺は、暇潰しように『海鳴饅頭』を手にゆっくり向かった。

「・・・結界も張ってないのかよ」

何か上で桜色と金色の光がバチバチぶつかってんですけど・・・決闘中かな？

そして森の奥に進むとユーノとアルフがいた。

「やっほ〜」

「「鏡!」!」

俺が声をかけるとユーノとアルフが驚いた。

「・・・んで?どんな感じ?」

「今なのはともう一人の子が闘ってる」

「まっあたしのご主人の方が強いから勝つね」

切羽詰まってるユーノに対し余裕なアルフ・・・なんか対照的な奴等だな・・・

「なるほどね・・・それはそうと・・・餠頭食つか？」

賛同したのはアルフだけだった。

しばらくして。

ガキンッ

なのはの首にバルデッ シュがつきつけられる勝負ありだな。

最後の餠頭を口に頬張りなのはを回収して寝るかと思った時。

疼いた。

「なんだ？」

辺りを見回すとそれはいた。

樹の先で腕を組みこちらを見ている。

形としては依然闘ったシュウだがその”容”が異常だった。

顔は土で出来た人面 腕はゴリラのような巨大なもので、コンゴウの二倍ほど大きさはある。

胸は赤い岩石で覆われ、おまけに背中にはダイヤモンドのように透明に輝く岩石が角錐の形をして六個刺さっている。

なんかこうシュウをベースにコンゴウがくっついた感じだった。

なんだあれは？新種か？？

だが、詮索はできないな用心して・・・

「ユーノアルフ・・・あいつら逃がせ・・・速く！！」

「えっでも以前は行けてたんじゃあ・・・」

確かに行けてたけど、知ってたからだよ。

「偶然だ！しっかりとした対処法がない今は危険だ！！」

だからソロでいい牽制しつつ時間をかけて・・・喰う。

そして開戦・・・シュウのような奴だが基本行動はコンゴウみたいだ。

殴りかかってくるのはもう慣れた。このまま一気に・・・

『ゴオオオーン』

いきなり左腕を地面に叩きつけた瞬間周りに地割れが起き直後大きな岩が生えてきた。

ガキン

「そんなのもありかよ・・・」

突然の出来事に避けられないがガードは成功、だがそのまま相手は殴りに来た・・・駄目だこりゃ避けられねえ。

ダメージ覚悟のその時

「・・・バイン・・・」

!?

「バスターー！！！」

ドガン

遠くから桜色の砲撃が飛んできた。すぐに誰だかわかった。

「……まあ今回はたすく「鏡君」……って待てこっちくんない！」

そのまま遠くから援護しろ。接近は駄目だ。

『ツグググウツグオオウオウオウオオーーー』

いきなりあいつが吠えだした瞬間両手を地面に叩きつけた……やばいつ!!!??

ドゴーン

「ぐあつ」

「きゃあ」

予感的中!アラガミの周りを円を描くように地面から岩が隆起したそれがまともにあたった。

俺でもきついのはなのはもう限界だろう……早く……にがさねえと……

「なのは！俺を……信じて早く逃げろ！！」

「いやだつ鏡君も早く！！」

だゝもうそんな暇はないんだっての……それにこいつは今倒さないと駄目なんだ……

なんかお辞儀してるし早いとこにがさねえと……

グチャ

あれ……

刺さった？

何が？

背中
の岩……か

「やべえ……ふ……かい……」

ウオオオーン

バサツ ゴー——

まずい……あいつを……逃がし……た。

意識が………何度目だ……おい………

なのは

「鏡君!」

急いで鏡君に駆け寄ったでも・・・

「血が・・・」

以前まえよりもひどい怪我、以前まえよりも多い血・・・それに目を開けな
かった。

「そんな鏡君鏡君鏡君！！き・・・」

何回も叫んでるうちにあの子が駆け寄ってきた。

「鏡！」

キーン

腕輪に触れたら碧色の光が鏡君に移った。

何だろうあれ？でも鏡君は目を覚まさない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そうしたらいきなり鏡君を持ち上げた。

「あつま・・・待って・・・・・・・・」

「私は……フェイト……フェイト・テストロッサ」

「えっ？」

「あなたが鏡の隣で闘っても……私が鏡の隣にいる！」

その子はそのまま声をあげて叫んだ。

「そう……私は鏡が好きだから……鏡の隣にいるのはあなたじゃない!!」

そのまま鏡君を連れていった……

私は……

……

……え？

す・・・き？

だれが・・・

だ・・・れ・・・お・・・

第9話 大地の呼び声 悲通の叫び（後書き）

鏡「んで俺何処行くの？」

フェイト「とりあえずずっと私の家にいればいいよ」

鏡「おいジュエルシードどうするつもりだ？」

鏡「そして作者これはどういう扱いなんだ？」

蛟那「こうでもしないと時の庭園行けませんから・・・気がついたら鏡がヒロインポジション！?!」

フェイト「では次回もお楽しみに」

オリジナルアラガミ紹介 無印編（前書き）

出るたびちよくちよく更新予定

オリジナルアラガミ紹介 無印編

蛟那「今回紹介するのは『夜天の主』時を越えるGod Spee
d』等を書いているクリムゾンさん考案のアラガミです」

鏡「記念すべき初感想にして感動のあまり即採用したんだな」

蛟那「実はクリムゾンさんからもう一体きてるんですが・・・種族的にAs以降って事になっちゃいました・・・すみません」

(原種 堕天・オリジナル)

鏡「ちなみに無印でギリギリ行けるのは『グボロ・グボロ系』かな？」

蛟那「では紹介ですとぞ」

名

『ガイア』

大地の神と言われる神になぞらえていることから、『大地』の力を操るアラガミ。

く見た目く

シユウのように二足歩行の人間のような姿をしたアラガミ。顔は土で出来た人面。破壊されると黒い顔が浮き彫りとなり、目が赤くなる。

腕はゴリラのような巨大なもので、コンゴウの二倍ほど大きさ。破壊すると拳から金色をした五本指が見えるようになる。

背中にはダイヤモンドのように透明に輝く岩石が角錐の形をして六個刺さっている。

胸は赤い岩石で覆われ、そこを破壊されると金色の体が露にされる。足はシユウと変わらず身軽なもの。（意外と足は速い）

見た目カラーは茶色。

シユウをの腕をあれ以上にごつくし、本当の腕がないがバージヨンの感じのアラガミ。

く技く

・パンチ

基本攻撃の一つ。

相手に向かってパンチを繰り返す。

パンチの攻撃速度は遅いため隙を狙える技でもある。

だが、破壊力は抜群で当たるとHPの三分の一を失うほど

・ロケットパンチ

体を捻らせたあと右手の拳を相手に向かってロケットのように飛ばす技。

拳が巨大でそれなりにスピードはあるが、直線にしか進まないし追尾もないので慣れればすぐに避けられる。

・突起

左拳を地面に叩きつけると、相手の足下に小さな地割れが起こりその直後巨大な地面の柱が生えてくる技。（ハンニバルの技に似ている）

・石投げ（叩きつけ）

膝を着いてしゃがみ地面から巨大な岩を頭の上に持ち上げ、その態勢のままジャンプし地面に向かって叩きつける技。
地面に直撃した石は拡散し周りを襲う。

・石投げ（投げつけ）

石投げ（叩きつけ）とモーションは同じだがジャンプしたあと体をしならせて遠くにいる相手に投げつける技。
その時に地面に石が当たったときも拡散し周りを襲う。

・大地の恵み

上に向かって雄叫びをあげると地面に向かって両拳を叩きつける。すると、ガイアの周りを円を描くように地面から岩が隆起する技。その範囲はディアウス・ピターの電撃の円と同じ大きさ。

・ダイヤモンドの矢

腕を組んでお辞儀のような格好をすると、背中にある角錐の形をした六つ岩石が相手に向かって追尾弾として発射される。
角錐は発射されたあとすぐに背中に新しい角錐が再生される。

〈怒り時後の状態・技〉

拳を握り締めた後、上に向かって雄叫びを上げ拳が赤くなると怒り状態となる。怒り状態となると格闘での攻撃力が上がり、足も速くなる。

・大地の怒り

赤くなつた拳を地面に向かって叩きつけると、石投げと同じ位の大きさのマグマで出来た石がガイアの周りに四つ形成されその中心でガイアが体を回転させ石を四方に飛ばす技。

その石が何かにぶつかるると巨大な爆発を起こす（グボロ・グボロ墮天種氷の砲台から発射された弾と同じ原理）

・大地の遊び

体を左右に捻らす動作をとつたあと、超高速回転で独楽のように回りだしそこらじゅう高速で動き回る。

動きはガイア自身にも制御出来ないため不規則に動き回るが、当たると大ダメージは確実なため必ず防いだほうがよい。

〈属性〉

神

〈弱点属性〉

神・氷

〈破損可能部分〉

両拳、胸、顔

〈弱点部分〉

顔（破損後）、拳（破損後）

く 堅い部分く

背中、胸（破損後は弱点）

く アラガミパレットく

・ 大地の矢

ダイヤモンドの矢が三連射される。

・ 岩石球

石投げの時と同じ岩が発射される。何かに当たると拡散する

・ 溶岩岩石球

大地の怒りの時のマグマで出来た岩が発射され、何かにあたると爆発を起こす

― 余談 ―

蛟那「ちなみにうまく書き切れてませんでした。第9話で鏡を刺して戦闘不能にしたのは『ダイヤモンドの矢』です」

10000PV突破企画

蛟那「いやっつたー！ー祝10000PV突破ー！！」

鏡「よく続いてここまで行っ たな」

蛟那「確かにここまで来れたのは一重に皆様たちのおかげです」

鏡「ちなみに単純計算1話で10000PVってとこだ」

蛟那「それを祝して今までの話の裏話思う所を語りたと思います」

鏡「んじやはりきってどっぞぞ」

プロローグ〜始まりの光〜

蛟那「ここはまああくまでゴッドイーターの設定とリリカルを結ぶ
架け橋みたいに書いたつもりです」

鏡「そう言えば俺どうやってきたんだ？」

第1話〜それは不思議な味〜

蛟那「なのははほかの作品でも一目ぼれという印象が強かったんですがフラグ其の1つで感じて書きました」

なのは「でも蕎麦を作るって無理があるんじゃない？」

蛟那「イメージ的に少しでも手伝わたらokって思いました。そしてゴッドイーターはトウモロコシ以外まともな飯はないと思います」

第2話〜想い〜

蛟那「ここは正直悩んだ」

鏡「確かに前半だけでよくな？後半の戦闘は？」

蛟那「後半のあれは、思い付きで勢いで書いた少し無理あったと思ってる」

第3話〜始まりへの道〜

蛟那「最初はバイトオンリーで行こうと思いましたが、無理矢理学

校入れてみました」

鏡「ここまで強引に行けるのは士郎さんの器と月村家の力が大きいな」

蛟那「よく転生者の話だと大学生や大人は判る問題だけどゴッドイーターの世界は、大人でもまともな教育されてないと思う」

第4話 覚醒 魔法と神器

蛟那「ここはもうテンプレです。えっ？2話辺りに見たって?? ナニカノマチg・・・すんませんコピペです」

鏡「しかも原作は多少知ってるがそれをうまく表現できないためもう後手後手だ」

蛟那「ジュエルシールドもなんかシリアスナンバー言わなくなってきたな・・・」

鏡「誰の力量の所為だよ!!」

第5話 悪魔の尾 鏡の世界

蛟那「ここからゴッドイーターのミッション名入れていくんですが・
・正直ネタ切れが心配」

第6話〜雷雨〜迷子と目的

蛟那「フェイトと会うだけ!」

鏡「そしてなのはも嫉妬深くなつたもんだ」

蛟那「なんせ魔お(ドガー—ーン)」

第7話　〜戦神の目覚め〜近くと遠く

蛟那「サッカーなんてわからないんで深く聞かれると正直穴だらけです。ヤメテそんな単語知らない」

鏡「作者はサッカーも野球もそこそこ好きな程度です。決して嫌いではありません」

蛟那「サブタイトルが結構悩んでこれいいんじゃないかね?と思つたらフエイトの心情が思い出てきて急遽増やした」

第8話〜ワールウィンド〜猫の対抗心

蛟那「この話もきつかった。(展開的に)邂逅はするけどまだお互い名乗らないのが難しい」

鏡「何故出したかというところ7話のシユウ8話のコンゴウがベースのオリジナルアラガミがあるのでその前に原種を出す必要があつたか

らだとか?」

蛟那「後ついでにフラグをバンバン発生させましたよやけくそで!」

蛟那「サブタイトルの猫はもちろんフェイトの事です」

第9話〜大地の呼び声〜悲痛の叫び

蛟那「この話のサブタイトルはオリジナルアラガミなのでそれっぽいミッション名をつけました」

鏡「作者いわくここでフェイトに拉致られないと時の庭園にいけな
いだからそうだ」

蛟那「一応この作品でのターニングポイントは時の庭園でプレシア
とアリシアに接触する事ですからね」

蛟那「ちなみにリンクエイドは9話時点でフェイトしか知りません」

なのは「ちなみに『 のアラガミは出ますか?』という質問がありました
そのところはどうか?」

蛟那「はいお答えします基本的にゴッドイーターバーストに出てくるようなアラガミは全部出していききたいです。が・・・もしかしたらかぶったり忘れちゃうかもしえないです。仮に忘れられたまま最終回迎えたら番外編になります。　けどまだまだ先なのになんでこんな話になっただん？」

10000PV突破企画(後書き)

蛟那「いかがでしたか?ここまでのご観覧ありがとうございます。
まだまだ至らぬ点がございますが、

『魔法少女リリカルなのは×GOD EATER BURST
神喰らいと魔法少女と』をよろしくお願いします」

第10話「届かない声」(前書き)

蛟那「フラグはいつの世も突然に」

鏡「無理矢理まとめたな」

蛟那「では本編です」

第10話 届かない声

なのは

温泉から帰ってきてからなのはは何も考えられなかった。

あの後皆に鏡の事を聞かれたが目が虚ろでまともな言葉が出なかった。

あれからしばらくたつが、鏡はまだ学校に来ていない。怪我が癒えていないのだろう。

だがそんな事もなのはは考えていない、むしろ何も考えてない。

『あなたが鏡の隣で闘っても……私が鏡の隣にいる!』

ただただ……あの夜のフェイトの言葉が頭の中で繰り返される。

『そう……私は鏡が好きだから……鏡の隣にいるのはあなたじゃない!』

何日だったか・・・もう彼女は覚えていない・・・

そんなある日のこと・・・

”いつもどおり”学校に登校するのはその踊り場で。

パチンツ

いきなりアリサにビンタされた。

「いい加減にしなさいよ！ この間から何話しても上の空でぼつととして！」

「あ、ご、ごめんね。アリサちゃん」

「ごめんじゃない！」

私達と話してるのがそんなに退屈なら一人でいくらでもぼつとしてなさいよ！

行くよ。すずか

アリサとすずかは、階段を下りて行った。

その後、2人に説明した。突然現れた金髪の女の子。鏡への想い。その時の気持ち。

(魔法は伏せてます)

2人は、黙って聞いた。そして終わるとアリサがまた叩いた。

そして聞いた2人の鏡への気持ち。

「・・・言つたよ私たちの気持ち・・・こんどはなのは・・・あんなの番だよ」

「なのはちゃん 鏡君の事どう思ってるの？」

最初はユーノ君の力になりたかった。

こんな私でも何かに役に立てればと思った。

でも今はわからない。

ジュエルシードは見つからないからフェイトちゃんとも会えない。

鏡君が応援してくれたから前に進みたいけど前に進めない。

そしてフェイトちゃんあの告白・・・

そんな焦り。

あんなに好きだったんだ鏡君の事。

鏡君に会ったあの日・私は初めての事でドキドキしたそれに、何
度も助けてくれて励まして。

私も何かお礼がしたかった。

それで手伝える一緒にいられると思ったのが、魔法の力。

自分の事でいっぱいだったけど鏡君はどう思ってるのかな？

そう考えると最近はあるまい眠れていないし、食欲も微妙にない。

でも前に進まなきゃあの日鏡君は言ってくれたよね。

『だがこれだけは言っておく……一人で抱え込むな……そして……なのは答えが気付くのを俺は信じてる』

鏡君が信じてくれてるそう想ってくれているから前に進むよ。

それにこのままだと取られちゃう……私だって鏡君の事が……

そう……今度は私の番。

私は前に進むから『覚悟』を決めて。

「私は鏡君の事が……」

~~~~~

アルフ

あの日からまた鏡が住むようになった。

もちろんまだ目は覚ましていない。一応腹の傷は応急処置したが医療魔法が使えない私たちはただ見守るしかなかった。

「……どうアルフ？」

「あつフェイトまだ起きないよ」

「……そう……」

「そんなにしよげないでよフェイトあんな大声で告白したんだからもっと自信持ちなよ……」

「つ／＼／＼！！！！？！！！！？」

あつやばいまた暴れちゃった。まだこのネタはきついかな。

話は戻して、なんで医療魔法使えないのに何で連れてきたかという  
と・・・

―温泉の日の夜―

ドサッ

家に帰った私たちは、ベッド（以前鏡が使ってた）に鏡を寝かした。

「フェイト！大胆な事するねー私は嬉しいよ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「まさかフェイトにあんな意思があつたなんてこれであの白いおち  
びちゃんも・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ってあれ？ふえいとくおーい??」

覗き込むと青ざめていた。が次の瞬間！



「ああ〜それは〜」

「／／やめていわないでー」

「んぎゃ！落ち着いてフェイト！バルデッシュ振り回さないで・  
ほら落ち着いてー!!」

そのまま暴れたり泣いたりで1日が過ぎた。

つまり、鏡がやられた夜、気が動転したのは白いおちびちゃんだけ  
ではなく、フェイトも同じ。

しかも先の戦闘シユエルシートとなのはで魔力は少なく更にリンクエイドで体力も少な  
くって判断能力がかなり低下であるの惨事・・・

そりゃ今まで仮面のようにふるまってきてたから爆発しちゃったの  
だろうさ。

そして朝になってフェイトは目を覚ましたが、鏡は今でも目を覚ま  
さない。

ー回想終了ー

「ほら、行くつフェイト何か食べないと鏡がみたらまた怒られるよ」

「うん・・・ありがとうアルフ」

その時

「うるさいなあ」

後ろからだるそうな男の声が聞こえた。

鏡

声が聞こえる・・・この声は聞いたことあるな・・・

「うるさいなあ」

「鏡!?!」

「鏡・・・よかった・・・きょーっ」

アルファが驚き、フェイトが泣きながら抱きついてきた。

「・・・悪かったフェイト・・・・・・ごめんな」

「ぐすっ……うん」

そのまましばらくフェイトは鏡の胸で泣き続けた

「しかしあのアラガミ何なんだ？」

鏡はあのアラガミについて考えていた。

「鏡でも知らないのかい？」

「ああ……新種だから名前もないんだよな……」

だが、今後接触したとき名称がないと色々不便だ（報告その他）  
だけど俺あんましこういうの分かんないんだよね

「なーんか地面をけっこう派生させて鬪ったからな・・・なんかいい名前あるか？」

「・・・ガイア」

「？ガイア」

「あつえと地面っていうより大地をモチーフにした感じだからそのままで大地ガイアなだけど・・・どうかな？」

おおそれいい。

「いいじゃねえか俺よりネーミングセンスあるぞ？」

俺は勢いでフェイトを撫でた。

「えっ／＼ああ・・・うん」

なんか嬉しそうだな・・・なぐんかすずかの家の猫たちを思い出す。

そのまましばらくフェイトを撫で続け気がついたら昼がすぎてアルフが部屋の隅でいじけてた。

フェイト達と、昼食を食べてどうするか？と考えていたら、フェイトから提案が出た。

「鏡・・そろそろ私たちの目的を話そうと思っててね」

フェイトの言葉にチラッとアルフに目をやる。そうしたら2人はうなづきながら語る。

「大丈夫だよこの事は前からアルフと相談していたから、もう納得してるよ」

「そうか・・・それで目的・・・誰が集めてるんだ？」

「母さ・・プレシア・テストロッサ、私のお母さんだよ」

此処は時の庭園という場所らしい。次元を渡る船と説明されたので、でっかい家型ヘリヤ船と解釈した。

「こつちだよ」

長い廊下を抜けあつたのはでっかい扉。

ギギギ・・・

ボタンッ

「母さん・・・ただいま」

「なんだ？誰だいその子は？」

かなり警戒している何だこの人？

確かにフェイトに似ているな・・・笑ったらもつと似てるかな？桃子さんとなのはみたいに・・・

「次元漂流者の暁鏡です・・・ゴッドイーターやってます」

「ゴッドイーター？」

「簡単に言うと化け物退治」

「それで何でフェイトとつるんでるんだい？そんなに魅力があるとは思えないんだが」

「フェイトは綺麗ですよ・・・からかって面白いし」

そう言うとプレシアは表情を変えなかったが隣のフェイトは顔を伏せた。

「それはそうとジュエルシードは？」

「はいいいえ」

そう言ってプレシアに現在のいまジュエルシード4個を渡した。しばらくすると。

「ちょっと話があるから後ろの2人は出て行ってくれるかい？」

プレシアが命令し俺とアルフは出て行ったがアルフは心配そうにその様子を見ていた。

「……何か心配だな」

俺がポツリと言う。

「そうだよやっぱり戻ろうプレシアは……」

軽く説明された要はフェイトに虐待しているらしい。何か聞いてイラつく。

「めんどくせえ……なっ!!」

ガッ

「はっ??何やってんだいこんなんで開けらるわけ」

俺は扉押した。だがびくとしなれと思った。

ドクン

・・・ギギギ

「えっっそ????」

アルフが驚いたが俺も驚いた何かやたら力があふれる。扉が開きそこで見たものは。

「・・・」

そこにはチェインバインドで縛られたフェイトと鞭でフェイトを叩いてるプレシアがいた。

「あら、何ってお仕置きよ。だってジュエルシールドはたったこれだけ・・・」

グチャ

俺は手から神器を取り出し火炎レーザーを数発撃った。

「っー」

プレシアがギリギリかすりそのすきにアルフがフェイトを助けた。

「アルフ、フェイトと一緒に・・・外で待つててくれないか？」

「わ・・・分かった死ぬんじゃないよ」

アルフはフェイトを抱え此処から出た。

「なんだいそれは？見たことないデバイスだけど？」

「これは神器・・・化け物を喰う俺の相棒だ」

「ふんっ道具を相棒だなんてばかばかしいわね」

「一応この魔導師を見てきたつもりだが、インテリジェントデバイス 使い魔 それらに絆や愛情があった」

俺はこれまでの（2人しかいないけど・・・3人か？）魔導師の気持ちで感じた事をプレシアに伝える。プレシアは黙って聞く。

「それが何で血を分けた親子で憎まなきゃいけない？」

俺は言い終わると

「黙りなさい!!」

ドカーン

いきなり魔法陣から雷が放たれたそれをギリギリでかわす。

「11のっ!」

ばさっ

覆っていた布に引っ掛かり布が落ちて覆っていたものを露わにする。

それは

「なんだこれ？」

そこにいたのはカプセル詰めフェイト・・・に見えたがなんとなくちがう。

「誰だこいつ？」

バチンッ

呆けていたら雷が落ちてきた。ギリでガードプレシアの攻撃だろう。

「あら？よくわかったわね・大抵あの人形と間違える奴ばかりだ  
と思っただけどあなた良い目してるわね」

「・・・人形？・・・間違える？」

その単語に鏡は、一種の不快感が湧いた。すぐに誰の事かわかっ  
てしまったから。

「ええそうよフェイトはこのかわいいアリシアの出来そこないのク  
ローン贗物なのよ」

当人に聞かせたら寝込んでしまうだろう そんな話をプレシアは続  
ける。

「これがねえ」

カプセルに触れたその時

キイーイーン

何処からか声が聞こえる

感応現象か？

ママ

《ここはどこかの研究施設か？》

『アリシア少し待っててねママすべて終わるか』

『うん、私良い子で待ってる』

だ  
やだ  
《さっきの施設が・・・燃えている?》

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『アリシア目を開けて！アリシアアリシアアリシアー』

おね  
ごい

『じぶんじぶん・・・・・・・・』

『大丈夫大丈夫よあの出来そこないが集めているから・・・もうす  
ぐ』

『ママが・・・ママが助けてあげるからね・・・』

m を f t を

『アリシア』

たすけて

ブツンッ

「離れなさいこの餓鬼!!」

バン

プレシアに突き飛ばされた。

「・・・???!?」

時間にして1秒もみたくないやり取りだが鏡にはカプセルに触れた瞬間まるで1年の年月が経ったかのように感じた。

「出て行きなさい!!早く!私のアリシアに近づかないで!!」

もはや聞く耳なしと判断し鏡はそそくさと出ていく。けどその前に。

「プレシア」

「なんだ!?!」

「あなた・・・アリシアが何想ってるか知ってるのか?」

「知ってるわアリシアの思いなんて早く助かりたいでしょうねだから」  
「はあ」

プレシアの言葉に俺は溜息を吐いた。

「そんな思い込みはやめるまったく何処の世の親は子供の考えが全部わかると思ってるようだが・・・子供は親が思ってるほど難解で色々考えてるんだ  
最後に話したのはいつだ？あの事故の時か？その時の言葉が本音だと思ってるのか？子供でも5歳未満で嘘をつくぞ！」

鏡の話にプレシアは、困惑した・・・何故事故の事を？

「あんだ・・・なんで？」

「俺に聞くなちゃんとして子供に聞けあんたは2人もいるんだ・・・しつかり相談しな」

「2人・・・？」

「ああ・・・2人だ話をしろよ・・・本音で感情で・・・親子なんだからな」

ギギギ・・・

「・・・悪いな・・・こりゃ一筋縄じゃいかないな・・・」

鏡は改めて後ろを見たその先はプレシアではなくアリシアを見てい

ボタン

た。

第10話 届かない声 (後書き)

なのは「これが私の気持ち」

フェイト「魔法は力なのかな？」

鏡「だけど一時でもほしいなそんな魔法(力)」

蛟那「しかし今まで見てみると誤字脱字がひどいな」

鏡「・・・反省してるか？」

蛟那「ごめんなさい」

第10・5話 夕刻の間 (前書き)

蛟那「こんな話ですクリムゾンさん」

鏡「何でここで返信?? 迷惑だろ!」

## 第10・5話 夕刻の間

フエイト

私たちは帰ってきた。母さんから受けた傷は浅かった。いつもより早く終わったから。

「鏡大丈夫だった？」

「ああ大丈夫だ・・・それより腹が減ったな・・・」

「ああ何か持ってくるよ」

アルフは駆け足で台所に向かった。今なら鏡と2人つきり・・・つていっのかなこれ／＼？

「それにしてもどうするかな？」

「えっ？なにが？」

「ここ数日学校にも行ってない・・・土郎さん達に何て言おうか？」

土郎・・・多分あののはって子の親・・・

「鏡は・・・帰りたいの？」

そう想うとなんだか嫌な気持ちになったあの子のところに行くのが・・・

「そうだな次に会う時にフェイトが負けたら…かな？  
とにかくなのは親には世話になって恩もある説明しなきゃいけない…怖いけど」

そう言われるとなんだか負けたくない…いや負けられない！！

「あのななんか変な事考えてるようだがまずジュエルシードの封印が先だぜその後回しにされると大変だからな」

「うんわかったそれはまかせて！」

「ああ期待してるぞ」

そう言って又撫でてくれるんだか手が顎あたりも撫でてきてふと目が合う。

「きーッ」「ごめーん鏡冷蔵庫空だった」……「ピキッ」

なんか初めてアルフに怒りを感じたかも……

「そうか…じゃあ買い物行くよ…何か買つとかないとな」

「あ…じゃあ私も…」

「今は休んどけ・・・で？何食べたい？」

心配されているのか優しい口調、鏡と居たいと思っけど。

なんだか今日はカレーが食べたくなくなってきたな。

そう言ったら鏡は出かけた。また帰るんだと思うとつれしいな。

それはそうと

「アルフ少しOHANASSIしよう・・・」

なのは

アリサちゃんと喧嘩をした日ようやく周りに耳を傾けれる程度に気持ち落ち着いたけど話を聞いたらまた暗くなる。

それは・・・

「おい聞いたか？なんか街の至る所で大きい穴が開いてるんだって？」

「きいた聞いたなんか爆弾使ったわけじゃないらしいぜ　音も聞こえないし」

「へえ・・・でも聞いた話だと化け物が出たって」

「うん・・・噂だと大きい腕の猿の化け物らしいよ」

「何それ？怖い・・・」

そんな話が今学校中で持ちきりだった。私はすぐに分かった・・・あの時逃がしたアラガミだって・・・

鏡君はこういうの心配してたのかな？それを・・・わたしが・・・学校から出て家の道じゃない所を回っていると道路に噂の穴があった。それはあの夜見たのと似てるけどそれよりはるかに大きい・・・

「わたしの・・・せいかな？」

あの時私が鏡君の・・・ゴーンッ

「何言ってるんだお前？」

鏡

俺は遠野市と海鳴市の境の所にいた。

何故かって？そこのスーパーの特売日だからだよ！（そんなのなに？出来たんだよ最近！）

ちなみに金は以前の換金アイテムで変えた大金・・・多分大丈夫だろう。

しかし時刻は夕方・・・急いで準備しないと間に合わない

そしてふと周りを見渡す。

「・・・結構被害出てるな・・・」

昼のニュースを見た感じではあまり大ごとになってないと思ったが

パトカーやら何やらで道路が込みまくっているのがわかる。

「早く見つけられないとな・・・」

なのはだ。1人で出かける目的の一つさて何を話すか?と思ったがなのはの独り言で案外言うことは決まった。

「何言ってるんだお前?」

「鏡君」

「ああ平気だ・・・心配掛けたな、なのは」

そして抱きついてきた。フェイトといいなのはといい何ですぐに抱きつくんだよ?悪かないけど。

「まあ何か悪いもの見たけどな」

「あ」

そうして道路の穴を見る。アラガミの食い残し。

「平気だなのは俺の世界ではよくある事だ」

「でも・・私少し浮かれてたのかな？魔法ってすごい力に」

「俺の処の昔話の魔法は一時の夢だという表現だった」

「夢？」

本のタイトルは・・・忘れた。

「魔法なんて万能じゃないんだよ・・・だが力にはなる」

「鏡君は・・・魔法それほしい？」

「そつだな守れるならほしいな夢まほしを」

そしてなのに向かって言うまだ帰れない事を。

「とりあえず・・・土郎さん達には今度改めて説明するだけでも言っ  
といてくれ」

「うんわかった」

こうしてなのはと別れた・・・あの様子なら大丈夫だろう。このまま  
2人の魂がぶつかるのも面白そうだ。

「・・・邪魔者アラガミは・・・俺の相手だかな」

そして帰ってきた俺はなんかすつきりしたフエイトと半泣きして青  
ざめて『ごめんなさいごめんなさい』を繰り返してるアルフ  
がいた。

「ああ・・・とりあえず作るかカレー」

第10・5話〜夕刻の間〜（後書き）

感心現象

新型同士で発生する意思疎通　以心伝心みたいな事。

~~~~~

鏡「ここで決める」

なのは「きゃあ」

フェイト「鏡！なのは！」

鏡「・・・え　とナニコレ？」

蛟那「次回いよいよあの力が鏡に！」

第11話 炎仁の誇り 空への魔法 (前書き)

蛟那「なんかこういうのやっているとほかの人と被る感じがあるなあ」

鏡「しかたなさこころ辺テンプレみたいなものだし」

蛟那「では本編どうぞ」

第11話 炎仁の誇り 空への魔法

その後

鏡とフフェイトとアルフはカレーを食べ。

なのはとユーノは家族で晩御飯を食べた。

その2人のうち先に動いたのは前者だ。フフェイトたち

場所は、街のど真ん中まだ発動してないがその付近にいた。

結界を張っていないのは、なのはに気づかれないためギリギリまで粘るつもりだからである。

そして、その時は来た。

なのは

夜にジュエルシードの反応があった。

そこにいたのはフェイトちゃんとその使い魔さんそれに……

「……鏡君」

フェイトちゃんと使い魔さんはジュエルシードを見つめ、鏡君はジュエルシードは見てるけど何かを待ってるみたい。
多分あのアラガミ。なら私のするべき事は……

「行くよレイジングハート！」

フェイト

「もうすぐだね」

「任せてフェイトちゃんと感じてるから」

アルフはこういう時心強い。

「おっとこっちも来たみたいだな」

鏡の言うとおりあの子が来たこっちも来たばかりなのに・・・

「休む暇なし・・・かな？」

「だなアルフ連れ出すのに少し苦労したし・・・何かあったのか？」

「ひっ！！！！」

あっ・・・うーん少しOHANASIしただけなのになあ。

「何した？」

「お話」

「そうか・・・へんだなあ？」

そんな会話していたらなのはが来た。

「最後に忠告」

「忠告？なに？」

そう聞くと鏡は微笑む。

「今のあいつ……すげ〜しつこいぞ!」

なのは

「私、高町なのは。」

私立聖祥大付属小学校に通う、小学3年生

私は宣言する。

「あなたとは友達になりたいの」

「フェイトちゃん!!」

「……」

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ、なにも変わらないって言うだけど、ただど、話さないと言葉にしないと伝わらないことがきつとあるよ」

私が伝えたいこと。

「ぶつかりあったり、競い合ったりすることは、そければしょうがないのかもしれないけど、ただど何も知らないままぶつかり合った

りするのは、私嫌だ」

私は話したいだけ。

「私はジュエルシードはユーノくんの捜し物だから、ジュエルシードを見つけたのはユーノくんで、ユーノくんはそれを元通りに戻さないといけないから、私はそのお手伝いで。お手伝いをするようになったのは偶然だったけど、今は自分の意志でジュエルシードを集めて、自分の暮らしてる町や自分の周りの人達に危険が降りかかったらいやだから」

私の大事な人。

お父さんやお母さん、お兄ちゃんやお姉ちゃん。

アリサちゃん、すずかちゃん。

「それに・・・鏡君」

最後の声は、フェイトにしか聞こえなくフェイトの顔が少しひきつった。

大事な人を守りたい。

「これが私の理由!」

そして、フェイトちゃんは悲しそうな表情をして口を開いた。

「私は「フェイト!!」答えなくていい!!」

使い魔さんが言うのを阻む。そのままフェイトちゃんはバルディッシュを構える。

「なのは!?!」

「大丈夫」

私もレイジングハートを構える、しばらく見つめあう

「行くよバルディッシュ」

《了解》

「レイジングハートお願い!?!」

《了解しました》

そしてその後激しい魔法の撃ちあい最後にジュエルシードが出てきた。

「「ジュエルシードシリアル?封印」」

同時に封印しかしジュエルシードは宙にとまったまま。

ガキン

なのはとフェイトはお互いの杖（魔力）をジュエルシードに叩きこ
んだ。

しかし。

カツ

突然

「次元震?!」

「フェイトー」

次元震の起こる中……………

2人は驚き

2人はその内の仲間を心配する

そして1人は……………

ユーー

グチャラ

「来たか」

獲物の匂いに反応し臨戦体制を取った。

現れたのは以前殺されかけたガイア。

「いくか・・・」

だがそれでも鏡は怯まない。むしろ確実にダメージを通してている。

「くらいな」大地の矢

以前の仕返しとばかりに今度は相手の腹にダイヤモンドの矢をぶち込む。

『ゲガアー』

突然飛び岩を投げつけようとするが・・・

ドガガツガガ

「……アイスロンド」

放たれたバレットはガイアに当たると周りに旋回そして5回の青い爆発を起こした。

そして攻撃前に怯んだ。

「OP消費とか関係ないんだよ」

すぐ後ろにはなのはとフェイトがジュエルシールド相手に闘かっている。

「あいつらの邪魔は神様でもゆるさねえ」

ガチャン

幻影剣がガイアの顔に振り下ろされる。

その一方でなのはとフェイトはジェルシードの封印に全力を注いでいる。

「くっ」

「がんばってレイジングハート・・・フェイトちゃんも！」

「なの・・・は」

ヒューーードガードガン

突然色んなビルに飛ぶガイアさすがに行けないのでバレットを撃ちたいが届かない。

近づいてきた・・・このまましとめようと思ったその時。

カッ

「「きゅ」

突然ジュエルシールドが光り出しガイアの中に取り込まれた。

「・・・おいユーノあんなのありか？」

「ぼ・・・僕だって知らないよ」

コンゴウのような茶色の外見はみるみる紅くなりダイヤモンドの岩石がある背中は、透明だがその中に炎を灯していた。

「鏡君あれって？」

「たぶんジュエルシールド取り込んで墮天化したんだろっな」

「墮天化？」

「本来は環境に合わせるんだが・・・要は属性がついたって事・・・見るからに炎属性な」

『グオオオオーーーーー』

ガイアは前と同じように両腕をたたきつけたあの時は普通に岩が出てくるだけだったが今度は・・・

「なんだこれあつっ」

「マグマだよーこれ」

「岩も多い」

何か岩と同時にマグマまで出てきて歩くスペースがなくなるのはたちは飛べばいいがダメージの影響か座り込んでしまった。

「フェイト！なのは！・・・くそっ」

襲い来るガイア墮天。

だが2人はダメージで動かない・・・

バグジャ

「鏡!!」

鏡

「あゝなにやってんだろ・・・俺？」

気がついたらかばってた？何だよこれ？こんな事、前に一回あったけど神器でガードしてたぞ。

なのに今は神器も使わず腕を喰われてる。

「何かどっかで見た事ある光景だな……」

あれは何だっけ？リンドウさんがディアウス・ピターに襲われてる
時か……俺もあんな風になるのかな？

「いや……駄目だそれだどこいつらが……」

「鏡くん！逃げよう」

「っ鏡！！もういいよ」

2人は息の合ったように泣いている。
見たくないなかったのになあ。

「安心しろ」

俺はいつも通りの声で話す。

「俺はある命令を部下に言った！それは自分でも同じ！……」

ドゲン

「逃げない・・・生きることから逃げない！！これは俺の信念だー
！！！！」

ドグン

ドグン

グワウ

「なに？レイジングハート？」

「蒼い・・・光？」

レイジングハートとバルディッシュの光が鏡の腕に集う。

突然の事になのはとフェイトの言葉が漏れる。

いきなり喰われた腕から光が出てきてガイア墮天が怯み俺は助かった。

「一応腕は無事だ・・・右腕にフェンリルの腕輪それに左腕に知らない腕輪・・・??」

「・・・えくとナニコレ？」

《初めまして主》

何か喋った？何こいつ？

《私はいわいるインテリジェントデバイスです》

「・・・つまり俺も変身して魔法を使えるわけだ」

《はいそうです》

勝手に納得していると。

「何で出来たかとはいいの？いくらなんでも無茶苦茶だよ！」
フェレットがつかかった。

「あゝめんどくさいんで奇跡って事でーっ」

「理由になってないよ」

「理由はいいんだよ後回しで・・・勝手に考えてる」

「やっぱり君も無茶苦茶だ・・・」

気落ちするユーノをしり目に俺は唱える　こほん

「（ダル声）りりかるまじかるへくんどがっ」

いきなりなのはにレイジングハートでぶん殴られた。

「ふざけなくていいんだよ・・・」

それに变身じゃなくてセットアップ・・・」

怖・・・何か魔力光が桜色からどす黒くなってる。

「すまん・・・で何て言えばいい?」

《先ほど言われたように『セットアップ』と唱えてくださいポーズは付けてもかまいません》

あっそ

んじゃ適当に。

手をクロスさせて念じる……………

「セットアップ」

《Stand by ready・set up》

蒼い光が俺を包む。

基本今着ているスニーカー　だが白がベースで桜色のアクセントそして背中に金色の狼のマークがある。

「これが俺のバリアジャケットか」

『ブオオー』

飛んで行ったどうやって追いかけるか？

「なんかあるか？」

《エリアルウイング》

空に足を踏み出したら落ちない……見えない地面を歩いてるようだ。

「落ちないな……いくぞ」

俺はそのまま垂直に駆け上がる。

屋上に飛んだガイア……

「追いつめたぜ……ガイアー!!」

俺はさらに上から剣で叩き斬る。

「そのまま……いけっ」

バキン

顔が割れる中の黒い顔が出てきた『部分破壊』で来たみたいだな。

俺はいつも通り闘った。だがいつもと違うのがエアリアルウィングでどんな状態でも足場にする事が出来た。

ほかのビルに飛んだらそのままエアリアルウィングで走り抜ける。

更に気付いたのが、属性の火・神と属性攻撃が強化されたという事実・・・これは使い勝手がいい。

(銃の弾丸の属性も強化しているらしい(スヴェルグ談))

『溶岩岩石球』

ドカーン

『ウオオーン』

そして終盤、溶岩岩石球でガイアを道路に落とした。俺は一気に決める・・・

「せえの・・・」「・・・黒、桜、金の光が幻影剣を包む。

「くたばれ」

ドゴーン

ガイアは討伐した。

ジュエルシードが出る。

「ジュエルシードシリアル？封印」

「・・・・・・・・」

とりあえず喰った。ジュエルシードも封印した。だが問題が。

ガラガ

「どございようこれ？」

道路がひたすら一直線に切れている（例えるならでっかい月牙天衝
やった感じ）

いくら魔法でも威力ありすぎる
しかも例の如く結界は破壊。

「おいこれ出力何%？」

《一応100%です》

いきなり全力か・

「鏡」君！！」

なのはとフェイトが来た。

「大丈夫かい？」

「何が？」

「いや普通こんな魔力・・・持たないよ」

「嫌・・・だが平気・・・」

パキン

バリアジャケットが解かれた瞬間俺の意識が途切れた。

第11話 炎仁の誇り 空への魔法（後書き）

なのは「すごいね鏡君いきなりあんな魔法」

フェイト「うんさすが鏡」

鏡「ああそれで・・・こいつ誰？」

???「恐らく次には決まってるのでは」

蛟那「正直言つて現時点では名前決まってるじゃない」

3人「何っ?!?!」

蛟那「変身ポーズは仮面ライダーアギト<バーニング>を思い描いてください」

蛟那「次は日常だけかKYからませるか考え中」

蛟那「そしてこれについて設定更新してます」

第12話 鏡の軌跡 遅れてきた第3者（前書き）

蛟那「はあやつとかけた」

鏡「まあ連続投稿だったからな・・・何処で悩んだ？」

蛟那「デバイスの名前で2日掛った」

鏡「は？じゃあそれ以外は・・・」

蛟那「出来てました8割型・・・では本編どうぞ」

第12話 鏡の軌跡 遅れてきた第3者

フェイト

鏡が気を失った。

フェイトとなのは気が動転したが、今はそんな場合ではない。

”この騒ぎ”は予想以上に被害が出たため人が駆けつけ始めている。仕方がないので鏡はアルフにかついでもらいその場を後にした。

その道中

「鏡君は私の家に置いとくの！元々私の家の子なんだから！」

「何言ってるの・・・鏡は今気絶中なんだよ今は私の家に置いておくのがいいの！」

そんな話がしばらく続いたが終止符を打ったのはフェイトのマンシヨンに着いたところだった。

「負けないよ、フェイトちゃん」

「私も…譲りたくないよ・・・」

ごろん

そしてまた鏡を寝かす。最初鏡にベッドを用意させた時、『すぐいなくなるから布団でかまない』と言ったが。何気に使用回数がここ最近増えている。

フェイトには嬉しい事だが、その大半が怪我の治療なので喜んでいいのか悲しんでいいのか複雑な気持ちである。

「そんじゃ私は冷蔵庫あさってるよ・・・時間かけて・・・」

そう言ってそそくさとアルフは出て行った。

今この部屋には私と鏡の2人つきり

「・・・いいよね」

アルフは昨日のOHANASIIで空気を読んでいる。

「鏡」・・・「」

そのまま私は鏡の口に顔を近付けた。

なのは

(レイジングハートはかなりの大出力にも耐え揺るデバイスなのに)

ユーノが見つめる先には傷ついたレイジングハートが置いてある。

(それを一撃でここまで破損させるなんて)

ユーノは先の戦いを思い返す。

(なのはとあの子の魔力の衝突、いや、それじゃあ説明がつかない。
あれはやっぱりジュエルシードの・・・)

(実際はその負荷+鏡へのツッコミが原因である)

トントン

ドアを誰かがノックした。

「ユーノくん。レイジングハート、大丈夫？」

入ってきたのはお盆にビسケットと水を載せて持ってきたのはだった。

「うん。かなり破損は大きいけど。きっと大丈夫。今、自動修復機能をフル稼働させてるから、明日には回復すると思う」

「うん」

「それに鏡はさっきも言ったように単純な魔力不足・・・明日には回復するよ」

「うん」

「なのはは大丈夫？」

「うん。レイジングハートが守ってくれたから。ごめんねレイジングハート」

なのははレイジングハートそう言ったけど今のレイジングハートには届かない。

どきっ

私はそのままベッドに飛び付いた。

「鏡君・・・」

あの時、私はなんだか嬉しかった。同じ力が鏡君にもある。同じ空

を飛べるって。

明日には起きてるかな？その時は帰ってきてくれたらうれしいな。

その後も何事もなく学校が終わった。

そして終わった後すぐにフェイトちゃんの家マクミンに行った。

鏡

きて

何だ？誰の声だ？

起きて

・・・いやー一回聞いた事があるな。

お願いね

なにが？

私たちの騎士様キヨウ

うん・・・ここは・・・なんだ？

「だから鏡君に会わせてよ！フェイトちゃん」

「駄目よまだ起きないんだから！」

「少し見たっていいじゃない！」

「俺は何してたんだ？」

俺が起きてリビングに出たら4人ともびっくりしてなのはとフェイトは飛びついてきた。

落ち着いた処でなのはが問う。

「何もしてないよね！？フェイトちゃん？」

「う・・・うん」

なのはの勢いある問いにフェイトは目をそらして答える。

「アルフはいないみたいだから…誰か見てないか？」

《私が答えましょうか？》

そう答えたのは左腕にある腕輪。

「うんじゃあ」「とりあえずこのデバイスのこと聞かない!?!鏡の事とか!?!」「」

なのはが聞こうとすると、フェイトが全力で止めた。

「そうか…んじゃ…お前は俺のデバイス何だよな？」

《はい》

「鏡君の事何かわかる?」

なのはの問いにデバイスは答える。

《はい神器 歌劇のコアの情報により主がこの世界に来た理由、そして私の誕生がわかりました》

ほづそれはいいことだ。

「早速聞かせてもらっぞ・・・俺はどうしてこの世界に来た」

《簡潔に言ってしまうとジュエルシードの暴走です》

「えっ?」

「ど・・・どうして?」

「「な・・・なんだってー!?!」」

4人とも驚くが。確かに俺も驚いたが・・・疑問が一つ。

「俺の世界に・・・ジュエルシード?」

《はい、おそらく件の事故により1つだけ次元震によって流れてきたのでしょっ》

「た・・・確かにそれだと一応辻褄はあう・・・のか?」(そこは作者も知らんぞユーノ)

なんか聞こえた無視する・・・そういえば・・・

「いつ俺が手に入れたんだっけ？」

《その疑問は事故の・・・主の世界の1か月前に遡ります》

最初にジュエルシードが落ちたのは、なんとエイジス島。そこにハンニバルの群れが来てそのうちの1匹が喰いそのまま逃走。

そしてしばらくして愚者の空母にてハンニバルはジュエルシードの魔力に耐え切れず何故か爆発。

しかしコアが傷つけられないので1週間してまた復活！しかも今度はウロヴォロスは

そしてまた場所を変え今度は、嘆きの平原にてウロヴォロスは同じ理由で爆発

そして今度はオウガテイルになったそしてまた場所を変え贖罪の街でフェンリルに感知され俺に喰われた。

「・・・それでそのジュエルシードが又暴走した・・・そういうわけか？」

《はいその通りです》

その説明に俺は頭を抱え、なのはとフェイトそれにユーノやとアルフでさえ開いた口がふさがらないような顔をしている。

これ博士に報告するか？・・・いや面倒だし。

「き・・・鏡がこつちに来た理由は・・・認めたくないけどわかったで次は「お前の生まれた事だ」セリフとらないでよ」

《はい、それについては事故の際神器とジュエルシールドが紛失していましたね》

確かに服その他アイテムは散らばっていたが神器は確か俺の・・・

「一瞬嫌な予感がしたが？」

《その予感は当たりです。神器と一緒にジュエルシールドも主の体に取り込まれていたのです》

俺たちはまた頭を抱えた。だが説明は続く。

《元々オラクル細胞とは拒絶していましたが先のアラガミの体内に馴染んだため主は拒絶反応もなくなりました》

要はそのアラガミより先に取り込んでたら俺死んでたか。

《馴染んだ主の細胞になのはさんとフエイトさんによる協闘で魔力を覚え昨日の主の願い・・・覚悟で私は生まれました》

「覚悟で・・・か」

《そして主の昏倒の原因は使い慣れていない魔法での反動と魔力不足。それらは私の出力を抑えれば今後は平気です》

なるほど・・・そう言う理由か。

ああそういえば・・・

「お前名前は？」

《まだありません》

「どうすっかな・・・？それじゃお前は今スヴェルグからだ」

《わかりましたこのスヴェルグ主の力になりましたよう！》

「よろしくなスヴェルグ」

こうして俺とに契約が結ばれた。

おめでとーと祝福してくれるのは達。

「・・・それはそうと俺昨日寝てたんだよな？」

《はい。 ”主” は寝てました》

「周りに変わった事は？」

「あ鏡それは・・・」モガッ

フェイトが止めようとする、なのはがチョークスリーパーのように押さえつけた・・・ダレダオシエタノ？

「俺は・・・？じゃあ周りは」

《はい 昨日帰ってすぐ寝かされた後フェイトさんがキスをしそのまま潜り込み就寝

朝AM8:00に起床そしてまたキスそのままこの部屋で朝食を取り夕方15:51まで看病その時またキスしようとした際インターホンが鳴り床に激突そして入室したのがなのはさんと言うわけです》

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺たちはしばらく沈黙そしてふとフェイトと目があった。

「っ／／／／」

同時に顔を伏せた。やばい俺も意識しちまう・・・なんか体が熱くな・・・

ゴキッ

ポトッ

「・・・・・・・・・・」ヒュー

「な・・・なのは・・・さん？」

なのはがフェイトを閉め落とした。熱くなった体は一気に冷めた。

「鏡君・・・少しOHANASSIしようか？」

そして数時間後

「……おれ一回帰る」

「ああ……気を付けてな？」

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ
イゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ」

ボロボロの俺にアルフが見送るその後ろでフェイトが昨日のアルフ
になっている。

なんか可哀想なのでなのは目を盗んで少し抱きしめてやった。少
しは回復したみたいだ。

「行こう鏡君」

「ああ……手つなぐ？」

「うん」

とにかく今はなのはの家に帰った。

土郎さん桃子さん恭也さん美由紀さんに今まで家を空けてた事を謝
罪する。

「ごめんなさい」

「ああ理由を聞かせてもらえるか？」

「今は……全部言えませんが……覚悟ができたなら全部言います」

その時ちらつとなのはを見た。それを見た土郎さん達もなのは目をやりなのは、首を縦に振るその目は覚悟の目だった。

これに手会議は終了。俺は改めて高町家の懐の大きさを再認識した。

次の日俺は久しぶりに学校へ通った。

学校に戻ってきた俺に暮らすの皆は驚いて来た。

アリサとすずかには会った瞬間いきなり泣かれた……なのは達はどうも泣き癖があるみたいだな。

そしてアリサとすずかがなのはと喧嘩していたらしいので、俺は仲裁して何とか仲直りさせた。

その日の学校が終わり部屋に戻ると。

レイジングハートは無事回復した。

「大丈夫？レイジングハート？」

《大丈夫です》

そんななのは声にレイジングハートが答える。

「また一緒に頑張ってくれる？」

なのは自分と戦ってくれるレイジングハート（大切な存在）に聞く。

《はいもちろんです マスター》

そしてすぐにジュエルシード反応が来た。

海鳴公園

「レイジングハートセットアップ」

「スヴェルグセットアップ」

《Stand by ready・set up》

出てきたのは木の化け物。すずかの家の絵本に似たものがあつたな。

「燃やすには火だな・・・ん？」

突然の魔力弾の雨が化け物に降るだが。

ブオン

木の化け物がバリアー張つたなんか生意気だ。

「つよいね・・・今までよりも」

「フェイト！」

「うん鏡もなのはもいる・・・」

ふと後ろをると戦闘態勢のフェイト今回は合わせてくれそうだ。

「グオオーン」

木の音が大量に生えてきた・・・ついでにザイゴート

「レイジングハートもつと飛んで」

《了解》

なのは上に逃げたか・・・あのまま砲撃すれば良いもんだ。

「フェイトあれ全部ぶった切るぞ」

「うん、アークセイバー」

《アークセイバー》

「おらっ」

根っこを接近して切りつけるフェイトは魔力の刃を投げて俺の周りを援護する。

『オオオーン』

ガチャン

上に行くザイゴート俺はすかさず撃ちまくる。

「めんどくせえ・・・あとはあいつだけか？」

そして上から・・・

「いくよレイジングハート」

《シューティングモード》

援護で打ち抜けばいいが、あの調子だバリアと何発も撃たなきゃいけない。まだ俺にはなのはみみたいに重い1発は打てない要は質より量である。

《撃てますよ主》

「？」

《私の力でOPを自動回復できます今の出力だと速度にしてバースト状態の2倍です》

「ほ〜うそれはいいな・・・じゃあ」

「トス力で撃ちまくる」

《弾はどうします？》

「連射系のレーザー・・・属性は炎でいいや」

《了解しました》

「撃ち抜け・・・炎球爪」

ドオン

撃った時球が出現そして5秒で6発のレーザーが放たれ化け物に襲う。

そして俺は撃ちまくる一点集中だ。

「なのは！フェイト！俺の撃ってる所に向かってでかいの頼む」

「わかったレイジングハート！」

「バルディッシュ」

「撃ち抜いてレイジングハート！」

「貫け轟雷！」

《ディバインバスター》

《サンダースマツシャー》

ドグオオーン

グオオオ

化け物は消滅アラガミも奇跡的に出てこない。

封印されたジュエルシード。だが先日と同じようにジュエルシードは浮いている。

「ジュエルシードには衝撃を与えちゃいけないみたいだね。鏡が取って」

「どついう事だ？」

突然フェイトが提案した。

「鏡なら中立だと思っから・・・後で私が2個もらっつよ」

昨日の奴も含んで勝利宣言か・・・

「なのはも・・・それでいいよね？」

「タベみたいなことになったら私のレイジングハートもフェイトちゃんのパルデツシユも可愛そうだもんね」

「だけど・・・譲れないから・・・どっちも」

「じゃ・・・スヴェルグ」

《シリアルナンバー？封印》

ジュエルシールドはシュヴェルグの中に収まる。

「私はフェイトちゃんと話がしたいだけなんだけど」

俺は神器を下し2人を見守る。

「私が勝つたら。ただの甘ったれた子じゃないって分かってもらえたら。お話しいてくれる」

2人は構えてデバイスを構え振りかざし光が2人を包んだ様に見えた。

「ストップだ!!!」

「ここでの戦闘は危険過ぎる。時空管理局執務官クロノ・ハラオウ
ンだ。詳しい事情を聞かせて貰おうか」

何か出てきたな・・・胡散臭そうだ・・・そして面倒だ・・・

第12話 鏡の軌跡 遅れてきた第3者（後書き）

鏡「アースラ？何それおいしいの??」

なのは「たぶんちがうよ・・・」

蛟那「一応デバイスの名前はサモン イト3の召喚獣からとりました」

蛟那「此处で少しアンケートこの後冒頭だけ悩んでいます

1 KYを口頭だけでごまかして逃がす

2 KYを降るぼっこにしてる間に逃がす

2 3日で締め切りますのでお願いします（その他提案も可です）

第13話 嵐の炎帝 今後の方針（前書き）

蛟那「何書きたかったんだろ俺？」

鏡「さあ？オリジナル考えてるからこうなったんじゃない？」

蛟那「多分」

第13話 嵐の炎帝 今後の方針

鏡

「武器を捨てろ」

何だあいつ？じくつかんりきょく？なにそれおいしいの？

「ちっフェイト逃げるよ!!」

「うん・・・でも」

『鏡！あなたは？』

アルフの指示でフェイトが逃げようとするが俺の身を案じてくれて
いるらしい。

ああなんかいい子だ。

「（・・・俺面倒事嫌いだからな・・・なのは俺も行くわ!）」

「（ふえ!？ちよつと鏡君???)」

俺とフェイト、アルフは一目散に逃げようとするが・・・

「逃がすか！」

「なっこの!!！」

いきなりフェイトに向かって砲撃したがった・それをモルタース
トレートで撃ち落とす。

グオオーン

「貴様何故邪魔をした！」

「邪魔云々はどうでもいい・・・てめえあいつに向かって撃つたな」

「だからなんだ!? 彼女は犯罪者だ」

なんかむかつくな。

「ああそうか・・・じゃあ(少しぶっ飛ばす)」

「・・・そんな事を言って大丈夫なのかい？」

「(鏡! 本気?)」

「(無茶・・・しないでね?)」

「(ああ大丈夫だ) んじゃいくか？」

俺は神器を馬鹿に向けそのままぶっ放した。

「がっ！何だそれは？デバイスじゃないのか？」

「おいスヴェルグー応デバイスって”非殺傷”なんだろ？」

《はいそうですが主はアラガミとの闘いがあるので常に殺傷モードです・・・変えますか？》

「面倒だからこのままで良い」

《了解・・・と言うよりもできませんがね》

そしてまた撃ちまくる。

「がはっ・・・あくそっ」

なんか杖出して打ち出してきたな防げるか？。

ガチャン

ガキンガキンガキン

「なに！？?!」

「軽いな」

全部オルケストラでガードした。
よく見るとあいつもうバリアジャケットはボロボロだ。顔も少し焦げてるし。

「くそっ」

あー突っ込んできたか・・・よし

ヒュン

「くらいな」

「なっ?」

バキッ

馬鹿が突き刺そうとした時素早いステップで後ろに回る・・・そしてそのまま右ストレートでぶんなぐる。

「がはっ」

馬鹿が倒れただがまだ戦闘の意思があり杖をこっちデバイスに向けようとする・・・仕方ねえな。

「そろり……よつ……！」

ドガッ！！

そのまま馬鹿の腹めがけ踏みつけた歌劇は重量装備だからその重さですさまじ威力だろう。

「がっ……」

ゴキ

鈍い音が聞こえたけど気にしない。

ピクピク

「……」

あっ気失った。

「き……鏡君この人大丈夫なの？」

なのはが心配そうに聞いてきた。

「たぶん・・・生きてる？」

「いや知らないよ！殺してなんかしてないよね?!」

「何を言うユーノ完全な正当防衛だ」

「だから君の理屈には無理が・・・」

『少しよろしいですか？』

そんな会話していたら突然空中に大きなモニターが現れた。

現れたのは緑髪の大人の女性。

「え〜とどちら様？」

俺は問いかけた。

『時空管理局提督』リンディ・ハラウン』です。その子の母でもあります。こちらに敵意はありません。どうか...これ以上は止めてくれませんか？』

「やめるも何も・・・」今”終わったところ何で大丈夫ですよ」

『そうですか・・・あ・・・ありがとうございます』

しれっという俺に歯切れ悪く返したリンディさん・・・ああそうい
えば・・・

「何の用だ？」

『こちらとしては平和的に話し合いをしたいのですが』

先に攻撃しといて”話し合い”か・・・なんとも都合のいい事だな。
だけど

「俺たちに拒否権はなさそうだな・・・そんじゃ行くよ」

『ありがとうございます・・・では少し待ってもらえますか？今代
わりの者を送るので』

そうかこいつが迎えなんだよな・・・

ドガッドガッドガッ

とりあえず数発蹴ってみる。

「うっう……」

あつ起きた。

「おい！俺たちをあそこに連れて行け！」

「何だとお前何の権限で「リンディさんが来いって」なつ艦長?!」

驚く馬鹿に連れられて俺となのはユーノはアースラへ到着その道中ユーノが人間だという事が発覚。なのはは驚いたが俺はなんとなくむかついたので1発殴って事を終えた。

「艦長連れてきました」

「いらつしゃい」

そして連れてこられたのは、和和何か時代劇で見た事ある茶の小道具やら獅子落としまである……ココハドコ？

そしてユーノがジュエルシードの発見者及び回収していると報告。

管理局^{アースラ}の反応は……

「立派だわ」

とリンディさん。

「だが同時に無謀だ」

馬鹿が叱咤した。

「あの〜ところでロストログアって何ですか？」

次元空間の中にはいくつも世界がある。それぞれに生まれ、育っていく世界。その中にごくまれだが、進化し過ぎる世界があった。

技術や科学……進化し過ぎたそれらが自分達の世界を滅ぼす。そして取り残された。……失われた世界の技術の遺産」

「それらを総称してロストログアと呼ぶんだ。使用法は不明だが、使用によつては世界どころか次元空間すら滅ぼすほどの力を持つこともある……危険な技術」

「それにジュエルシードは次元干渉型のエネルギー結晶体、いくつか集めて特定の方法で起動させれば、次元空間内に次元震を引き起こし、最悪次元断層さえ引き起こす危険物。

それに四日前には小規模ながら次元震も観測しました」

とここでリンディさんが質問する。

「所で現在のジュエルシードの数は？」

「レイジングハート」

《こちらです》

そう言ってジュエルシードをレイジングハートから取り出す。

「え〜となのはが2個でフェイトが確か4個・・・で俺が2個だから・・・」

《間違いです主 私もジュエルシードで出来たものですので正確には主は3個。よって残りは11個です》

なるほどな。

確認した処で馬鹿がこう言った。

「では、ロスロギアの回収は管理局が引き継ぐ」

何か似てるな。

「君たちは今回のことは忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

「でも、そんな」

「次元干渉に係わる事件だ。民間人に介入できるレベルじゃない」
「でも」

「急に言われても気持ちの整理ができないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて3人で話し合って、それから改めてお話ししましょう」

やっぱり似てる・・・支部長に・・・これはもうほとんど誘導尋問の類だな。

「・・・俺はあんたら信用できないな・・・」

「貴様！！艦長を侮辱するつもりか！！」

「ああそつだ悪いが”そんな事”言うよりももっとはっきり言ってもらえませんか？」

「・・・」

リンディさんは黙った。

「んじゃ俺たちは帰るとしますかなのは」

「う・・・うん」

なのはと帰ろうとしたその時「

「待てっ」

馬鹿に呼び止められた。

「だがそのロストログア級の質量兵器そしてジュエルシードのデバ
イスもこちらで回収させてもらおう」

「！」

ドガン

「き・・・鏡君？」

何言ってるんだこの馬鹿神器を？スヴェルグを回収？ふざけるな！
今どんな気持ちかわかんねえけど間違いなく怒ってる。
その証拠になのは達見たら怯えた目をしていた・・・俺そうとう怒
ってるな・・・

「ま・・・待ってください・・・彼の質量兵器にはちゃんと理由があ
るんです」

「理由だってそんなんも・・・」

「待ちなさいクロノ！その理由聞かせてもらえますか？」

そしてユーノが話した俺の元の世界でのアラガミの事を、そしてその対抗手段が神器である事を・・・

俺は頭に血が上っていたためなのはにだめられていた。

「そうそんな世界が・・・」

「そんなの出鱈目だ！そんな化け物いるはず」

「でも私たち見ました」

「ああ確かめたいんだったらレイジングハートの記録を見れば一発だよ」

リンディさんとエイミィは納得したようだが馬鹿はまだらしい。

「だったら尚更管理局が！」

「スヴェルグ！！」

俺が叫んだら周りも黙った。

《何でしょうか？主》

「の記録を・・・出せるだろ・・・お前なら？」

《はいわかりました》

ザー

見せたのは新型のアラガミハンニバルの映像・

その姿は竜を司り、炎の円陣や二刀流の炎の刃を使い乱舞したりと鏡や仲間たちを苦しめていた。

『オオオオオーン』

ズズーン

「これ大丈夫か？」

「コウタ後ろ！！」

「ちっ」

しとめたアラガミが復活

そして反撃にあい鏡はしばらく謹慎するが……

「アナグラ内にアラガミ出現!!」

突如発せられた警報だが迎撃するゴッドイーターは全員不在。

「あつリーダー?!?」

格納庫

「駄目だよ君の神器はまだ……だめ!!それはリンドウさんの
!?!?!」

「がっがああぐっが a a s a s a j j a a h h a ああー」

神器を手にした瞬間鏡の腕が化け物のように変化した。

それは断じて人間の腕とは呼べない。更にアラガミのようにつかりしてるわけでもなく。

ただただ黒く化物化している……

そしてアラガミは苦戦したが辛勝したがその後が大変だった

医務室

「k a a k a s a a y あぐっがああー」

そこで見た光景は己の腕がアラガミ化してどんどん浸食していた。

「速く鎮静剤を！！」

「腕がなくなるぞ！！！」

「あああああうがあああくあズズつくああー」

「とまあこんな感じで適合者以外が触れたら浸食してアラガミにな
つちまうんだよ」

見せた全員は顔が真っ青である。

「そうね鏡君・・・相当手加減されたのでしょうか・・・ありがとう
ございます」

「手加減？」

「そうよクロノ・・・あなたと戦った時銃の乱射あったけど一度
も刀身での攻撃はなかった」

当り前だそんなんことしたら浸食しまっからな。大体銃の傷も爆発の余波だからほとんど問題ない。
(それでも数千発撃ってます)

何か気付いた馬鹿は俯いてしまった。

「というわけで、もう神器の事は俺に任せてくれませんか？アラガミに対抗できるの一応俺だけ何で」

《追加で言いますと私は管理局を主同様信じていませんもし私を回収するならば今あるジュエルシードを主の体に流します！》

「ほう・・・俺に死ねってか？それはいいな

そんじゃ一つ提案、俺となのはは勝手にジュエルシードを探索するよそつちでアラガミ出たら賞金でお願いします。

あつ後フェイトの罪軽くしてもらえませんか？まだ子供だからいいでしょ」

俺は笑って見せる。あつなのはもひいてる・・・やりすぎたかな？

「ええ・・・それでいいです」

これで全員納得したようだ。

アースラから出る俺となのはユーノは少し用があるらしいのでアースラに残る。

「所で何で鏡君縮んじやったのかなあ？」

なのはがふと考えるその問題はスヴェルグに任せる。

《恐らくジュエルシールドが主の体内に侵入した際副作用で縮んだと思われます》

「しかし参ったな・・・」

「どうしたの鏡君？」

「ああこれ今アースラの連中に見られてるんだろ？だからこれからフェイトの家に行けないなあって」

「・・・行きたいの？フェイトちゃんの所に？」

「報告だ『俺は大丈夫』って行ってやんねえと何か危なっかしいんだよ・・・お前みたいに」

そう言ってなのはの頭を撫でた。

「にゃっ／＼わ・・・私見た言っでどじ言っ事っ？」

「そのままの意味だ・・・なのはとフエイトはよく似てる

」にゃっ!／＼／

そう言って抱きついてやった。

「……………さてとこの^{おの}幸せ^はどじ^守守るかな

俺はそう眩き帰路についた。

第13話 嵐の炎帝 今後の方針（後書き）

鏡「本当に変なことしてるな フェイト」

なのは「駄目！フェイトちゃん」

蛟那「一気に飛びます・・・アレを海上暴走か決闘で出すか悩み中」

第14話 未確認生物 戸惑う者達 (前書き)

蛟那「やっと更新できた」

鏡「今度は何に悩んだ？」

蛟那「全部」

鏡「言う事は？」

蛟那「すみません中身ってうまく書けない」

例3 大鳥その2・シユウ2体 (独断)

「グルワァァー」

「うわっ」

「クロノくん!!!」

「アラガミ相手に何勝手にやってんだ!？」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

現在20個のジュエルシードの配分は、鏡達アースラ組が8個。
(スヴェルグ除く)
フェイトが6個。

残りのジュエルシードは後6個。

アースラ内部

現在鏡、なのは、ユーノ、クロノはアースラ内で休息を取っている。

「いてっ」

「クロノ少し我慢してね」

「大丈夫クロノ君？」

クロノは先日の独断で負傷して約2〜3日ドクターストップ。今エイミィとリンディの介護を受けている。

更に言うと、初めの鏡との戦闘でアバラ1本折ってたので最初の1週間もドクターストップ。

そして復活した日にまた負傷した。

実質ジュエルシード回収図式は、管理局が探索、回収は鏡となのはとユーノが行った。

「なんであんな無茶するかな？」

鏡がドスのきいた声で尋ねた。

「くっ・・・」

「お前は死にたいのか？」

「鏡くん・・・もう許してあげよう？」

「駄目だ・・・アラガミに関してはジュエルシードや魔導師の戦闘なんかとはちがう」

「どついう事だい？」

「魔導師の戦闘とアラガミの戦闘・・・この2つの違いわかるか？
分かってない面々に鏡が問う。

「え〜とごめんわかんない」

「うーん・・・魔法を使うか使わないか？」

「逮捕するか殲滅するかだろ」

なのは、ユーノクロノとそれぞれ答える更に。

「言葉が通じるかじゃないかな？」

「そうね・・・神器を使わなければならぬかしら？」

とエイミィとリンディも答える。

「ちがう・・・簡潔に言えば死ぬか死なないかだ！」

「」「」「！?!?!?!」「」「」「」

その場にいた全員が固まった。

「俺からしてみれば魔導師との戦闘はよくて気絶、最悪意識不明か何かだろ？」

「そうなの？ユーノ君？」

「えっと確かに戦闘でのミスは相手を意識不明にしたりしたらやりすぎて批判を受けるけど・・・」

「・・・だがアラガミとの戦闘は喰うか喰われるか。殺すか殺されるか。の2択だ」

「・・・そんな・・・」

クロノの顔が青くなる。

「捕まえるぶんぬんよりも、殺す覚悟でやらないとゴッドイーターは死と隣り合わせ・・・いつ死んでもおかしくない職なんだよ」

そう言い終わったら皆つつむいた状態になる。だがその空気を壊したのが・・・

「ああそつだエイミィ」

「えっうア何？」

「アラガミが言葉が通じないって言ったろ？」

「うん」

「多分だけどアラガミの99%は獣のように本能で食事してるような奴だらうな・・・」

「99%?」

鏡の言葉にユーノが疑問を持つ。

「ああ残り1%の確率で・・・言葉が通じ共存できる奴がいる」

鏡は昔の仲間を思い出す。何も知らないでカタゴトを話す少女を・

「そいつを軸に行けば獣型でも言葉が通じるかもな？」

鏡は少しほだけた顔になる。

そんな鏡を見てなのはが尋ねる。

「鏡君はアラガミとお友達になりたいの？」

なのはの言葉に鏡は、考え込む

そんな考えはあの人以外考えてなかった。

「……俺は……」

ビービービー

アースラ内に警報が鳴り響く。

鏡

鳴り響く五月蠅い警報・一体なんだ？

「エマーゼンシー！！ 搜索域の海上にて大型の魔力反応を感知
！！」

そして映し出された映像は、海のと真ん中にいるフェイトの姿
ジュエルシードを発動させ竜巻を起こしている。

「何やってんだあれ？」

「多分だけでああやって残りのジュエルシードを見つけてるんだと
思う」

全然あってなかったからな……嫌な予感的中だ。

「本当に変なことしてるな フェイト」

「あの、私急いで現場に」

「その必要はないよ。放っておけばあの子は自滅する」

「仮に自滅しなかったとしても力を使い果たした所で叩けばいい」

「でも……」

「今のうちに捕獲の準備を」

「了解」

「私たちは常に最善の選択をしなくてはいけないわ。残酷に見えるかもしれないけどこれが現実」

「でも」

「なのは……現実そんなもんだよ」

「そんな鏡君まで！」

「組織としては……最善の一手です。俺にも経験ありますし」

かつて、行方不明になった時の上司の事件が頭によぎる。

「なら」

「だけど俺は何が何でも助ける！それがどんな状況だろうとな・・・」

「君は聞いてなかったのか？」

まだ何か言ってるよ・・・よし。

「それに」

俺はここで止めをさす。

「なんかあの辺にアラガミの気配がするんですよ」

「なに？本当か？」

おお喰いついたな・・・

「まだこの世界にはアラガミに対してのレーダーはないでしょ？だから俺の感度の方が正確ですよ」

「く・・・うつ」

黙る馬鹿この10日間でアースラ内部の人間はアラガミに対して危機感を覚えていた。

実際人喰われそうになったからな。

そんな訳で、後手で行くよりは先手を打って先回りの方がいいと理解してみたんだ。

「もういいな？そんなじゃ行くぜなのは！ユーノ！」

「「うん」「

とどこでなのはが念話で。

『ねえ鏡君・・・さっきの話』

『ああ嘘だ』

『えっ嘘なの?!』

『ああ気配も感じないし疼いてもない』

俺はおどけて言うとなのはが笑った。

「フェイトちゃんを助けよう・・・鏡君」

「ああ」

決意した時ユーノが転送準備を完了する。

「よし行くよなのは鏡！」

ユーノが叫ぶと、海のと真ん中に転移した……よしこのまま!

「なのは、行けるな?」

「うん。行くよ、レイジングハート!」

この上空から地上に落ちていっているというのになのはには何の迷いも怯えもない。

「風は空に、星は天に。輝く光はこの腕に」

なのはが軽やかにでもしっかりとした声で詠う。

「不屈の心はこの胸に!」

初めて聞く、なのはの詩。

その詩はなのはの覚悟の証のように力強い。そして……

「レイジングハート、セーット・アープ!」

《スタンバイレディ》

「行くよレイジングハート……鏡君?」

「クカー」

「鏡君何寝てるの?!?」

「ハツ……ついいい声だったから寝てた」

本気で寝てた。子守唄スビカ歌ってたら5秒で寝るな。

「もうノ今はそんな場合じゃないでしょ！」

「あいよそんなじゃ」

「スヴェルグ……セットアップ！」

「駄目！フェイトちゃん」

竜巻に激突するフェイトになのはが続いた。

「デイバイン」

「サンダー」

「バスター！！」

「レイジ！！！！」

俺となのは、フェイトは封印されたジュエルシードの前に立った。
そしてなのはがフェイトの方に向き話す。

「私フェイトちゃんと友達になりたいんだ」

「……私は」

その時空が紫の閃光に飲まれた。

「母さん!?!」

みんな一斉に上を見るが、俺は……下を向く。

「まさか!?!」

上から紫の光は俺たちのいた場所に降り注いだ。
下からは。

『グウオオオオオ』

グボロ・グボロ
鰐が口を開けて襲ってきた。

ドゴーーオーン

「な・・・何が起こったの？」

「これはいったい？」

「フェイト大丈夫かい？」

「うんアルフも」

「嘘から出た何かかな？これ??」

事の顛末を整理すると、なのはの助力もありジュエルシードを6個封印。うんここまでは良い。

次に起きたのは、海の中からアラガミ・・・グボロ・グボロが出てきた。更に上から紫色の魔力弾が降ってきた。

「魔力弾は・・・プレシアだろうな」

「母さん」

「あの鬼婆どついつ風吹きまわしだ？」

フェイトが泣きそうな声で呟きアルフはにがい顔をする。
それもそうだがあのまま砲撃がなかったら十中八九フェイトは喰われ
ていただろう。

ピキシ

突然海が一面凍ったこれは……

『グオオオオー』

突然、墮天化したグボロ・グボロが海を凍らせ現れた。

「そう言えば……なのはジュエルシードは？」

「ふえ……あつ忘れてた」

多分あの時ガイアみたいに取り込んだんだろう。

「めんどくせえなまつたく」

俺はグボロ・グボロに戦いを挑むために、凍った海の上に乗る。

「せえの」

あつそういえば

「スヴェルグ・・・下の氷」

《結果が出ました。通常のCCCチャールソクラッシュに耐えられるほどの厚さです》

「んじゃ・・・くらいな」

運よくCCCを1発当てる。

そしてまたチャージに入る。

ガチャン

グボロ・グボロの額の砲台が俺に標準を向ける氷弾フラストフロストが放たれた。

「アクセルシューター」

パキンパキンパキン

なのはが魔力弾フラストフロストで氷弾が砕かれた。

そうして突進したり霧を霧散させようとするとなのはが砲撃フェイトは斬激を入れ怯ませる。

ダメージそのものはないが風圧などで体制が崩れれば問題ない。

「順応早いな」

以前後方支援のなんたるかを（独学）なのはに教えた。そうしたらものの見事に身に付けた。
多分自主練でもしてたのだろう。

「そろそろだな・・・スヴェルグ！」

《主・・・了解です》

「せえの」

幻影剣に黒と金と桜のオーラをまとい

ドゴーン

叩き斬った

ズバババババーン

「これはすげえな」

なんかあれだ。本で見た海割りだこれ！

グボロ・グボロは真つ二つになり動かなくなった。

「前の方叩き割っちゃまったがまあなんとか・・・」ピキ

へ？

《主・・・先ほど通常のCCと言いましたが》

ああそついえばそつだった

「どじつわっ」

瞬間氷が割れ足を滑らせたエアリアルウィングを出そうと思ったら滑ってきたグボロ・グボロの半身に押しつぶされ

ドッパン

そのまま海に落ちた

「鏡君!!」

やばい氷海だのそんな事より俺は・・・

「がぼがぼっ」

プールの時に初めて気づいた

泳げねえ・・・。

「きよーーう」

そのまま俺の意識は闇に消えた。

第14話 未確認生物 戸惑う者達 (後書き)

鏡「ココハドコワタシハダレ」

なのは「明日・・・闘おう」

フェイト「うんいいよ」

蛟那「次は多分・・・短いです」

第15話の背景の影（前書き）

蛟那「今回いいサブタイトル思いつかなかったな」

鏡「そこはしょうがないが短いのに何で遅れた？」

蛟那「単純に悩んだのと最後の所どうするかって悩んだら遅れた」

鏡「収集つくのか？」

蛟那「ギリギリ・・・では本編どうぞ」

第15話 背景の影

なのは

鏡君が又気絶した。

もう何度目か忘れちゃったけど何か無理してるみたい・・・

でも今回は本当に事故っばかったな。

そう言えば鏡君プールでも・・・

～回想～

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「鏡君！しっかりしてよ！?!?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・こういつ時はたしか・・・」

そっすだ！こっすやっけて口を近づけて／＼／

「きょうく」なのは大丈夫！」「居たのかなのは！お兄ちゃんが助けてやる」……………」

「なのはどうす」

「ユーノ君…………お兄ちゃん…………少しO・H・A・N・A・S・I・S
よう」にっこり

その後半壊になったプールはお兄ちゃんのバイト代とジュエルシードの暴走って事でアースラが持った。

「…………あれ？ここはどこわたしはだれ？？」

あつ鏡君気がついたよかったのかな？少し残念かも…………

～回想終了～

うっっ思い出したら顔が熱くなってきたよー

(とまあまだキス出来てないなのはさん。(by作者))

…………蛟那さん後書き覚えてね(ニコ)

「うん大丈夫そう」

「んあ」

鏡君が目を覚ました

「・・・ココハドコワタシハダレ??」

「鏡君すっかりー」

何度か叩いたらようやく記憶を戻したみたい。

「ほへて・・・どうしてほうはーった? (それでどうしてーんなった)」

腫れた顔で鏡君が話した。

でもフェイトちゃんはチラチラと空を見る。

「ああそっか・・・よし」

事情を察した鏡君は怪しい笑みを浮かべて上を向く。
あれ？顔の怪我は？

「おいアースラの皆さん！」

『何かしら？』

そう言っつてモニターに来たのはリンディさん。

「少しばかり大事な話があるから結界はります」

『なっ？！』

「質問その他は後で報告するんでそれじゃあ」

そう言っつて鏡君は嚴重に結界を張った。

でも主に頑張ってるのは鏡君ユーノ君とアルフさん。

「ああそう言えばフェイトちょっと」

なのはには聞こえてません

「ああそう言えば、フェイトプレシアは？」

「うん母さんとは話したよなんだかすごく優しくなった感じがする」

「そうかそれは良かった」

「うん今度は鏡も一緒に行こう！」

「ああいいぜ」

ひそひそと内緒話してる・・・なんか嫌だな

「んじゃお互いの情報交換とこれからについて話しますか」

そう言ってようやく話し合いが始まった。

私は知りたい・・・フェイトちゃんがジュエルシードを集めている事を。

フェイト

鏡と別れて最初はさびしかった。

すぐに飛び出して探したかった。

でも管理局に気づかれてはいけないからってアルフに何度も止められた。

それからなんだか身が入らなくてただただ時間が過ぎた。

進展がないので母さんの所に行くことにした……アルフは嫌がっていたけど付いてきてくれた。

最初に母さんの所に行ったら以前まえと同じ問答。

ああ……また殴られるのかな？でも今回は私が悪いし。全然見つかってない。

母さんは、手をあげようとした時不意にその手が止まった。

「っ……………」

「母さん？」

「…………次は…………あの男と一緒に来て…………話したい事がある」

「あつ…………はいわかりました」

何だろう？突然？

「フェ…………フェイト！」

母さんが慌てた声で呼んだ
なんだか初めて聞く声ニポカンとした。

「……………行つてらっしゅい」

「ノノいつてきます」

何だろう？すぐく温かい…………鏡と一緒に来たなら今度はなんて言う
てくれるかな？

『おかえり』かなそれもすぐ嬉しい。

「がんばるっ」

私はそう思った。

そうだジュエルシードの力を使えば早く見つかるんじゃない？

そう思った私は、軽い足取りで残りのジュエルシードを使って探していない海の方で使うことにした。

「」の馬鹿野郎！！」

その思った事を実行いたらこの前の猫の時以上に怒られた。

私はまたシユンとする。

「」めんなさい」

「じめん」

アルフも一緒に謝る。

なのはには譲れない理由を人のためと伝え。鏡にはそれを話して手
伝ってもらってる事。

そして今回の探索方法の理由を話した。
素したら鏡に大目玉をくらった。少し半泣きになる。

「うーんこれからどうするか・・・」

鏡が少し悩むそして。

「よしこうなったらジュエルシード全部かけて決闘しろ！」

「ふえ?!?!?」

「へ?!?!?!」

私となのはは声を挙げ驚き。ユーノとアルフはただ茫然となった。

「どじして?」

「いやこう譲れないものってお互いの全力でぶつかった方がすつき

りするって事さ」

「でも私は……」

鏡も分かつてるはずだが欲してる理由を……

「あくなんとなくわかるけど……あくまで『なのはとフエイトの所有権』で争うわけで……決して『管理局とフエイトの所有権』って訳じゃない」

ニヤリと笑う鏡。

それに気づいたのはなのは以外の全員だった。

「えっ？えっえくと?!?」

「でもそれじゃあ君は管理局を裏切るのか？」

「いや誰も裏切るとは言っていないぜあくまで今は『管理局の代わりになのが持つてる』んじゃないかって『なのはが管理局に渡すためにジュエルシードを集めている』」

「えくと???」

まだ置いてけぼりのなのは。

「だから最終的に管理局じりせに渡せばいいんだから少し間まが空いたって誰かのために使おうがまた戻ってくればいいんだよ」

「・・・よく君はそんな悪どい方法思いつくね」

「ああ・・・勤め先にそういうのがいて色々あったからな・・・上司のお二人さんが色々」と

そう言つて空を見上げる鏡。その眼は少し虚ろだ。感傷に浸つてゐるのかな？

「でも鏡・・・母さんが・・・」

私が鏡に疑問を問いかける。

確かに私が勝てば問題ないけど仮に負けた場合なのはに頼んでジュエルシードを借りなければいけない。

なのはの事だから多分貸してはくれる。その気になつたら管理局も振り切ってくれるだろう。

私は母さんがジュエルシードを何に使つかわからないけどもしも・・・

「大丈夫だ」

鏡は、小声で私に語りかけた。

「俺の予想だとすぐに戻ってくるさ」

そう言つて笑つた。また体が熱くなった。そして鏡は、なのはに殴られて頭から地面に落ちた。

時は少し戻り時の庭園

プレシアは1人・・・否2人で出ていく少女と使い魔を見送った。

「アリシア・・・・・・・・私は今まで間違つてたんだらうか？」

プレシアは生体ポットのアリシアに問いかける。

「今まで腹いせのように殴って躡けて・・・それでも胸の苦しみは大きくなるばかり
それで少し話したらなんだか楽になった感じがするわね」

プレシアは目を閉じて問う。

「まだあなたの事は話せてないけど・・・次にジュエルシードを持ってきた時には…必ず」

プレシアは思う今度会った時に・・・次にあの男が来たら言ってみようと思った・・・フェイトに・・・アリシアを・・・自分の事を・・・

男がいたその男は黒いフードをかぶり手には試験管を持っていた。

「・・・・・・・・」

カチャン

トボトボトボ

ドゲン

ドゲン

バクンバクン

グチャグチャ

プレシアは気付かないすぐ後ろで目覚める神に・・・

第15話〜背景の影〜（後書き）

蛟那「……………」

返事がないただの屍のようだ。

鏡「仕事速いな、なのはデイベインバスター撃っただけなのに」

なのは「てへへ」

フェイト「鏡これなんか作者が心配なこと書いてあるよ」

鏡「何々？」キャラの口調&キャラ崩壊牙心配です『いさまら何を言っているんだ」

フェイト最初に母さん書いた時も違っんじゃないって言われたし」

鏡「もう開き直っていいと思うぜ多分この先展開が変になるし」

なのは「じゃあまたねー」

第16話 猿の肝 異変の兆候（前書き）

蛟那「遅くなつたZ E」

鏡「言いわけは・・・」

蛟那「リアルが多忙と設定改変」

鏡「前者はわかるが・・・」

蛟那「いや、ここから先の事で矛盾が生じるし鏡の過去は大雑把にしか決めてなかつたからつい」

鏡「じゃあ・・・」

蛟那「後は名前だk「くたばれ」」

第16話 猿の肝 異変の兆候

鏡

そもそもこの”事”を思いついたのは俺だけど、完全な思い付きだ！

「あれはライティングバインド！？まずい！フェイトは本気だ！！」

「なのは！」

思いついたのは単に前に仲間コウタがバカラリー・・・俺の世界の娯楽番組の影響だ。

「・・・フォトンランサー・ファランクスシフト！」

似た話を永延とされて頭に入っていた。そのの”ノリ”で今回の決闘を提案した。

「撃ち碎け、ファイアー!!」

ドーン

だって話だと『最後は熱い友情うんぬんかんぬん』・・・とコウタが行ってたから大丈夫かなって思った。

「これは！バインド!!!??」

そう・・・そこまで深く考えてなかったけど今は・・・

「いくよ私の全力全開!!!!!!」

後悔してます・・・すく。

「スターライトブレイカー!!!!!!」

ドガーーーーン

あつフェイトが落とされた・・・勝負あり？かな？？

簡単にこの決闘を振り返る。

昨日決まった決闘。

ルールは単純相手が降伏するか再起不能になるまで叩き潰すという物。

勝者は敗者のジュエルシード全部貰うという事。もちろん俺の持っているジュエルシードも同じ。

もちろんアースラには話したが2つだけ話してない事がある・・・

それは、21個のジュエルシード全部を俺が持っている事だ。

どうせ全部渡すんだし一ヶ所にまとめた方が良いとの事。

2つ目は状況次第・・・基ほとんど確定事項だがプレシアに渡すという事である。

だが俺の勘が当たっていれば渡さずとも少し暗い話して終わりだと思ふ。あくまで勘な！

それにアースラ方面はなんか企んでるみたいだった。スヴェルグに相談したら《恐らく次の攻撃で位置を逆探知するでしょう》という答えが返ってきた。

まあそのくらいは考えるか。だけど俺の”勘”はそうはならないと思う

ちなみに、昨日の命令無視はアラガミが出てきたおかげでうやむやになりそれほど怒られなかったりする。

(本当に”偶然”だがその事実をあえて伏せておく。)

でも途中までは良かった・・・そう”途中”までは。

最後の方でフェイトが熱くなって何か大技出しちゃうし
なのも負けず劣らず・・・否、その倍以上の魔力での砲撃をかました。

それ見た瞬間なんかorzな感覚になったよ。
俺の所為？って何度も思ったよ。

俺は、フェイトの攻撃が直撃した時にそんな出来事を思い出した。

「フェイトちゃん！」

「フェイト！！！」

なのはとアルフが心配そうに叫ぶ。

位置的になのはが近いのでなのはは、海に飛び込む。

やれやれと思いながらその光景を見る。

後はなのはに、ジュエルシードを渡してフェイトの事を話してプレシアを説得すれば終わりだな。

なのは

「う……ん」

「フェイトちゃん！」

あっ気がついたよかった。

「ごめんねフェイトちゃんすぐに行く」

「うん……なのはごめんね」

その顔は少し残念そうだった……何となくだけどその理由に心当たりがある。

「うん、だってフェイトちゃんも……好きなんでしょ？鏡君の事・

「・・・」

「／／／／／」

分かりやすい反応だった。でもほかの人たちからは私もこんな感じなのかな？

「うんだから・・・」

私は笑顔で言った『負けないよ』って言葉と一緒に心の中で思っ

「ありがとうなのは」

フェイトちゃんも笑った。多分同じ事考えてるんだと思う。

「やっぱり鏡君の言うとおりだね」

「？」

私の小声に『？』と思うフェイトちゃん私は『何でもない』ってこまかした。

これで終わるんだ

全部……なんか嬉しくなってきたなあ。

だが　ゴロゴロ

世の中そんなに甘くはなかった。

「なんだこの音？」

《これは・・・主！！後ろです！！！！》

ゴロゴロゴロゴロ

突如反対側から何かが転がる音が聞こえた。3人とも振り返ると同時に。

「グウオオオ」

その姿以前闘った猿の仁王の様な姿。

「あれは・・・確かコンゴウ・・・」

「だ　もう何で気づかなかったんだよ？」

「…知るか・・・」

グチャラ　ガキン　と左手から歌劇を取り出し応戦する。

《いきなり現れたんです！それにアースラの通信は主の意向で完全に遮断しています》

アースラ側もほんの少し前・・・といっても1〜2秒の誤差で気づいたが、スヴェルグの言う通り『五月蠅い』という理由で完全にシャットアウト状態にしたのがまずかった。

「ユーノ、アルフなのはとフェイトと合流してアースラに避難しろ・・・大丈夫だ悪いようにはしないぜアルフ」

「ああ・・・私とフェイトは鏡を信じるよ」

そう言ったのはフェイトとアルフが管理局を信じてないからである。そこらへんの説明は決闘前に散々説明した。

俺自身が管理局に虚言（？）で脅している事を言ったので俺は信じてくれてるみたいだ。

『だから安心して負けたら掴まれ』

『うんわかった』

とそんな事あったな・・・「そら喰いな！」捕食成功d・・・「ぐわっ」

つ・・・いきなりエアスラッグ撃ちやがったこれ地味に痛えんだよ

な。

おっとそれよりもアルフに返事だ。

「よしそんじゃ頼むぜ・・・」「グrrrrラアア」・・・五月蠅い「
トライデントレーザー雷

放った砲弾から瞬間的に複数の重複の雷のレーザーを放ち念話で2
人に注意を呼び掛ける

「（なのは〜フェイト〜さっさと上がってアースラへ行って来い）」
「（うんわかった）」

レーザーで牽制しつつ1対1（サシ）で闘おうとする鏡。

だが

「なのは――――！！！！フェイトオオオ――！！！！」

グボロ・グボロの口へ飛び込む。

「グルワァァァ」

「鏡！！！！」

ー後ろでユーノとアルフが叫ぶが彼は止まらない

バグン！

???

鏡は喰われた

目が覚めると真っ暗な闇の中。

『あー何やってるんだろう？まったく部隊長失格だなこれ』

『……………ごめん……………？』

『？何だあれ？』

光の先に広がる二つの光景

うえーん……………お父さんお母さんお兄ちゃんお姉ちゃん

一つは栗色の少女が公園のブランコで顔を伏せて座り

母さん私本当は……………

一つは金髪の少女が夜のマンションの一室で倒れていた。

『・・・何だこの嫌がらせは？ふざけるな・・・そんなっっ思い出をー俺の頭に！！！』

2人は違う時。違う場所で・・・

『『寂しいよ』』

泣いていた

映し出されるのは遠き日の思い出―

ほらっ！もつと自然に はい笑顔絵顔

その人は自分とは真逆で太陽のような笑顔で笑う―

たまに喧嘩もしたいつも言い負かされるけど悪くなかった

そんなに意志や心がないなら私の言う事を1つ聞きな！！

そして最初の喧嘩後で交わした誓い

いつまでも続くと思っていた

これお守り・・・大丈夫また会うためのお守りだよ

.....

ユーノが必死に声をあげるがアルフに怒鳴られる。

「でも誰が?! どうやって?!」

そうゴッドイーターの鏡がない今、実質アラガミを倒せるものはもうこの世界にはいない。

それは当残酷な事実。つまりどんなに魔法の力質量兵器を使おうが無駄である。

一方上の、アースラの面々は・・・

「そんななのはちゃんと鏡君が・・・」

エイミイは顔を青くしてモニターを見つめハラウオン親子は冷静な振りをして『最終手段』を考える。

アースラは一応対抗手段・・・最終兵器はあるがそれをしたら最後、海鳴は消える。

「艦長! もはや一刻の猶予もありません決断を!」

「くっ」

だが

その2つとも 違かった。

ドグチャ

パリーン

そこに海から黒い触手が伸びてきてコンゴウに突き刺さった その
衝撃で背中のパイプが飴細工の様に砕けた。

黒い触手がコンゴウの背中から突き刺した。コンゴウは其の1撃で力尽きた
そしてそのまま・・・

ヴォウン

右へ

グオウン

左へ

ビュンビュンビュンビュンビュンビュンビュンビュンビュン
ビュンビュンビュンビュンビュンビュンビュンビュンビュン
ビュンビュンビュンビュンビュンビュンビュンビュンビュン
ビュンビュンビュンビュンビュンビュンビュンビュンビュン
ドバーン

そしてぶんぶん振り回す。回されたコンゴウは壊れた人形のように
されるがまま状態。

「な・・・なんだよあれ？」

「すいじ・・・」

アルフとユーノもボーゼンとその光景に見入る。

そしてそれは……

「なんだ……あれ？」

「……なんか怖いよ……」

「まさか………新手？」

上のアースラの面々も同じ感想だった。

その光景は子供が壊れたおもちゃを振り回すように余りにも無残な姿のコンゴウがいる。

だが皆そんな様に目が離せないでいた。

そして

グリヤグチャグチャ

ゴブチャ

触手に捕まったコンゴウはそのまま無残に分解バラされた。

グチャグチャ

そして残ったアラガミのコアは触手に包まれ

ボコボコボコボコ

黒い触手はそのまま海に沈んでいった。

「な・・・何だったんだ？」

「あたしは夢でも見たのかな??」

ユーノが呆けアルフも眼の焦点が合っていない。

プカ

「なのは!」

「フェイト!」

そしてもう一人その少女たちの中で沈んでいる少年。

「鏡!」

引き上げた、なのはとフェイトは意識があり鏡はいつもの如く気絶中。

そしてしばらく介抱して何とか眼を覚ました。

「」

「っ、鏡君……」

「えっ」

何か小声でつぶやく鏡の声を聞いた2人は心臓が変にはねた。

「っう……なんだ……なのはにフェイトそれにユーノにアルフか」

「よかった気がついて」

「心配したんだぞーっよかったねフェイト!」

「えっ!?!あーうん」

「……………そうだね……………」

フェイトとなのはが口ごもりながら答える。

「何があつたんだ?」

「それが……………」

ユーノは先ほど起きた異常な光景をありのまま話す。

「触手……か……ぐっ」

「鏡君!?!?」

「鏡!しっかりして」

突然頭を押さえて苦しむ鏡になのはとフェイトが肩を押さえながら心配する。

「大丈夫だ……悪いなのは、フェイト」

自分の肩に乗せられた少女たちの手を押さえ優しくそえる。

「それより触手って事はウロヴオロスかもな……………」

「『ウロヴオロス？』」

簡単にウロヴオロスを説明した。

もしかしたら近くに潜んでいるかもしれない……

ギイイイインツ！！

突如耳を劈く甲高い音。

そして

ゴゴゴゴゴゴ

突然

「きゃっ」

「フェイト！大丈夫か捕まって」

「な・・・なんなの？」

「何だこれ・・・嫌な感じがする」

「皆！上だ！！」

ユーノの言葉に空を見ると空に巨大な島？・・・俺は知ってる時の庭園だそれがいきなり現れた。

だがギリギリの処で結界を張っているため周りには見えていないらしい。

見えているのは魔力を持つ者かつ近くに居るこの5人とアースラに者達。

今にも海鳴の海に落ちそうな庭園まさにゆっくり落ちてくる隕石の様に・・・それは誰が見ても異常な光景であった。

そんな異様な空気の中、鏡は心底だるそうにつぶやいた。

「なんでさ？」

「あれはまさか・・・」

「フェイトちゃん何か知ってるの？」

フェイトとアルフが顔を青くして落ちてくる庭園を見て頭の中で否定するも心が肯定してしまふ。

「とにかくアースラに行こうあそこなら何かわかるかもしれない」

「今はそれしかないか・・・ユーノの案に乗るか・・・」

鏡達はアースラへ戻る。

第16話 猿の肝 異変の兆候（後書き）

蛟那「いきなりですが魔法版のCCの名前募集します締め切りは1週間めど決まったら活動報告などで言います」

鏡「いいのかそれで？」

蛟那「ネーミングセンスないんだよ！！」

鏡「開き直るな・・・次も遅くなるのか？」

蛟那「早くて1〜2日遅くて来週」

鏡「んじやがんばれ」

第17話〜原初の螺旋〜懺悔の言葉（前書き）

蛟那「遅い方になってしまった」

鏡「じゃあ書けよ」

蛟那「仕事が〜それに大まか決まってるのに戦闘がうまくかけねえ
それに書いた後もう少しくうしたらって手加えたらなんかgodるし
・・・」

なのは「では本編開始なのー」

ps

蛟那「前回募集したCC名々切りました
ご意見ありがとうございます鏡のCCは次かその次辺りに書く予定
です」

その他の意見も使いますのであしからず
夜叉龍さんデフォルトさんありがとうございます！！

第17話 原初の螺旋 懺悔の言葉

鏡

数分後俺となのははアースラで合流してブリッジに向かった。

「お疲れ様。それとフェイトさん初めまして」

リンデイさんが挨拶をするがフェイトは俯いたままだ。

それよりもまずは・・・

「で・・・どうしたんですかあれ・・・」

俺は後ろのモニターに映っている時の庭園に見な目を向ける。

そう、何故か時の庭園がこの地球に落ちてきたのだ直前に転移魔法らしきものが観測されたのでそれだろうが・・・
どういふ訳か座標がめちゃくちゃらしく実際まっすぐ落ちたのではなく大きく右に傾いた状態で落ちてきて更にそのままゆっくり沈んでいる。

幸い近くでなのはとフェイトが決闘していたのでその結界でギリギリ気付かれないでいるが『外』では少し大きな地震と津波が来たと思われている・・・とさっきアリサとすずかから連絡が来た。

「事故かなんかじゃないか・・・あの人がこんな変な失敗するわけないし」

「そっ！そっくだよねだったら」

俺の言葉にフェイトが慌てて行こうとしたらリンディさんが制止にかかった。

「待っててね今先行部隊が突入していますので少し待っててね」

「先行部隊？」

なのはが質問しモニターを見ると

『第1小隊移動開始』

『第2小隊潜入完了』

1つの魔法陣に10人くらいの魔導師が戦列組んで移動している。

人手不足の割に随分な人海戦術するな・・・と思いながらその様子を見る。

「大変です。屋敷内に魔力反応多数」

エイミーが叫んだ！

〈時の庭園〉

「何だ！？何が起こってる！？」

モニターにいくつもの傀儡兵が映る。

だがその姿は従来の魔導師が使ってるような物ではなくすべてオラクル細胞に浸食されていた。
その姿・神よりも悪魔や化け物と言っ言葉が合う。

「ギャオオオーイー」

「ひっ」

半分近くがその姿・力に怯え、もう半分もあまりのイレギュラーに呆然と立ち尽くしていた。

「う……撃てっ！！」

鏡

〈アースラブリッジ〉

「何・・・あれ？」

「くっ・・・早く行かなければ「まてっ!!」何だ！鏡？」

「ただ俺は」それを否定し認める。

「駄目だありゃあ・・・オラクル細胞に浸食されてる・・・ただの人形じゃない・・・あれはもう立派な”アラガミ”だ」

俺はそう宣言する。

「アラガミだけどあれはもう寄生してるとしか・・・そんなことより・・・」

「リンディさん早く撤退命令を攻撃せずにすばやく撃て!!」っ
っ！なのは！フェイト見るな!!」

慌てて俺は、なのはとフェイトに羽織ってたコートを頭から被せて見ないようにさせる。

その場において低級(?)の『アラガミ鎧』は視野が狭そうだったの
で今のうちにこっそり逃げれば被害がないと踏んだが・・・

『ぎゃーー』 「バク ムシヤムシヤクチャー」

『た・たっ隊長!!・・・うわーー』

「早く部隊を撤退させる!!全滅するぞ!!」

「!!!!!!わかったわ」

「各部隊転送魔法陣の上に避難し早急に撤退してください」

リンディさんは素早く指示を出し撤退させた。

だが1秒・・・わずか1秒遅かった10体の『アラガミ鎧』は次々と隊員を襲い喰っている。

「クチャクチャクチャ　オオオー」

新人の頃少しの気の緩みと油断で死なせてしまった仲間・・・仲間の死を思い出す

(名前はくえと・ウエダさん?・・・だっけ??)

「おえっ」

エイミイが吐いた・・・それにつられてほかの局員も顔を伏せる

結局残ったのは、2部隊合わせて10人ちよいと、ギリ半分くらいだった。

「・・・実戦・・・あんましやってないだろ・・・」

「・・・ええ・・・これが初めての人もいるわ・・・もっとも何人残ってるか・・・」

俺の世界では、ほとんどぶつつけ本番が多いが実戦経験が低い物は

小型を徹底的にさせる傾向がある。

そして慣れてきたら大型と、どんどん大きくなる。もっとも人手不足であんまし関係ない時が多々あるが……

「さてと……んじゃ俺が行くとして後は……」

チラッと後ろを見る。

「……ついて来るのは……」

「私だよな？」

「ぼっ……僕も」

「もちろんフェイトを連れてつてくれるんだよね？」

「……」

ああ〜皆期待しているな……

「本音を言えば……その馬鹿以外は置いていきたいんだよ」

「まったく……えっぼ！僕かい?!」

又何か反論を言うかと思われたんだろう馬鹿が慌てる。

そしてそれ以外も『何で?』という顔をしている。

「正直な話俺はこんなに守れない精々1人か2人が限界……
そして馬鹿……クロノを連れていくのはプレシアの安全確保が

出来たら離脱させてもらうためだ」

「でも鏡君は守ってくれた」

なのはがなっ気ながら言う。

「だが……さっきは守れなかった……」

「っ！！？？」

俺の言葉にシヨックを受ける2人。

「なんか……急に怖くなっちまってな……又何かあったら……」

パチンッ

乾いた音が響く

叩かれた？フェイトに??

「ふざけないで！自分の身は自分で守るよ！

それに鏡が……鏡が駄目になったら私が……私たちが守る！！」

「そうだよ……そうなったら次は私”たち”がちゃんと守ってあげるよ！！」

フェイトの言葉に感化されなのはも護ると言ってきた……そし

てほかの奴らも俺を睨んで『譲れない』と眼で訴える。

「はあ」

俺は溜息をつき・・・折れた。

「・・・皆約束してくれ・・・死ぬな！俺がいない時はアラガミには絶対に相手にしないで逃げる プレシアが無事なら一緒に、一目散に逃げる・・・」

いつになく本気で言ってる俺の言葉に皆真剣な目になる。

「うんわかった」

「鏡！」

「何だフェイト？」

フェイトが呼び止め俺に強いな瞳で言う。

「さっきはごめんね・・・後母さんを・・・助けて」

そう言っ頭を下げる。

俺はフェイトの肩を優しく叩き転送ポットへ視線を向ける。

「んじゃ行きますか」

そう呟くとフェイトは泣きそうな顔になった。

大丈夫だから戦闘前に泣くなよ・・・本当に大丈夫だから。

「あっそれと……お前らあとで来い……」

「えっ何で？」

「まあ付いて来るのはクロノと……ユーノギリでアルフ……かな？」

「だからどうして?!?!？」

なのはが食い下がる。

「あれで……」

俺は門前のモニターを指差した。

〈時の庭園・門前〉

「バクムシヤムシヤクチャー」

「やっぱ口が小さいのか……喰うの遅いな全く……」
全員「B」を着こんで戦闘態勢に入り各自持ち場に着く。

此処で来るまでに決めた作戦を頭の中で振り返る。

回想

最初は顔をひきつった面々だったが『大丈夫』と強く言ってきた。や

せ我慢なのはわかる。

結局援護する形で付いて来ると言う事でしばらく考えた結果『後方からの遠距離支援』の作戦を取ることにした。

「どうやって突破するつもりだ？」

「なのは、クロノ！合図したらいつせい射撃だ」

「わかった」

「了解だ」

「フェイトとアルフ．．．それにユーノは結界を張る事だ．．．と言つても相手が近付いて来た時の緊急用だ．．．．．なのはとクロノの射撃の邪魔にならないようにな」

フェイト達もうなづいた．．．．．最終確認だ。

「そして近づいてきたら足元を狙いつつ後退して接近されないように．．．優先順位は」

1 自分に来た近い奴
2 周りに来た近い奴
3 俺の援護だ．．．優先順位を間違えるなよ？」

「うん」

「もちろんだ」

「．．．頑張る」

「やれるよ！」

「あたしはいつでもいいよ！！」

なのは、クロノ、フェイト、ユーノ、アルフと返事をして俺たちは時の庭園へ向かった。

回想終了

なのはとクロノが射撃の準備を

フェイトアルフユーノが防御準備を

俺はこっそり近づいて捕食準備を

それぞれ完了させる

「……………そらっ喰いなっ!!」

喰らった瞬間皆行動を開始した。

「アクセルシューター」

「ステインガーブレイド」

なのははアクセルシューター　クロノはステインガーブレイドをぶっ放す。

「デイバイン……バスターー」

そして遠くに密集している敵をなのはがデイバインバスターで吹き飛ばす。

そして鎧が近付いたら射撃を止めてフェイト達の防御結界で足止めし最後は

「そらっ！」

俺が幻影剣で切り

ガチャン

「そらよっ」神爪

トスカで打ち抜く

『グルワ』

ついでに喰ってもおく。

ガキン

おっと後方に敵が寄ってきたな4連レーザーの『神爪』を撃ちこみつつ近づき斬り裂いていく。

「オオオ・・・」

デイベインバスターで吹き飛ばされ更にステインガーブレイドで貫かれた最後の一体に止めを刺す。

「せえの・・・」

CCを溜めて・・・

「くたばれ！」

ドガーン

念のためにくたばった鎧をすべて捕食する。
しかしあっちこっち飛んで捕食が大変だった。

『グググ・・・グワオ』

『クチャクチャクチャ』

「もう出てこないだろうな？」

俺が呟くと門が開いた。

〈時の庭園・内部廊下〉

中に入って走り続ける。

床には所々、穴が空いていて空間が歪んでいる。

「その穴黒い空間があるところは気をつけて」

「あれは？」

クロノが言ってることになのはが疑問を抱く。

「虚数空間。あらゆる魔法がいつさい発動しなくなる空間なんだ！」

「飛行魔法もデリートされる。もしも落ちたら重力のそこまで落下する。君達が落ちたら二度と戻れないよ」

「気をつける」

「戻ってこれない？」

・・・先に何があるんだろう・・・

俺はそんな疑問を抱きながらプレシアの居る部屋に到着した。

プレシア 回想

フェイトとアルフを送った後唐突に異変が起きた。

すぐに外の玉座の間に戻り見た光景はさっきフェイトと話した時の面影はなくなっていた。

時の庭園内であり得ない速度で浸食してくる”何か”・・・それはわからないけど危険だという事はすぐにわかる。

「くっ・・・何よこれは？！アリシア！！」

すぐにアリシアの居る部屋に入る幸いまだあの化け物はきていないが、私のすぐ後ろまで迫ってきた。

ギュオン

私はすぐに魔法陣を展開し

「アリシアに近寄るな!!」

バリバリバリ

フェイトにやっている倍の電撃魔法を当てたら怯んだこのまま押し切ろうとした。

バタン

「はーはー」

アリシアの居る部屋に嚴重にロックをかけて閉じた。

ビービー

ふとモニターを見るとフェイトん近くにあの魔獣と同じ反応がある。

『 ぶだよ 』

「!?!?!」

『 あげて トを 妹 』

私はその言葉を聞いた瞬間フェイトの場所に砲撃魔法を展開する。

狙いはその下の化け物!

「私の……私の娘に手を出すな!!!」

バゴーーン

砲撃魔法を撃った反動か……いや体がとくに限界を超えたのだから
うでもその前にアリシアを……

ドガーン

突如部屋の扉が壊された。

「グウオオオオオー」

急に外で叫んだと思ったら電撃を吸収して復活してきた。

そう叫んでる間に”それ”は私とアリシアを飲み込む……

「アリ・・・シア・・・フェ・・・イ・・・ト」

そして、しばらく気を失い次に目が覚めた時は・・・

「ウオオオオー」

”それ”は形を形成していた例えるなら大きな蜘蛛。

中に居るアリシアと今の私状況そして目の前にはもう一人の娘・・・

「バチが当たったのね・・・」

何となくそう呟いた。

その姿、蜘蛛のような化け物の顔に人間が無理矢理ねじりこまれている。

「母さん!..!」

そこに映ったのは庭園の真ん中でウロヴオロスと同化しているプレシアの姿だった

「あれは・・・いったい？」

「・・・ウロヴオロスか・・・」

「あれがさつき君が言ってたアラガミかい？」

「そつだ・・・やれやれめんどいな」

「バチが当たったのね・・・」

「母さん!?!」

「フェイト・・・私はあなたにそんなことされる資格はないわ・・・」

「...」

「あの子がそつめ・・・」

そうして視線を向けた先にはフェイトと瓜二つの少女がオラクル細胞に浸食されていた。

プレシアは語る。自分とアリシアの過去。そして実験中の事故。そして

プロジェクトFによるフェイトの生成。

誕生したフェイトはフェイトであってアリシアではない・・・その違いでプレシアの心は荒れた。

「でもねその男に言われたのよ『もっとフェイトと話せて』・・・」

415

「鏡」

フェイトが鏡を見てつぶやきまた母親に視線を戻す。
その目はもう泣きそうだ。

「フェイト私はあなたを愛してるわ」

「母さん!..!」

「もう私は捨て置きなさい・・・あんな仕打ちをしてフェイトにもう」それは違う「?」

その言葉を受けてもフェイトはプレシアを見据える。

「あなたに言いたい事があります」

全員黙ってフェイトの話聞く。

「私は……私はアリシア・テストロッサじゃありません。あなたが作った只の人形なのかもしれませんが、フェイト・テストロッサはあなたに生み出して貰って育てて貰った、あなたの娘です!」

プレシアに向かって訴えるフェイト。しかしプレシアはその言葉に泣いた。

「ありがとうフェイト私も愛してるわ……でも……」

ドガンドガン
キューーン

急遽ウロヴオロスの触手から光が収集される。

「えっ何あれ？」

「よし攻撃だ」待って鏡の意見を！」・・・ユーノ・・・君もかい？」

皆が鏡に視線を移すと、鏡はいつも道理の口調で・・・だが大きく・・・

「逃げるぞ」

そう指示してすぐに行動した面々。

キュイーン

複数の眼からレーザーカノンを撃ち飛ばす

そして・・・

グチャラ

「・・・いくか・・・」

神器<歌劇>を抜いて戦闘を開始した。

「そろそろ」

「ガッ」

なのは達を囿に後ろからは後ろから喰う

「そらっ喰いなっ!!」

狙うは足元・・

「おらっ!!」破・斬・斬破!

足の触手に3連ずつ切って行き相手が飛んだらガードする。

フロウオロス

触手に破砕は効くそして陽動に仲間を使う。

ダメージを与えるのは俺だけだ皆・・そしてアラガミに合わせて一進一退の攻防を繰り返す。

そして

「そらよっ」

キュイン

なのはに。

キュインキュイン

フェイトにリンクバーストする。

「行くよレイジングハート」

「バルデツシュ！」

<オラクル細胞るチャージ完了LV1>
<LV2 いつでもどうぞ>

「デイベインカノン！」

「サンダーカノン！」

ドブウン

触手が壊れる音がしてウロヴオロスはその場に倒れた。

「やったか？」

クロノがほつとする。

「まだだ！！油断するな！」

「ギャオオオアオshgyg・・オ」

「活性化したな・・・逃げろ！！」

だが相手も早く行動してきた

いきなり飛びかかり更に倍のスピードで突進したりと縦横無尽に暴

れ回る。

ドゴーン

そして来るレーザーカノン

ガチャン

鏡はオーケストラで防御するが・・・

バチンバチン

「えっ？また??」

前にもあった嫌な記憶・・・シールドの不備・・・それが”又”最悪のタイミングで起きた。

「ぐあっ!!!」

ガラガラガラ

神器・歌劇は鏡の後ろに滑った。

しかしその主は

「いてえ・・・なっつ!!!」

何が起こったかわからないでいたただ右が痛い。

「きゃあああっああああー」「

鏡が痛みで止まってる時

なのはとフェイトが泣き叫ぶ。

ユーノとアルフ・・・クロノでさえ余りの事に行動が鈍る。

「大丈夫か?! 鏡?! 嘘だろ・・・右手がなくなってるけど

」

「!!!?!?!」

”右手がない”その言葉を聞いた時鏡は

ドクン

やばいと直感し

ドグン

「離れる!!! 早く!!!」

「えっどういう」

だが反応する前に

グチャグチャグチャ

鏡の右腕が”浸食”された。

グチャグチャグチャ

「があああh h a g a h h a aーああぎゅあー」

ドブワーン

黒い閃光が鏡を包む

そこに現れたのは金色の蜘蛛

「え……嘘……うくん？」

大きさはウロヴオロスと同等

ただその蜘蛛の中央には……

「あれ……きよ……う？」

悲しそうな女性が鎮座していた

「オオオオオオウオオオー」

第17話 原初の螺旋 懺悔の言葉（後書き）

蛟那「と言う訳で完全リンドウさんフラグ」

鏡「おいどうするつもりだよ後2話ぐらいだろ？
それにあのアラガミありか？」

蛟那「前回ウロヴオロス系で攻めると言いました・・・アマテラス
は見た目一緒な感じなので同系統の亜種と考えてました」

鏡「今回は・・・完全にバーストの最後みたいな感じか？」

蛟那「ggdgdにないように書きたいですではまた次回」

第18話　コノ世ヲ蝕ムモノノ約束（前書き）

蛟那「やっと出来たー！ー！
遅れましたほんとスンません」

鏡「で？まとまったのか？」

蛟那「とりあえずAsのつなぎはギリで
後これ入れて・・・2話か3話だと思っ」

第18話　コノ世ヲ蝕ムモノノ約束

鏡

あいつに会ったのは、今より少し小さい時・・・身長は年上なだけあって大きく見えた。
まあ実際大きかったしね。

あいつは孤児院の後ろの場所で小さな墓を作っていた・・・いつも可愛がっていた猫が死んでしまったからその墓を作ってたみたいだ。

俺は「何してるの？」と普通に聞いたら

その時の第一声が「友達が死んでお墓に入れてるのよ！あんたも入る？」って言うてきた。

俺は、あの頃から感情が乏しい子供だと自負してたし親が死んだから生きてくのも面倒だった。

ただどあそこまで真正面で言われて驚いたのは人生で初めてだった。

だから俺は魅かれたのだろう・・・光に・・・

「オオオオオーン」

何が起きたかこの場にいた全員がわからなかった。
鏡が怪我をしたと思ったら、そのまま叫んで黴い炎に包まれた。

そして今日の居た場所にこのアラガミが居た。

その名はアマテラス

だが既存のアマテラスとは色も違う。

ハンニバルと同じ浸食種だろう。

「なにあれ？」

だがそんな事を知らない魔導師達は・・・

「ガーーー」

「くっ・・・早く逃げる！！」

クロノが叫ぶ！周りの者たちは我に振り返る。

全員困惑し、頭が真っ白になってるかと思いきや

2人の女の子はこんな事を考えていた。

どうするか？

なのはとフェイトの頭にはそんな疑問が出てはなれない。

どうすれば鏡を助けられるのか？だがそんな知識や閃きは、幼い彼女達にはわからない。

「ガガgggg・・・」

突如アマテラスが周りの人間よりも目の前のウロヴオロスに標的を

プレシアも丸のみに喰われてしまった。

「そ．．．んな．．．かあ．．．さん」

泣き崩れるフェイト大切に思い『守る』と宣言して護れなかった鏡と、その護れなかった鏡アラガミに食べられた大好きな母．．．この短時間で失った2人はフェイトには荷が重すぎた。

「フェイトちゃん!!」

「．．．．．」

そんなフェイトになのはが駆け寄る。

「大丈夫だよ．．．きっと鏡君助けたらお母さんも戻ってくるよ」

「．．．．．」

フェイトもそして言った本人なのはも気休めだとわかりきっている。

「今まで鏡君に助けてもらった．．．だから今度は私達が鏡君を助ける番だよ!!」

「私．．．たち．．．が?」

「うん!私達が!!」

「でもどうやって．．．．．(カラン)?」

何かが転がる音がして音の方を向くとさっき鏡の腕が吹き飛んだ時

一緒に吹き飛んだ歌劇だった。

「そつだもしかして……」

「？なのは」

「フェイトちゃん少し話を聞いて……」

「くっ……どうしてこんな事に?!?!?」

初めはすぐに終わる回収任務だと思った。だが謎の魔導師2人と質量兵器保持者、そしてアラガミがすべてを狂わせた。

アラガミ相手に魔法が効くと過信して突っ込んだ時もあった。だが彼の話の聞くとアラガミとの戦闘は生死をかけた戦いだ。そして彼には何か覚悟があると思った。

救える命を救う……彼の世界半何だと思ったくらいだ。

彼は言っていた。「ゴッドイーターは死と隣り合わせ……いつ死んでもおかしくない職なんだよ」と

彼は常に覚悟しているのだろう。確かに彼は的確な指示を出す。だけれどそれだけじゃないんだらう彼の強さはもつと別に……

「ノ……クロノ!!」

「あつ!! ユーノ?」

そつだ今は考え事をしている場合じゃないけどどうすれば……

「きうyyyyががああgがaaaaajjやyyyyay

ayaaaああー」

突然の悲鳴にクロノ達は見るとなのはとフェイトが神器を持っていた。

それはクロノとユーノには覚えがあるアースラに上がってきた時に見せてくれたあのおぞまし記録

なのは・・・そしてフェイトの神器を手にした瞬間鏡の腕が化け物のように変化した。

「なっ・・・なんでこんな？」

「フェイト！！馬鹿な事やってないで離してくれ！！腕が・・・腕が！！！！！！」

「何をやってるんだ君達は！！」

ユーノが啞然としアルフが泣き叫び、クロノが怒鳴る。
それでも彼女達は止まらない。

「ぐうでも・・・届く・・・っ」

「つううあん・・・これで　鏡に！！！！」

2人で歌劇を構える。

「ガーーーーー」

「いけえええーーーーー」

なのはとフェイトは、アマテラスに向かって歌劇を突き刺した。

カッ

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

フェイト

光に包まれた瞬間目が覚めたと聞いた場所は知らない場所だ。

なんだかジメジメしてそうだけど何処となく温かい・・・

「いたたた」

「あっ・・・なのは大丈夫？」

「うん・・・フェイトちゃんも大丈夫？」

隣になのはがいるのはわかる・・・でもこの場所は何処だろう？

「大丈夫だよすぐに鏡くんを見つけれよ」

「うんそうだね・・・？」

「どうしたの？」

「何か聞こえない？」

フェイトちゃんに言われて耳を傾けると誰かの話し声が聞こえた。

「あっほんとだ!!!こっちなだね」

どうやらなのはにも聞こえたみたい。

「うん行こう！」

声の方向に進むとそれとなく広いスペースに出た。

簡単に行ける階段があつて下には赤い髪の女性がジャウンターの向こうでピシツとして立っている。上には少なくとも10人くらい集まっている。何だろう？

その視線の先は長い髪の綺麗な女の人がいた。

「今日は、旧暦でいう『年末』だ。そして数日後には新しい年を迎えるよつてアナグラ内の大掃除を行う」

長い髪の女性が話し始めた『アナグラ』ってこの事かな？

「ツバキさん掃除つて言つても具体的にどうするんですか？自分の部屋ですか？」

黄色い服の男の人が質問した。その視線の先に見覚えのある。

「なのはあれつて……」

「うん！鏡君！！」

私達が大声で叫んでも今日は声をださない。ただこの話を聞いているみたい。

「以上だ！では各自！塵一つないよう、徹底的に片づけるように」

「で……どうよリーダー？なんか詰め込むものもある？」

「コウタリーダーはあなたと違って倉庫には素材と服しかないんじゃないんじや・・・」

そんな、何気ない会話が私の心を少し締め付ける。

此処が鏡の世界此処には鏡を頼ってる人がいて鏡も信じてる人がいる。

当り前だ。この世界は元々鏡がいた世界なんだから。

「ほつとけ」

「あっ！」

「待って!!」

なのはと一緒に鏡を追う　　が

「「きゃっ?!」」

私たちは、突然強い光に包まれた。

????

全く嫌になるわね。鏡と会ってもう5年くらいかしら?
鏡の奴まだ顔に覇気がないんだから。

せめて”いざっ”て時に良い顔になんないときめかないじゃない
!!!
あゝあ早く凜々しい顔つきの鏡の顔みたいなー 後泣き顔とかいろ
んな顔ね

『でもそんな日はこの世界では見させてくれなかった』

ガラガラ

「やくにげるー」

「こつちだ 逃げ」

あっちこつちで騒がしい悲鳴が聞こえる。

今日も又アラガミが襲ってきた ただそれだけの事。

あ

ただ今までと違った所は、鏡が私をかばってアラガミに噛まれて何とか助けようとしたらそのまま建物が崩れて私たちは下敷き。

私は肩から下ががつぶれちゃって何とか生きてるけど駄目だと思っ
だって心臓弱くなってるのがわかる。

ガラガラガラ

すぐ隣で鏡が起き上がった。

腕は傷だらけだけど私と違って治せそうだなと安堵する。 もうお別
れだと思っから私は精いっぱい笑顔を見せよう。

「（……………行くの）」

「ああ……………もう行くよ……………光は？^{ひかり}」

何となくだけどわかる……………ああ……………この子泣きそうだ……………最後の最後でこんな顔を見れるなんて嬉しいけどなんかもったいないなあ……………

「（私は、逝くよ　もしかしたら何10年かしたらまた会えるかもね）」

「そうだな」

素っ気ない簡潔な言葉。　だけど私にはわかる、その奥の悲しみと怒り。

「（最後にお願いだよ……………純真な子には優しくね　そう言う子は絶対にいい子だから対等にね）」

「ああ、わく（最後にもう一つ）……………言ってみるよ」

「（生きることから　逃げないでね……………あなたすぐ逃げようとするんだから逃げてすぐにこっちに来たら口聞いてやんないからね）」

「ああわかった。約束だ！」

その目、声、顔は、私が見たかった覇気のある顔……………ああやっ

見れた。やっぱりカツコイイなあ鏡。

「（行ってらっしゃい 鏡、あなたに幸福がありますように）」

「……行ってきます……」

それが私が最後に聞いた言葉。私は上からスヴェルグと一緒に見るよ。鏡あなたはきつといい事あるからね。

ザッザッザッ

「あああああああああああああああああああああ
—————」

少年は叫ぶ……約束を守れない事に嘆き
少年は喰う……自分（コノ世）ヲ蝕ムカニスベテヲ……

なのは

「あれって……」

「今は……鏡の……」

「フェイトちゃんにも見えたの？」

フェイトちゃんも見た。あの記憶・・・多分鏡君の悪夢・・・

思えば鏡君はずっと人の生き死にに敏感でそれに関して感情的になる。

そう想った時、また景色が変わった。また知らない場所でも・・・

「ここは・・・」

何処だかわかる・・・さつき見た鏡君のいた孤児院だ。

でもその外装は無残に壊され石やレンガハコナゴナに砕けて。木の板は燃えて黒ずんだりしていた。

でも何故か太陽の明かりでその光景は一つの芸術に見えた。

前に、アリサちゃんとすずかちゃんに見せてもらった美術品以上に息をのむほど綺麗に見えた。

「綺麗」

「・・・うん・・・あれ？」

フェイトちゃんが何かを見つけて走った。

私も慌てて追いかける。

お墓に刺さってる棒には名前が書かれているカタカナで『スヴェルグ』って

「……?」

「スヴェルグって鏡君のデバイス「違うよ」!???!」

「それは猫のスヴェルグ……まだ小猫で三毛の雄だったらしい」

「「鏡」君」

そこには会いたかった『鏡君』がいた。でも背が大きい。

服装もそのままだけどその手には神器も腕輪……デバイスのスヴェルグもない。

やっぱり、もうすぐ20歳くらいなのかな?

「情けない話だよ。あれだけ生きることから逃げないって言うておきながら今俺は諦めかけてるんだから」

「そんなことないよ!!鏡君は……強いよ!もしだめなら私が居てあげる」

「私も!私がつらい時いつも居てくれた……だから今度は私が一緒にいてあげる」

「フエイト……だが俺は……覚えてるんだ……さっきの事」

「大丈夫だってなのはが言った 此処で鏡を助ければきっと母さんも姉さんも助けられると思う」

「・・・なのはさん・・・?」

「じゃはは」

フェイトちゃんのまっすぐな答えに鏡君が私を睨む・・・もう笑う
しかないや

「まったく・・・」

不意に鏡君がお墓を掘り返す。

「悪いなスヴェルグ・・・思いついたのが、この名前しかなかったん
だ」

いえ。むしろ光栄に思えるくらいです

「そうか・・・」(フツ)

鏡君が優しく笑うああ本当にいい笑顔だな。

ポオウ

急に私とフェイトちゃんの手が光る。

「きゃっ!!--!!」

「えっ? な・・・何!?!」

鏡君にかざすと神器が出てきた。

そう其の光線は、なのはのスターライトブレイカーの様な攻撃だった。
更に

キュイーン

触手をドリル状にして雷を纏って突き刺してくる

微かに、フェイトの力を感じる……

「そうか……このアラガミは俺だ……今までの戦いや記憶や魔法に影響されて作り上げられた俺なんだ」
アラガミ

「そんなどうすれば？」

「そうだよ」

ああ……そうだなならば目には目を

「なのは……俺に魔力を……！！！！」

「うんレイジングハート！」

了解 リンクバーストモード機動パワーLv3

「リンクバースト・シュート……！！」

桜色の弾が俺に向かって放たれる。

「あああああああああああああああああああああ」

よしい感じだ　いくぜトスカ。

「スターライトレーザーLv3」

ビーン

ドゴーーーーーン

「ウオオオオオン」

海で披露したなのはのスターライトブレイカーより細いが軽く3倍の威力はありそうな砲撃でアマテラスを抉る。

「が・・aaa」

「っちい」

おいおいまだかよ・・もう虫の息だったのに・・・

「バルデッシュュー!」

「!?!」

後ろからフェイトの声が聞こえたと思ったたら金色の弾に撃たれていた。いいぜ

「サンダーランスLv3」

「やったよ鏡君!！」

「ああ……そうだな……」

俺は、安堵した……だが次の瞬間嫌な予感が全身を駆け巡る。

「まだかよ……」

「オオオーン」

そうだよな。リンドウさんの時もそうだったよな。

「あゝめんどくせえ」

アマテラスは、複数の触手を束ねてドリル状にして貫こうとしてきた。

ガキン　　ガガガガガガgggggg

ギリでガードしたが……やばい盾オルケストラがもたねえ。

「ああくそついいかげんに……」

ガシッ

ふいに背中から温かい温もりを感じる。

「頑張つて鏡君……」

「鏡!しっかり」

後ろでなのはとフェイトが押し付けてる……こりゃしっかり
やんねえと……

「ありがとよなのはフェイト……よし押し込むぞ無理するがつき
あつてくれよ歌劇！スヴェルグ！」

もちろんです主
よし

「おらぁあああ！！」

おれは盾を展開したまま押し込むそしてガン前に来たら
ザンザンザン！！！！

3連劇を食らわす。

「オオオオ……」
ビュオン

「っち」

やばっ攻めすぎて防御が間に合わねえ！

カツ

急にスヴェルグの腕輪が金色に光り出す。

「え？何あれ？？」

第18話　コノ世ヲ蝕ムモノノ約束（後書き）

鏡「俺の中はケリがついた。

そしてその後俺たちと残された奴のその後は・・・」

蛟那「急ピッチでお終わらせたから公判が心配だ」

第19話〜これからの事〜（前書き）

約2カ月ぶりの更新・・・

小説まとめと浮気（新小説案）とリアルで五つたかえしてました。

r z

後半やっつけは見逃して

第19話〜これからの事〜

鏡

目が覚めたら知らない天井だった？いやなんか見覚えのある真っ白な天井だ。

「リーダー!!」

「なに？何で皆いるんだ？」

ここで言う皆とは、俺の同僚・・・フェンリル極東支部の面々の事だ。

「あゝえとただいま」

踏む元の体の大きさ・・・19歳くらいはなってるな。

俺たちは互いに情報交換をした。

魔導師の面々は魔法と管理局とその他世界について
ゴッドイーターはアラガミとこの世界とゴッドイーターの仕事について

「うーん、どうにもファンタジー要素が多いが君の身体変化。そして彼女達の魔法で信じられることのようにだね」

「そう言えばプレシアさんは病気が……」

そういえば、感応現象で見た時も血を吐いていた……あれから結構日が経ってるからどうなったんだ？

「それなんだけどここにきてから体が軽いのよ」

「起きた時に彼女達にメデイカルチェックを受けさせたのだが……その結果は健康そのものなんだよ」

「そうなんですか？」

「そして興味深い事に……彼女の体からオラクル細胞を微量にだけが感知した。」

仮説だが、彼女がアラガミに取り込まれたこと自体危険だったが、あまりに半端な寄生だったから体中をめくり同化し病気もオラクル細胞が取り込み逆に+に働いたんじゃないかなと思う」

俺の疑問に博士が答える。

どうやらこの事は双方イレギュラーで分からないが適切みたいだ。

「だけど調べてみたら本当に半端だから改めて彼女には適正のを打って安定させなければならぬな」

「半端？」

博士は確かに半端と言った。だけど元々生物のオラクル細胞に半端

も何もないんじゃないあ？

「・・・君の考えてる事も分かる。だが断言しよう、君が行った世界で遭遇したアラガミ。彼女に寄生したアラガミ双方とも人為的に造られたオラクル細胞だ」

「なっ!?!」

オラクル細胞を・・・作る？

「・・・もしかしたらその世界^{ミッドチルダ}アラガミに関する何かの記述があるかもね・・・」

俺達は言葉を失った。

だがくさいのはやっぱり・・・

「・・・もつともアリシアは死んだまんまだった」

そう言ったプレシアは顔を伏せて言った。フェイトもそんな母を見てどうすればいいかわからない顔をしている。

ドクン

キヨロキヨロ

ふと何か体に違和感を感じる・・・何だこれ？

「どうしたの鏡？」

「??？」

「あゝいやなんか違和感が・・・」

「うん調べてみたけどそんなに体に負担はないよむしろ健康そのもんだよ」

「(コクリ)」「ビシッ」

同じ顔の金髪の女の子と銀髪の女の子がそれぞれ答える。そうか俺は健康k……………?!?!?!?

「……………誰だお前？」

すぐそばにいる2の少女に問いかける。

「あつ初めましてだね私はアリシア・テストロッサです」

「……………歌劇……………」

は？

「そうだよそこにいる母さんの娘でフェイトのお姉ちゃん」

「アリシア……………私達……………ほかの人に見えてないよ」

「あつそれじゃ見せて良いよ歌劇ちゃん」

「(こく)」

アリシアはそう言って淡い光に包まれた。

その光に驚き周りの人も2人が見えたみたいだ。

「ねえ・・・さん?」

「うんそうだよ・・・ごめんねフェイト私が死んじゃったばかりにつらい思いさせちゃって・・・」

「アリシア・・・アリシアー」

「わっ!!お母さん苦しいよ」

開口一番にテストロッサ親子がアリシアに抱きついた。

「へえ・・・これは珍しい!!」

「ふむ、リンドウから聞いていたが・・・まさか本当に・・・」

「こりやまた、やっぱりうちのレンと違うな」

アナグラ組は、もう一人の少女『歌劇』を見ている。

「しかし似てるなまったくこれじゃあはたから見たらこの子たち三つ子だぞ」

リンドウさんが笑いながら茶化した。

そう、外見アリシアのフェイトは瓜二つ。良い方変えれば年の離れた双子。

そこに加わった歌劇はいわば銀髪のアリシア・・・でも俺の影響か感情が乏しいように見える。

とそこに

「こおのやるー(ドカッ)」

「何やってんだよ?」

いきなり仲間のコウタにどつかれた。

「うるせ 鏡だけこーんなかわいい女の子1・2人も!!!何だよ
ずりいよ俺にも紹介してくれよ!!!」

コータ・・・一応年下なんだけど・・・俺にしては同年代か。

「(多分後、アリシアちゃんと歌劇ちゃんアリサちゃんとすずかち
ちゃんもいそうだけど・・・黙ってみようかな?)」

コウタが間髪いれず叫んでくる。本当に女がらみだと少しうるさい。
だがそこがこいつの持ち味あんだがな。

「知るか」

「知るかじゃねー!!!」

コータが怒鳴ると同時に身体に異変を感じる。

「ぐがあ」

「えっおい鏡??」

体が熱い

ドクン

!?"?!!!

シュー

「何だ!! 一体?何が起きた?」

「おっとこれはこれは」

ツバキさんと博士が疑問と関心を口に出す。

ドグン

「またかよ・・・ぐがつ!!」

「鏡どうした!?!」

「おおっ!?! 大人になったり子供になったり・・・これはすごいね」

「ぐggg - - - a a - - a a a」

・
・
・
・
・

その後しばらく発作のように体に変化した。

博士たちが調べてくれて分かった事は、急激なアラガミ化とジュエルシードの魔力。

この2つにより俺の身体は馴染もうとしているらしい。

考えてみれば俺、21個のジュエルシード全部吸収したようなもんだよな・・・1個であの力だから・・・まあいつか収まるって云ってたし・・・

それから数日たった。

俺の体は順調に回復し今ではアマテラスの触手やら簡易カノン砲なんか出せたりする。

しかし今は、子供の体で馴染ませた方が良いので体は子供で力（魔法等）使う時は大人になると云うどこかで聞いた設定になってしまった。

そしてこれからの在り方を博士やみんなと相談したりもした。

大まかな方針は、フェイトとプレシアは此処に残る。

俺は向こうでシオみたいな対話可能なアラガミが居たら話し合う事でまとまった。

1つ目は向こうに行ったら裁判などで難しい事になるから。

でもアラガミに襲われて被害者なのだが・・・向こうでも受け入れがたいアラガミ・・・オラクル細胞を向こうがわかってくれるかどうかは半々である。

ならばいつそこちらに移住した方が良いんじゃないかとの事。

それにプレシアさんはオラクル細胞を取りこんだようなものなので今は大丈夫だがいつ発作で暴走するかわからないので、此処にいて定期検査をして新たに偏食因子を注入した方が良いだろうと言う事

になった。

そして科学者としてデバイスの応用で新しい腕輪も開発及び新たなエネルギー開発をする予定。

どんなのができるかはまだ分からない。

2つ目は、もう一つの世界にアラガミが出現してしまった事。そして極めて人為的な可能性が高いからである。

しかし今この世界でも限界なのにそれほど多くの人員を派遣できない。

だがこのままアラガミに唯一対抗できるゴツドイーターがいないのもまた問題。

そこで唯一行った事のある俺がもう一度行く事になった。それにツバキさんに「世話になった人たちの恩を返すためにしっかりと学校を卒業して来い！」と言われた。

よくて義務教育の中学までは卒業したいな。

帰る方法はここ数日エントランスで妙なエネルギーが観測されプレミアの元調査したら時空の裂け目らしい。

十中八九向こう（なのはの世界）に繋がっていると思われるためそこにでかい一撃を加えるとの事。

そのため、俺はこの数日元のメデイカルチェックだけでなく、魔法の訓練までやる羽目になった・・・正直しんどい。

そうそう、もし管理局と交渉してアースラ並の舟を手に入れたらそれはそれでこちらも移動が楽になるのでそこは気が向いたら交渉しようと思っ。

その他にも重要な事言われた気がするけど、まあゆっくり思い出そ

う。

そしてもう少しで帰る事になるため俺となのはは俺の部屋で最後の準備をしている。

といってもアイテム整理しているだけなんだがな。

「鏡、なのはいる？」

そこにフェイトが入ってきた。

どうやら最後のあいさつがしたいそうだ。

フェイト

「その……これからしばらくお別れなんだよね？」

「うん。少し長くなるかもしれない」

「でも母さんと一緒に……今度は海鳴に引っ越そつって言うてるからその時まで待ってて」

「うん。待ってる」

「あとなのはが言ってくれた事、友達になりたいって」

「うん」

「私なんかでよかったら……その、なのはの友達になりたい。

でも私、どうしていいのかわからなくて」

「……友達だよ」

なのはの言葉に一瞬キョトンとしてしまう。

「なのはの名前を呼んでくれて、なのはの友達になりたいって思っ
てくれるんなら友達。」

もう私達友達なんだよ

なのはが私の手を握ってくれる。

その手はとても暖かくて、なのはがここにいる証。

「だから、待ってる。」

待ってるからフェイトちゃんが帰ってくるの

「うん。約束する。」

大切な友達との約束だから、必ず戻ってくるから

「うんうん」

そしてしばらくなのはと抱きしめ会う。

いつ会えるかわからないから私の初めての友達。

しばらくして頭にあるリボンを交換した。

鏡

「あゝそういえば・・・」

「?どうしたの」「何?」

「ほらよっ」

2人に渡したのはコバルト色のリボンだ。

これは光がしていたリボンだ・・・

フェイトと同じ金髪になのはと同じように結んでいた……2人と比べるとかなり豪快な奴だったな……2の方がまだ可愛げがある。

部屋の隅に落ちてた光のリボン……元々リボンのして売るなのはと、あいつは金髪だったからフェイトによく似合う。

「ありがとう鏡君」

「うん。大切にする」

どうやら2人とも喜んでくれたみたいだ。

なのはは、フェイトのリボンと俺にもらったリボンで新たに髪を結ぶ。

そしてエントランス。

「アリシア元気だね」

「姉さんいつてらっしゃい」

「うん。御母さん、フェイト行ってきます」

アリシアが別れの言葉を言い今度は俺の番だ。

「よし頑張れよ」

「こっちは任せてくれていいよ。そっちもサンプルがあったら回収してくれないかな？」

「そんじゃお前さんもしつかりな」

「頑張つてね。応援するから」

「可愛い子いたら教えてくれよ！」

「こっちは任せてください。」

「一人でもお前なら大丈夫だろう・・・まあ俺たちも一緒だから安心しとけ」

仲間から声をかけられる。

俺は「ありがとう・・・行ってきます」とだけ言う。

ほかに言葉を言いたかったが、正直気恥しくなり言葉を切る。

「スヴェルグ！アリシア！」

<了解主！！！>

「OK任せて！！！」

スヴェルグを起動しB」を纏い更にアリシアの魔力を乗せる。
歌劇の意思によりオラクル細胞を活性化。

金色と黝い光が幻影大剣を包む。

「いくぜ！神破一閃！！」

時空の裂け目に俺の渾身のCCCを叩きこむ。

ピキシ

「おっ？」

ガチャーン

空間が割れて黒い空間があると思った瞬間。

「うわっああああ」

「きゃあああ」

俺となのはは吸いこまれた。

プレシア

「じゃあ始めるから待っていてください」

「ああ感謝する。各自もう少し待機してろ……！」

対策していたとはいえず予想以上の反動だった。
今私は、あの壊した裂け目を持てる技術のすべてを使って修復している。

調べた結果、繋がって入るがそれはとても小さくとても人が入れる大きさの裂け目ではなかった。

仮に壊したらブルー地区ホールのように吸いこまれるのがオチなのはすぐに分かった。

でも私には隠ぺい用に時空を修復する魔法式があったのでそれを応用して修復は可能である。

だけど完全には塞がない。完全にふさいだらその世界とは完全に切れてしまう可能性が高いから。

この世界は時空管理局みたいに自由に時空を行き来、出来ないだからこそ不完全ではあるが100%中98%修復。2%を放置及び観測という結論に出た。

その吸引力に負けないように見送りをする者は、古典的だが地面の出っ張りなどに縛り付ける対策を取った。

この世界の技術だとこれが限界だろう。

私はすぐに動けるように地面に張り付く魔法を使っている。フェイトは長時間そんな事できない・・・というか保険として私に魔力を流す役もあるのでほかの人と同じようにしている。

アリシアは、あの男と一緒にいることを望んだ。それは彼の神器とリンクしているから。

それはあの男・・・ 暁鏡の神器だからこそ暁の力になりたい広い世界を見たいと言う。

それに私が元気になって自分が力を付けたらまた一緒にいようと
言ってくれた。
そう今度は、私とアリシアとフェイトとアルフの4人で……
アリシアは暁に任せて……私はフェイトと一緒に暮らそう今
まで事の贖罪と一緒に。

鏡

ドッカーン

あれどこどこだ？
ってあれ？

「何だこの親近感？」
デジャヴ

何か前にもこんな耐性があったような……

「ふにゃーあれ此処もしかして？」

どうやら高町家の道場らしい。
アナグラからこの家につながってるのか？

ドタドタ

又何か駆け抜ける足音が聞こえる……

「なのは!?!」
「鏡君!?!?!」

恭也と美由紀がなのはと俺の名を呼ぶ。
そして

「おかえりなさい」

桃子さんの言葉に俺たちは

「「ただいま」」

さてと問題は色々ありそうだけど……この先何かあるかな？

「何考えてるの？」

「ああ……先の事なんだが……まあいい面倒だからいいや……」

「むう」

最後の最後でなのはに本気で嘔まれた。

第19話〜これからの事〜（後書き）

エピソードは明日にでも

無印エピソード〜1つの終りと1つの始まり〜(前書き)

蛟那「無印はこれで終わりです」

あとは少し中盤でやった語りをやってA S入ります・・・A Sの真ん中の点どつちやって書くんだ???.」

無印エピソード〜1つの終りと1つの始まり〜

?????

「ふむ・・・ではやはり、リンディ・ハラウオン提督の報告どおり、『クロノ・ハラウオン執務官とユーノ・スクライア以外は虚数空間に落ちた』でいいのかの？」

「はい、そうなります」

僕は、あの場で監視を続け事の一部始終を見た。途中のアラガミ化は驚いたが、まさかそのまま2人を残してそのまま鏡数空間に落ちた時は、生まれて初めて驚いた。

あのプレシアの娘の使い魔と思われる狼はあのアラガミが落ちた瞬間、後を追うように落ちた。

だが僕が興味を抱かせるのは彼だ・・・

やはりあの男は、“オリジナル細胞”の持ち主だろう・・・完全に管理外世界だろうな。

「ふむ・・・それで反応はさっきの男以外にもう一つあるんじゃない？」

「はい。もう一つの反応は、例のロスロギアの監視区域です。

恐らく、“あれ”と一緒に」と

「迷惑な話だ・・・最悪責任は、こそこそ何かやってるあの男に押しつけておくか。お前は任務を続行させる」

「はっ」

そのまま通信を終えた。まったく漸くターゲットが来たと思ったら
変な事に巻き込まれているし今度の反応は”あの”第一級危険物と
一緒だし・・・どうなってるんだよ。

「プロジェクトG・・・この計画に支障が出なければいいが」

まあいい・・・どちらに転んでも僕は、ただ従うのみ・・・僕
に感情などないのだから・・・

P T事件報告書

ジュエルシード暴走についての概要。

本事件はP T事件と呼称する。

先ず初めはクライア1族の1人ユーノ・スクライアがジュエルシ
ードを発掘し・・・

(～中略～)

時の庭園にてアラガミと呼ばれる生物に遭遇。

そしてプレシア・テストロツサと対峙。

しかし混戦の末、プレシア・テストロツサ、娘のフェイト・テスト

ロツサ、民間協力者の高町なのは、同じく暁鏡が虚数空間に転落。探索は不可能。

被害

アースラ魔導師

(中略)

以上。10名負傷

(中略)

以上10名死亡

民間協力者

高町なのは

暁鏡

フェイト・テストロツサ

アルフ

プレシア・テストロツサ

以上5名虚数空間にて消息不明

戦果

なし

ジュエルシードも21個全部落ちたものと考えたものとする。

作成者・リンディ・ハラウオン エイミィ・リミエッタ

クロノ

P.T事件後しばらく探索を行ったが、結局手がかり一つなく探索は打ち切り、上への報告書を作成した。

もう1週間は音沙汰ないのでさすがに家族にこのままという訳にもいかない。

「・・・少し鬱だが…仕方ないか」

これから、なのはの両親になのはと鏡の事を説明しに行くのだが・・・

「何でお前は何気ない顔で戻ってきてるんだー！！！！！」

「なんでって生きてるから戻ってきたんだが・・・」

そう、何故か死んだ(？)と思われた、なのはと鏡が普通に翠屋にいた事だった。

「実はな・・・」

説明中 (19話みてね)

なのは

「ありがとうございました」

小学校の制服を着た人を見送る。

どうやら学校中で翠屋のデザートは人気見たい

店の中の奥で鏡君がアースラの人たちに説明している。

フェイトちゃんの事でクロノ君が怒り狂ってる。

うーん周りのお客さんに迷惑かけなきゃいいんだけど……

後アリシアちゃんと歌劇ちゃんについてはリンディさん達には言うけど出来るだけ秘匿してくれっってお願ひしてる。

リンディさん達は信用してるだつて。

カラン

「あついらつしゃいませ」

またお客さんが来た今度も同い年くらいの子だでも目に眼帯かけて少し特徴がある。

「ああ〜そうだな……ケーキの予約つてでき……ますか？」

少し口ごもりながら敬語で言う。

お母さんから聞いたけど、この手のお客さんは口が悪いけど優しい人らしい。

「はいそれなら……」

お客さんは、こつこつという店が初めてらしく、戸惑っていたが色々紹介してイチゴのショートケーキで落ち着いた。

「俺個人はチョコがいいが・・・それは後でもいいな・・・んあこれは？」

「シュークリームです。おひとついかがですか？」

紹介したら買ってきてくれた。

「ありがとうございました」

「ああ、あんがとよ」

カランカラン

そのお客さんで最後らしく、お母さんが聞いてきた。

「それなのは。さっきの人の予約はいつなの？」

「え〜と来週の6月4日」

?????

「大猫だぜ！」

俺は、店を出て叫んだ。

少し周りの目があるが気にしねえ。

しかし、本当に海鳴は何でもあるな。

最初に案内された図書館で少し勉強して、少し歩いたら広い公園。
今日はこんなうまそうな店まで発見した。

「早くこれ食べてみたいなあ甘いものは良いぜ」

「何一人でブツブツ言つとんねん」

ふと回ってみると車いすの少女がこっちを見て頬を膨らませていた。

「ああわりいわりい・・・少しな」

「なんや前みたいな化け物出てきたらどうすんや？」

「そんなときは俺が何とかする・・・よつと!!」

「きゃあ」

俺は、車いすの後ろに回り取っ手を持ち加速した。

「ほら急ぐぞ。今日はシュークリームつての早く食べたいんだ」

「あほかー！ーあぶないってー！ーまえまえー！ー!!」

そうさ”あの時”此処に来た時から奴らに対抗できるのは俺だけだ。

何が何でも守ってやるぜ!!

無印エピソード〜1つの終りと1つの始まり〜（後書き）

鏡「？なんか最後の砲誰だあれ？？」

蛟那「あつ言つとくけど鏡含めてストライカーズまで8人ぐらい主人公いるから」

鏡「それは俺は楽でいいな」

蛟那「書いてる方は死ぬけど・・・ではまた次回！」

無印く追加キャラく（前書き）

約2名の紹介で後一人います

無印く追加キャラ

名前：アリシア・テストロッサ

年齢：9歳（鏡の年齢によって変動）

服装：白いワンピース

好き

お母さん・フェイト・鏡きょう・アルフ・スウィーツ

嫌い

好きな人をいじめる奴・無視・辛い物

性格：幼くなく亡くなったため、そのままかと思いきや生体ポット内でも意識があったため年齢以上に大人びている。
が生体ポット内にいた為外の常識がわからない事が多々ある。

名前：歌劇

容姿：銀髪のアリシア・フェイト。但し目はうつろ

年齢：見た目10歳（鏡に合わせてる）

服装：黒いワンピース

好き

アラガミ（ご飯）・鏡・初恋ジュース・神器達（仲間達）

嫌い

鏡をいじめる奴 シュンの神器（うるさい）

性格；無口で表情が乏しいが決して感情がないわけではなく話下手で話せても一言ずつ。

たまに表情が百面相になり面白い事も。

元は別の体系モデルだったがアリシアが介入して親しみやすいようにまねた。（アリシアは快く了承）

レンが聖身体で活動していた（GEB）時に鏡と戦っていたので少しレンに嫉妬して一時期口を利かなかった時期がある。

名前

東陽 光

容姿

身長 140

年齢 享年13歳

<ゴツドイーターキャラクターエディット番号 上から>

ヘアスタイル 8

ヘアカラー 4

フェイス13

スキン1

ボイス3

勝気

<好き>

スウェルグ
子猫 暁鏡 施設の皆

<嫌い>

生きる意思のない奴 元気がない奴

服 プログレスストリート

声

安田早希

性格

大雑把な性格で暗い両親のために明るくふるまい弱いところを見せないうおうにしている。

鏡とは近所で鏡を弟の様に接する。鏡にとっては憧れの義姉。

アラガミを倒そうとした暴動者の爆弾に巻き込まれて死亡。(余談：
その爆発で生き残ったのは襲ったアラガミと10歳未満の子供だけ)

口癖『生きてる事から逃げるな』

ツインテールで鏡の髪と同じ色のリボンをしている。金髪

無印く追加キャラく（後書き）

まさかの水樹奈々さん一人三役設定。

番外編

遅くなったがこのまま行きます!!

10話〜19話まで

第10話〜届かない声〜

蛟那「この話は少し詰め込んだ・・・というよりもアラガミの名前とアリシアの接触書きたかっただけ」

なのは「私の話は？それにアリサちゃんにすずかちゃんの事も・・・」

蛟那「そこはまた後で説明するから大丈夫だと思うよ」

483

第10・5話〜夕刻の間〜

蛟那「初めはすぐに11話行く予定だった」

キョウ「でも挟んだな？」

蛟那「あ〜うんその前の感想で『アラガミの被害はどうなるの？』と意見があったので即興なりで考えた結果だ」

キヨウ「あのフェイトは？」

蛟那「あ、うん少しギャグ方面が少なかったからかつとなった」

第11話〜炎仁の誇り〜空への魔法

蛟那「初めはストレージデバイスの予定だった。だけど説明役で急遽変更した」

キヨウ「別にいと思うが……なんでだ？」

蛟那「一応アリシアいたから」

第12話〜鏡の軌跡〜遅れてきた第3者

キヨウ「説明して……なのはが怖かったただけだ」

蛟那「ほかデバイスは名前考えられるけど……少し迷ったなこの名前は」

第13話〜嵐の炎帝〜今後の方針

蛟那「説明だけで実はハンニバル出てない」

キヨウ「じゃあ何故出した??？」

蛟那「本当は別にクロノが突つかからなきゃOKだったんだけど……」

・ASでちょっと・・・ね」

キヨウ「？」

第14話〜未確認生物〜戸惑う者達

蛟那「初見のアラガミって結構怖いと思う」

なのは「怖いよー」

キヨウ「いくら耐性会ってもきついからな」

蛟那「あくまでゲームみたいなものはなく・・・速効で喰われたら終わりですから」

????「メタヤーー!!!」

第15話〜背景の影〜

キヨウ「一応此処の肝は最後の奴だな？」

蛟那「ええ、この人は大体ASの次の次には出てくるかな？」

キヨウ「（えらく中途半端）」

第16話〜猿の肝〜異変の兆候

第17話〈原初の螺旋〉懺悔の言葉

キヨウ「又お約束なやり方だな」

蛟那「プレシアが何処らへんに融合させられたか分かってくださうたら幸いです・・・」

キヨウ「何度も表現なおしたからな」

第18話〈コノ世ヲ蝕ムモノ〉約束

キヨウ「大体バーストの終盤そのままだな」

蛟那「一応このネタもう少し続けます」

第19話〈これからの事〉

蛟那「無理矢理まとめた結果がこれだよ!!!」

キヨウ「もう一つの案はどんな結末何だ？」

蛟那「一応アナグラに行かずなのは地球に戻る予定でしたが・・・プレシアさんに向こうに移住させるのとフェイトは気まぐれにテストタロツサで良いかな?と思ったのがこの結果」

蛟那「総評で見てみたら」、『
』等の書き方が甘かったorz

番外編（後書き）

後少しで・・・プロローグ乗せれると思います

（ガク

ブローグ〜クリスマス〜2人の出会い(前書き)

蛟那「やっと来たぜAS編!!」

オリジナルアラガミ多数予定!!」

はやて「速度は？」

蛟那「亀(キリッ)」

はやて「アホか!!」

プロローグ〜クリスマス〜2人の出会い

12月23日23時58分

八神はやては、今一人家にいる。

「……………」

キーコーキコー

その家は、人の言葉よりも車いすの音がよく聞こえる。

もう何度目かの一人の夜を過ごしただろうか？彼女は覚えてないだろう。

「……………あつ？」

最近の悪い癖で、夜更かししてしまいもうすぐ12月24日……………
・クリスマスである。

はやて「結局今年も一人か……………」

石田先生も急患で出向けられなくなり今年は一人と覚悟していたが。

「やっぱり一人は・・・さびしいなあ」

少し震えた声でハヤテはつぶやく。

12時になりクリスマスになった。

ドガーーーン

ゴロゴロゴロゴロ

突然の爆発かと思ったたら地震が起きハヤテは転んだ。

はやて「あいたくなんや今年是最悪やな、恨むでサンタさん」

とはいっても近くに誰もいないが手を伸ばしたら・・・

ガシッ

・・・何か掴んだ

「へ？」

明らかに人の腕

「なっ I g g h g g g y h なんやこれ??？」

慌てて部屋の明かりのスイッチを探し

そこに居たのは同じ年くらいの男の子だった。

「うっわっおと大丈夫？」

???

俺は昔家族を失った。

あの化け物どもに全部喰われた。

だけど俺は力を手に入れた。

だけど

俺は許さない……その計画は人間を守るために造られた

人間のための計画……

許さない

「い、おい？」

遠くから声が聞こえる

「……ici」

「あつ気がついたか？」

「H? quie st - ce que cest tu??」

「さっきから何言つとんのや?日本語で話してくれないかな?」

ニホンゴ……話すのはガキどもと別れてからだから半年振りか。

「ああわりいな。それで此処は何処だ？」

「ここは海鳴市やで」

「海鳴？大陸で言つと何処らへんだ？」

「大陸つてどこの事言つとるんや？」

茶髪の少女はあきれ顔で尋ねる。こつちも少しイラついてきた。

「どこつて・・・ユーラシア大陸だが」

そこ以外どんな大陸があるんだよ。前の講義で、オーストラリアは潰れかけてるつて聞いたからそこか？

「さつきから何言つとるんや？此処は日本の海鳴市やで！」

日本・・・確か東の島国で俺の生まれ故郷だった国の名前。

「しっかしあんたあたしと同年なのに結構英語（？）うまいな」

「なっ！?!」

バツと俺の体を見直したら10歳くらい若がつて縮んでやがる！
というか俺のこの体どうなってるんだ?????

俺の身長もう少し大きかったはずだが・・・一体どうなってるんだ？

「そつだ言い忘れてたわ。私は八神はやてやあんたは？」

「俺はマクモ 御劍麻雲だ」
みつるきまくも

・分からねえが俺は俺だ！そこは曲げないで名を名乗る……

リンリン。

「何だこの音？」

何かなじみのない音がする。が、悪くない。

「あつこれクリスマスの音やで」

「くりすます？」

何かを苦しめるとか？

「あゝその顔はありがちな『何かを苦しめる』つちゆうポケやな？
全くそんなんじゃないや？素でも駄目や」

いやポケでもないんだが……つーか素でもって何だよ！！？こ
ちとら真剣じゃい！！

「ふう〜こうなったらこの八神ハヤテ様直々に説明する必要がある

な

その後みっちりクリスマススの事を講義されたが途中で「此処でボケは　　そんでツツコミは！！！」と漫才論議になってしまった。

俺が一体何をした。

はやて

「いや〜久しぶりに話したわー」

時計を見たら午前六時。いやー小鳥がチュンチュン鳴いとるで。

「あ〜今になって瞼が重い〜ってあかんあかん今日は朝から忙しいんや」

今日は楽しいクリスマスや！あつそうだ、麻雲君にはちゃんとケーキ食わせたる。

「・・・もう寝かしてくれ・・・」

にしてもほんま久しぶりに楽しかったな。先生と一緒にでも此処まで話弾むことはそうなかったし。

まあ原因は暇な私と違って先生は忙しいからな。

「さてと！今日から張り切って行きますか！」

「……顔洗ってくる」

あれ？少し無視したら諦めてくれたかな？

「ああじゃあ部屋出て右の部屋な」

「あいよ……ああそれと」

麻雲君は何顔も出したように言ってきた。

「最初の奴は英語じゃなくてフランス語だ。その区別はあとで教えてやるから覚悟しとけ！！！！」

そう言っつて洗面所へ向かう。

あゝどうしようあたし英語も苦手なのにな

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「あれ??なんか忘れてるような・
・

「あつ神器がねえや」

ブローグ〜クリスマス〜2人の出会い（後書き）

蛟那「また同じオチ」

はやて「ふふふ・・・同じボケは二度も通じんのわかつとるんやろな？」

蛟那「とりあえず元旦までは考えてるので・・・」

麻雲「そんで俺たちの予定は何だよ？」

蛟那「遅くなつたから適当に飛ばします・・・大体PT事件まで」

主人公設定（御剣麻雲）（前書き）

蛟那「少し早いかもしれないけどのせます」

麻雲「確かに・・・てめえ何かミスったな！！」

蛟那「実は最初の処麻雲の容姿について触れるの忘れてたww」

麻雲「しっかりしてくれよ全く」

主人公設定「御剣麻雲」

名前 御剣 みつのあまぐも 麻雲

容姿

眼帯 髪の色 白

左目＝眼帯（幼少の時アラガミにより負傷）
右目の色＝青

身長 A S＝165

S＝180

年齢 19 9

<ゴッドイーターキャラクターエディット番号 上から>

ヘアスタイル 6

ヘアカラー 7

フェイス 4

スキン 7

ボイス 18

<好き>

家族 チョココ系 音楽 心の澄んだ奴

<嫌い>

食い物を残す 家族を失う事 騙す奴

服 家 ブルゾン(クラウド白) 外 コート(ブラッディ赤)

声 島?信長

性格 一々五月蠅く、あらぬ誤解を多数つける、だが根は素直でいい奴

気に入ったやつはいい兄貴になるが、気に入らないと上から目線で非協力的

ヨーロッパ支部に居る新型神器使い。時系列的にバースト開始ぐらいに活動していてそれなりに実戦も出ている。

ヨーロッパに居たが日本人で極東には外部居住区に生まれた孤児院があるためちよくちよく遊びに来てたりする。

帰郷中に次元震に巻き込まれ次元転移。時系列的に鏡の転移事故の1週間前。

口癖『ざけんな』

武器 神器(朧)

刀身

ロング

(ケーニヒスベルク 絶) 〆 3300 0 0 神3000 神 .

爆 総合被ダメージ減少 アスリート 〆

(神蝕剣タキリ 新 絶) 〆 3000 0 0 神3200 神 .

爆 総合被ダメージ増加 スタミナ 大 剣の達人 復讐への憤怒

〆

銃身

アサルト

(虎銃 帝王) 〆 4000 3600 1000 1000 〆

4500 2500 捕喰吸収量 捕喰弾丸効果 整息 〆

装甲

バックラー

(セラフイム 衛) 〆 7000 7100 6400 5900 5900

5900 5900 体力 小 リーク無効 ジャミング無効

スタン無効 〆

白

発動スキル

総合被ダメージ減少

スタミナ 大

剣の達人

復讐への憤怒

捕喰吸収量

捕喰弾丸効果

整息

リーク無効

ジャミング無効

スタン無効

主人公設定「御剣麻雲」（後書き）

また後日更新予定です

第1話〜新しい思い出〜（前書き）

蛟那「セリフ回しが安定しない」

麻雲「俺より今日の方が書きやすそうだな」

蛟那「まあ否定はしない・・・早く安定させないと」

第1話〜新しい思い出に〜

麻雲

「知らねえ天井……じゃあねえなもう……」

あの講義の初日から数日、色々と驚いた事があった。
まずアラガミがない。これは俺の世界じゃあ考えられない事だ。
それに乗じて世界が平和だということも見て取れる。

細かいところは平和じゃないらしいが、詳しくかわからん。

まあそれから家の掃除したり買い物に付き合ったり飯食ったりと色々慌ただしかった。

まあ、そんだけ同じ場所に寝てりやもう慣れるっての。

508

「さてとはやての奴は何処だ？」

早速この家の主様に今日もご挨拶しねえとな……

リビング

「あっおはよ〜」

「おう、おはようさん」

リビングに降りると、車いすの少女が朝食の準備をしていた。

この家の主の八神はやて……この数日で分かった事は、両親を事故で亡くしてその時足も不自由になった。

それから現在まで一人という事だ……チツ一人はつれえんだよな全く。

「おいおい今日の朝飯何だ？又トーストか??」

「そうやで。少し待っててな」

「ああいいぜ。あのバターの味わいつて何かいいなあ」

「はははっ、それなら後で卵焼いといてくれてえか？」

朝はトーストとシンプルだがトウモロコシよりかは良い。

あの焼かれた後の黄金色の見た目と香ばしいにおいが良いもんだぜ。

ちなみに俺が作る時は、火が危ないはやてのためにベーコンエッグを焼いてやつたりする。

「ほら出来たでえ」

「おおこれまた綺麗な黒いトースト……ってなんじゃこりゃああつあ……!?!」

トーストの表面がパリパリの真っ黒になってやがる!!昨日までの黄金色は何処に行った……!!!!!!

「あつでもいいにおいだ」
焦げた訳じゃないな・・・これは・・・甘いにおい？

「じゃーん昨日買い物時セールで売ってたチョコチューブやこれはこれでおいしいで」

「チョコ・・・だ・・・と？」

チョコは確かその原産国がアラガミに覆われて無くなったもはや空想上の食べ物・・・今じゃチョコのアラガミがいるとかいないとか噂になっている。
それはそうと食べてみる。

「（パクッ）」

ムシヤムシヤ ゴクン

「なんやどつした？」

「あめ〜」

「甘いぞ！そしてうまいぞはやて！..！」

普通の食事の甘いものは精々少し甘みがある程度で・・・そうコク（？）という物がなかったんだらうな・・・

「そうやる。いやーそんなに喜んでくれるとは思わなかったで」

そして俺は、はやてにベーコンエッグを焼いてやる。

はやて

「いやー朝から良いもん見れたわ」

「ほつとけ」

そつぽを向いて渋る声を出す。

いつもギヤーギヤーとキレたように怒鳴るが、ここ数日見て思ったのが言葉足らずで不器用で・・・恥ずかしがり屋だと結論付けた。それを当人に言ってみたら「何勝手に言ってるやがる！！！！」って怒鳴られたけどそれも面白かったなあ。

「それより今日夜に出かけるで」

「ああ昨日言ってた『大晦日』と『初詣』だな」

「そうそう。今夜いくで」

「おう」

今年は久々に初詣に行くとして、覚えてるかな？作法・・・後で先生に聞いてみよ。

海鳴神社

「
3、2、1
」
『ゴーン』

「あけましておめでとつ」
「あけましておめでとつ」ぞいます

俺はぶつきらぼつに、はやては柔らかく挨拶した。

鐘の音と共に周りも挨拶し始める。

「いや、色んな人居るな」

「ああ此処までとは思わなかったな」

パンパン

えーと神様にあいさつだったな・

「（神様早く死んでくださいと）」

「何お願いした？」

「ああ秘密だ」

「なんやずるいで」

頬を膨らませてもさすがに言えねえな。

しばらく歩いていたらすぐ近くに大きな歓声が聞こえた。

『いくぞー』

『おおおー』

みると、大きな樽？桶？みたいな物のふたを叩き割っている。

「あれは？」

「ああお酒やね鏡開きのまねごとやと思うけど・・・まあ子供の私達には関係ない事や」

酒か・・・確かビールもどきがあったが俺には合わないが、こっちの酒は合うか？つーか飲んでみてえ。

「駄目やで未成年じふねんは法律違反やで体に悪いし」

「分かったよ」

今は我慢しよう今は・・・な

どん

「あつすみません」

暗かったせいかわりの男達にぶつかってしまった。

「いてーなおい」

「どうしてくれんだよ痛いってなおい！」

なんか面倒な奴にかられたな・・

なんかこいつら居住区内にいるゴロツキと変わんない感じがする。

「いくぞ。相手にするだけ無駄だ」

「そやね」

俺たちはさっさとその場を抜けようとしたが

「うるせーガキがその足でよくここまで来れたな！」

ピシッ

「まったk」

ドゴッ

「がつ」

男が次の言葉を発する前に俺は間髪いれず男をぶんなくる！

「何だよこのガキが」

「俺学なんてねえけどよお良い大人が子供いじめんなおっさん！！」

「！！」

足の事触れた時、はやてが傷ついた感じがした。

「ガッ
」

「ぐぎぎー・・・」

「嘘だろ・・・あいつ70キロはあったんだぞなんであんな・・・」
苦しみながらも持ち上げる麻雲を取り巻きの男たちは啞然とした。
ちなみに持ち上げた男はすでに白目をむいていた

「落ちろー！ー！ー！！！」

「どぐわっ！？！？」

ドッポーン

そのまま下の酒樽に落とされ沈んでいった。

「ヒッ
」

「につにげ」

ガシッ

「まあ待て待て・・・お前らもゆっくりして・・・こい！！！！！」

麻雲はそのまま最初に落とした男と同じように次々沈めて逝った。

全て沈めた麻雲は急いではやての処に戻る。

「無事か？はやて?!?!」

「んども」

だがさすがに騒ぎが大きすぎたか周りの外野が集まってきた。

「げっ！やべえ早くズらかるぞはやて！」

そう吐き捨ててはやてを押し出店を回った。

しばらく、微妙な空気が流れたが。

「かつこよかったでありがとな麻雲君」

「おおありがとな」

はやては麻雲の顔を見ようと上を向いたら恥ずかしさのあまり顔を伏せていた麻雲と至近距離で目が合う。

「きゃっ???!?!?!」「うおう???!?!?!」

がちやんと何かが倒れる音がした。

麻雲

「しかし回ったら朝になったな」

「そやね」

あの後仕切り直して出店を回ったら朝日が登ってきた。
それでさすがに疲れたので帰ることにした。マジでだりい。

だが『初日の出』というのは見れたからよしとしよう、これはこれで良いもんだ。

「でもうれしそうやね」

「まあな。でもいろんな奴がいるな」

周りを見るとひとときわ目立つ5人の家族に目がついた。どいつもこいつも若く見えた。

それに気になったのは、同い年くらいの女の子で・・・はやてが負けるくらい・・・そのくらいの女の子がいた。

その後ろでは、同い年くらいの奴がフラフラ付いてきている。

「何だ酔っ払いか？」

「未成年（同い年）やで？」

「それもそうか」

そんな談笑しながら俺たちは帰路に着いた。

「それはそつと私は買けて入るで・・・」

（ゾクッ

第1話〜新しい思い出に〜（後書き）

はやて「案外これ初めの段階で考えてたんやろ？」

蛟那「うん。御剣麻雲という主人公の存在はあった。

次は鏡より早いけど神器行ってみます」

はやて「うちら学校行って辺からな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8715r/>

神喰らいと魔法少女と ~魔法少女リリカルなのは×GOD EATER BURST~

2011年11月21日20時05分発行